自國を以て半植民地、全植民地ならまだしも、一國とて保護する者もなき入會地即ち次植民地（次長、次亞燐の次なり）なりと奮慨しながら、蘇聯を外蒙に曳入れ、嘗ては滿洲全部と朝鮮の北半とを勢力圏に收め、當時尙長春以北に蟠居し居りたる蘇聯に自國を引渡し、爲に門戸開放主義の障壁を越へて我國の大陸に進出するを餘儀なからしめ、其の上にて我方を阻止せむが爲に驅日興邦を意圖して、聯露容共に加ふるに、歐米依存聯盟依存以夷征夷に乘出し、結局興歐滅亞の陋策に墮して行つたのは折角の救國主義を亡國主義に變改したものと云ふべきである。尙世界弱小民族を扶持し、列國帝國主義と抗爭するなどとは支那の現狀に照し民族主義の「ドンキホーテ」であると評さねばならない。

佛蘭西の今日の政情を見るとき誰か「ルイ」十六世其の人の刑戮を値ひしたりしや、血で血を洗ふ大革命を通して佛蘭西人は果して自己實現と興邦とを克ち得たりやを疑問にせない者があらう。併し歐米心醉者孫文は自由は國家の自由を求むる民族主義であり、平等は人民の政治的地位の平等を求むる民權主義であり、博愛は四億萬人の幸福を求むる民生主義であると前置し、進で「大衆は帝王なり」とまで煽動的言辭を弄した。彼は人民に選擧權、罷免權、創制權、複決權を含む政權を認め、其の監理の下にある政府に司法權、立法權、行政權、考試權、

彈劾權を含む治權又は政府權を認めた。併し此の泰西立憲政治の公式が支那の實情特に黨國の强權獨裁の要請に合はないので、彼は人の能力に先知先覺、後知後覺、不知不覺の別あるを認め、天生の不平等は能力に應じて服務すると云ふ道德心の發揚に依り平等になると詭辯を弄して權力者を正當化した。彼は更に軍政期、訓政期、憲政期の別を認むることに依り、此の詭辯に對する大衆の反擊に備へて居る。

此の民權主義が淸朝や、封建的軍閥と國內的に戰ふに際し民族主義の國內的要請と一體になつて働いたことは事實であるが、他面に於て農民、勞働者、學生等を匪團化せしむるに役立つた。想ふに民權思想は支那に最も古くより萌芽を出し、孫文の引用する所の如く孔子は「大道行也、天下爲公」と云ひ、孟子は「民意貴、社稷次之、君爲輕」と云ふて居る程である。併し支那にはもつと高次な體系づけられた王道なる政治理想がある。實用向に歪曲された王道は簒奪者たる英雄的帝王の君權と大衆とを結付ける爲に賢人に依り利用されて居る。併し眞正の王道は聖者と聖者との交替政治を意味し、夫は決して個人主義を背景とした君主專制でも、數量の專制でもなく、質量の精神的結合とも云ふべき全體主義の理想的形態である。歐洲社會を混沌瓦解に追ひ落さむとして居る獨太系の民權主義に隨喜して、生れ出でむとする全體主義と生

きたる王道とを把握し得なかつたのは孫文の後知後覺たる所以である。日本の民族精神を讃歎する彼は皇道を離れて日本の民族主義の存在せないことを確知すべき筈ではないか。然るに彼は一律に民權時代は即ち君民鬪爭時代にして、其の結果は君權の消滅に終はるべしとなして居る。我が世界に冠絶せる國體と彼の民權主義とは決して兩立するものではない。彼の黨國が人民戰線、民主主義戰線に屬して排日を事とすることは決して故なしとせない。

王道の實踐的內容としての民生主義は屢々聖賢の書にも歷史にも現はれて居る。然るに孫文の夫は依然として舶來品である。彼に從へば本主義の目的は民有、民治、民享の全民政治を布くにある。彼に從へば地權平均は土地差增稅の原理を應用したもので地價差增の國有化を企圖したものである。彼に從へば資本節制は獨占又は大規模事業（銀行、鐵道、航路）に限り國營とすべき事を提唱する。彼に從へば人民生活改善は農事指導、保護主義に依る產業の勃興、土木事業の計畫的實施、敎育の普及、救貧保健事業の實施を意味する。以上彼の說く所は修正派、社會民主黨の說く所にして、彼が「マルクス」主義は中國に行ふべからずと云へるに吻合して居る。然るに失意の政略家たる彼は、民族主義の基礎的要請を無視し、蘇聯勢力利用の爲め、「ヨツフエ」約する所の露華條約の廢棄に隨喜し、中國の國內統一、國家獨立の爲め露國

民の同情及び援助に依賴し、露軍は外蒙より撤退するに及ばずとなして、外蒙を聯露容共の人質となした。玆に於て彼は全く政治屋たるの本領を發揮し、「民生主義は即ち共產主義であり、社會主義でもある、故に我等は共產主義に對し民生主義と相衝突すと云ふ能はざるのみならず、實に之れ一良友である、××××國民黨の共產黨反對の理由は何處にありや」と述べ、「共產主義は民生の理想であり、民生主義は共產の實行なりと云ふことが出來よう、故に結局この兩主義には何等區別はない」と說くに至つた。玆に於て「マルクス」は「ルソオ」、孔子と聖を爭ふことになり、彼の民族主義は正反對の共產主義即ち階級的國際主義の蹂躙する所となり、少額の銃砲、金錢に替へて中國は露人顧問を含む共產黨に引渡された。此の頃日本が資本主義的財閥と自由主義的政黨とを容れた金魚鉢の如きものとなつて居らなかつたならば、吾人は現在もつと順境に立ち得たであらう。そは兎に角、孫文の死後彼の學說は全く定型化して順應性を失ふて行つた。蔣介石は武將として今や偶像となれる孫總理の遺訓を改變すべくもない。國共は一度乖離したるも、昭和十一年末の西安事變を契機として一層堅く提携した。されば「レニン」が革命を東方に於て決すると云ふとき其の鋭鋒はソ聯と對蹠の原理に立つ、我國を始めとし、歐米帝國主義國に向はざるを得ない。而て北伐軍は當初英帝國主義との間に火花

を散らしたのであるが、孫文主義の背景をなす歐米追隨東洋否定の精神、歐米帝國主義國及び國際聯盟の東亞領導、山東攻略後の我が國策の分裂及び歐米追隨は右の打倒帝國主義の鋭鋒を專ら我國に集中せしめた。此の傾向を不退轉にしたものは第七回「コンミンテルン」大會の「日本獨逸へ攻擊を集中せよ」との指令であつた。孫文主義、國民黨政綱は聯露容共、歐米依存、聯盟依存、以夷征夷、遠交近攻、抗日、排日、侮日に結晶した。孫文主義の實踐は滿洲事變、日支大事變を產まざるを得なかつたのである。

以上の如くにして理論上實際上二重に歪曲された一點の創意もない孫文主義は夫にも拘はらず、黨國の黨化教育、排日教育に依つて徹底的に社會各層の間に侵潤して行つた。日本の人口的、經濟的、政治的壓迫を高調して民族精神の高揚統一、特に軍隊の中央化に資した。今迄は內亂たる軍閥の衝突は前哨戰で片附いたものであるが、現在反蔣側には有力軍閥一もあることなく、黨國は地方政權に墮して尙中央的勢力を保持してゐる。現在維新臨時兩政權の勢力圈內に在る者も時に其の進退に付蔣介石の諒解を求むるとのことである。第五中全會には共產黨は勿論第三黨、中國青年黨、國家社會黨も之に參加したと傳へられ、敗戰の場合に認められる遠心力の動きを認め得ないのは奇とするに足りる。臨時政府、維新政府等の軍隊は未だ起ち上る

に至らない。從て現在の日支大事變は中國に取り全く空前の民族戰爭となつて居ると認むべきである。併し滅邦滅亞を結果する爲めに支那の民族主義が嘗てない程高翔して居るとは何と云ふ皮肉であらう。東洋人全體は覺醒せなければならぬ。

八、新民主義へ

孫文主義は世界の赤化、世界の歐洲化、西力東漸に役立ち、驅日興邦を意圖しながら、後門からソ聯勢力と歐米勢力とを引入れて半植民地たることを强化し、結局支那に取り滅邦滅亞を招徠することとなるのであつて、自國の存立を全ふし天壤無窮の皇運を扶翼すると共に、東洋的東亞保全の使命を自覺し、東亞の安定勢力を以て任ぜむとする帝國の決して默視し難き所である。孫文主義に一面無害又は當然の部分があらうとも夫は一點と雖も彼の創意ではなく、他面彼の體系は東亞六億の大衆の物心兩方面に餘りにも危險なる黴菌に感染して居るのであつて、吾人は新中國政府と共に之を全然抹殺し去らねばならぬ。斷じて修正を云ふべきではない。吾人は繰返して云ふ、支那革命史上の孫文主義即ち三民主義は端的に否定されねばならぬ。西洋史上の民族主義、民主主義、社會主義は正しく把握され、十全に認識された環境に有意義に適

用されねばならぬと。

北支臨時政府が孫文主義を否定したる後之に代はるべき新中國の指導原理として標榜したものが新民主義である。從て新民主義は孫文主義及其の粗材たる西洋史上の三主義に付吾人が批評し、排擊したる點に於て孫文主義と正反對の見解を採るものである。唯新民主義に就ては今迄で有權的解說の公表せられたるものなく、新民會、中央指導部刊行の新民主義論叢に中央指導部長繆斌氏等の論文が載せてあり、一部公人の意向を窺ふことが出來るに過ぎない。卑見に依れば新民主義なる語は今迄で縷述し來つた理由で其の內容が複雜多岐に亘り、爭點が機微の點にも觸れる爲めに到底一語を以て內容を明示することが出來ず、之が爲めに「モンロー」主義、「ヒットレリズム」、山嶽黨、政友會等の如く僅に符牒として撰まれた語であると解さなくてはならない。從て新民主義は其の出典、繆斌氏等の說ばかりでなく、新中國政府、特に其の親權者たる帝國政府の屢次の聲明、加之孫文主義排擊理由等から體系づけられねばならぬ。然らば新民主義の內容は何であるか。

（イ）東洋精神への復歸

新民主義なる語が東洋政治哲學大系とも云ふべき大學の明明德新民又は作新民より出でたこ

とは明である。是れ新民主義則王道と云はるる所以である。繆斌氏は進化論に性善說を配し、善者即ち優者が天理の命ずる所に從ひ惡者即ち劣者に打克つて人類を向上せしめて行く道程を新民史觀と名附け、之に則して生活するを王道と云ひ、之を以て新民主義の基礎とした。夫は兎に角大學が帝王及び社稷の臣を主體として其の政治道德の理想を述べたものであることは疑ひない。而て其の說く所は克己復禮を根本として修養の工夫を叙述するにある。第一の克己は格物即ち私心を去ること、致知即ち本然の良知を發揮すること、誠意即ち勵み行ふこと、正心即ち邪念を去ること、修身即ち人格を修むることの五項目を實踐することである。第二の復禮は齊家即ち人倫を正し男女各其の本分に從ふこと、親鄕即ち地方自治に於て親を親しむの道を以て民衆の敎化醇風の發揚を計ること、治國即ち禮治德治を實行して產業を起すこと、平天下即ち萬物に所を得せしめて國內的及び國際的平和を計ることである。尙大學に日新日日新とか、命維新などあるのも王道實踐に依り陳套を去り、陋習を改め、國家を興隆さす樣を述べたものである。

前述の如く王道は帝王や輔弼の大臣の修養を說いたものであつて、其の結果政治の客體たる人民が新にされて行くことを豫想して居るのであるが、文化の向上し、敎育の普及するに連

れ、或は參政權が認められ、或は共和制が實施され、萬機が公論に決せらるる世の中となれば衆庶が智を磨き德を修めて、或は皇獻に對し奉り萬民輔翼を致し、或は民衆政治家となつて抱負を伸べねばならないのである。新中國に於ても辛亥革命の成果は之を維持する既定の方針である以上、各人は自己の價値を實現することに依り興邦に獻替し、又興邦を通して自己實現に資すべきであつて、此の萬民に依る王道の實踐を新民と云ふ文字を以て表はしたのは機宜の措置と申さねばならぬ。

次に革命兒孫文の理論及び實踐が東洋否定の歐化主義であつたことは既に述べた。然らば其の否定である所の新民主義が東洋傳統精神への復歸であり、東洋文藝の復興、東洋政治道德の高翔を意味することは云ふ迄もない。この事は新民主義が東洋意識に立つて泰西の文物を取容れて營養とするのを毫も妨ぐるものでないこと勿論である。果然新民主義は復古的創造的進化を意味するのである。北支臨時政府が東洋固有文化の發揚を提唱し、東亞文化評議會が生れ、歐米派に代はりて東洋學者親日家が百政の衝に當ることとなつたのは新民主義の動向をトせしむるに充分である。

（ロ）東洋中道全體國家主義の發揚

近世西洋史に現はるる三主義の內民族主義が比較的常住にして高次の妥當性を持ち、功利的個人主義を背景とする民主的自由主義、唯物的階級鬪爭主義が其の下位に立つべきことは既に述べた。此の後の二者が其の登場前の社會狀態の反動として生れ、既に一應其の歷史的使命を其の妥當する限りに於て果したる後、政府の無權威、國家の解體の動向に其の弊害を遺憾なく露呈して停止する所を知らざりし際、此の弊に苦しむこと最も深く、併も國步困難にして右弊害より速に蟬脫するの必要に迫られ居りたる國々に於て、理論よりも實踐に秀でた老兵の鐵腕に依り、强權全體主義國家の登場するを見た。即ち獨逸は「ナチズム」を通して「ヴエルサイユ」條約の桎梏より、伊太利は「フアシズム」を通して國內的分裂と國際的輕侮より、龍騰して來た。之は要するに民族主義の國內的要請が其の下位に立つ民主主義、社會主義を超剋揚棄したものである。是は卑見に依れば全く必至の約束である。視よ外道ソ聯邦すら國土經綸の爲めには理屈が何であらうと一國社會主義に轉じ、社會主義者的愛國心を煽らざるを得なくなつて居るではないか。

然るに王道主義は新民主義の古典的名稱であるのだが、此の主義は儒敎の經典でいくらでも立證しうる如く決して君主專制でも墮落せる民主政治でもなく、精神的價値の威望と民本精神

即ち量の財や力とを適當に化合せしめたもので、力よりも德を高調するに傾く外全く全體主義と同一事であり、併も其の永續性に富める理想的典型と呼ばるべきものである。藤澤親雄教授も「王道的なる指導者主義」なる言葉を用ひて余の說を裏書きして居るのである。想ふに「カーライル」が生きて居たならば彼は「ヒットラー」や「ムツソリニ」を泰西の「帝王としての英雄」として英雄崇拜論の祭壇に祭つたであらう。王道は而て新民主義は最も古くして併も最も嶄新なる東洋的全體主義であるのである。斯くも道は近きに在るのに、何を苦しんで競ふて西洋の糟粕を嘗め、「ルソオ」を禮讚して孔子になぞらへ、主權在民說を渴仰しながら、尙衆庶を後知後覺、不知不覺と貶して、ソ聯の强權政治を冀ふの矛盾と昏迷とを犯し、「マルクス」を禮讚して一方共產主義と社會主義、他方聯露容共否中國のソ聯合併と剿共との間に斷續彷徨するの必要があらう。尙余輩の知る限りに於て全體主義は個人を抹殺せんとするものでなく、「自己實現を通して興邦へ、興邦を通して自己實現へ」と云ふ建前を取らねばならぬから、尙又淺薄な唯の獨裁、官僚獨善、衆庶の無視を謳歌するものではないから東洋全體主義は東洋中道全體主義であらねばならぬ。されば新中華民國が合衆國制を採用するにせよ、單一國家の形式を採用するにせよ、全體主義的總統國家の性格を帶ぶべきは必然である。然るときは未だ軍

政期でないとすれば即ち訓政期にありて、加ふるに、社會の現狀が到底共和立憲國の公式を援用し得ざる新中國に適切なる政治機構を供することが出來ると思はれる。然るとき新中國も久遠實成家族的全體主義皇道國家たる本邦と其の志向を等しくし、獨、伊と世界觀を等しくし、國民戰線從て又防共戰線に參加することが出來る。玆に吾人は日支提携して東亞新秩序を建設する內に新中國の民族主義を最も大きく生かすと云ふ契機を掴み得るのである。最近帝國議會に於て全體主義と皇道との異なる所以を高調するの論議を聞いた。之は恐らく行き過ぎを警戒したものであり、筆者が國家總力戰體制の基礎附けとして夙に日本中道全體國家主義（拙著、雄邦日本の東亞恢興、第五編第七章）を提唱せる所以と吻合する。想ふに「ヒットラー」、「ムツソリニ」は伊尹の如く孟子の所謂聖の任なるもの（時艱を救ふ英雄）であり、王道は聖の時なるもの（古今に通ずるの道）であつて、後者を優れりとし、萬邦無比の我が皇道に至つては他の比籌を許さないのである。夫にも拘はらず泰西全體主義は東洋特に我國に學ぶ所多く、國民戰線に立てる諸國は吾人と有機的世界觀に於て靈犀相通ずるものあり、防共の盟邦であるばかりでなく、實に師弟の關係にあるのである。從て東洋中道全體主義を意味する新民主義は泰西の全體主義と相呼應して剿共、東亞恢興、道義世界建設に邁進することが出來る。

支那の國民經濟は國家社會主義に依るべきか、將又資本主義、自由主義に依るべきか、問題は決してさう簡單ではない。原始產業の域を脫せず、行政組織の高度化されず、各國の工產品の市場たる支那に於ては、東亞國防經濟の必要を加味した保護主義を布く外、基調を無爲にして化する自由主義に置き、個人の發意を利用すると同時に、出發點より資本主義の是正を加味すべきである。東亞「オータルキー」確保の爲めにする日支合辨の國策會社に就ては國家及び東亞總力戰體制の要求もあり問題は多少別であつて、其處では東亞聯合の全體主義が適用せらるべきである。其の結果東亞產業五ヶ年計畫、其の部分たる日本、滿洲、新中國產業五ヶ年計畫が樹立せらるることは頗る望ましい。全體としては王道に於て指導者原理と民權主義とが調和された樣に、經濟に於ても王道經濟即ち東洋中道全體國家主義が發揚せられねばならぬ。

（八） 東亞新秩序の創建

吾等は今次の大事變が國際政治問題から生起されたことを熟知せねばならぬ。國際政治問題とは平易に云へば諸國家の組合せの問題である。玆に殘された西洋史上の民族主義の涉外方面が登場する。臨時、維新兩政府治下にある中國青年の最大の惱みが此の點に係つて居るのである。彼等に今迄の孫文主義に代はるべき新光明を與へ、其の熱情を動員し、右の惱から彼等を

蟬脫せしめ得るか否かに東亞新秩序建設の成否が賭られて居るのである。此の國家の組合せ問題に關し北京政府は當初の聲明に於て慢然國際親善の增進を說き、抽象的國際主義に把住して居つた。此の點は吾人の齒痒く思ふた點であるが、其の後日本政府の事變處理に關する說明が次々に現はれるに伴れ、臨時維新兩政府は無留保の贊成を其の「スポークス・マン」の口を通して表明する所があつた。從て事變處理問題の中核たる國家の組合せの問題、特に東亞新秩序建設の問題は日本政府の最近の諸聲明中に其の回答を求めなくてはならないのである。「ストーリー」教授曰はく、世界の現勢に鑑みれば忠誠及熱情の一大蓄電池は民族主義の專用に供せられ、國際主義は國際問題を調整するに至るべき運命を有するやの觀あるに拘はらず、其の推進力たるべき同種の忠誠及熱情の蓄電池を有して居らないと。新民主義の中に取容れらるべき東亞新秩序體制が此の蓄電池へと電流を通はせ得るならば新民主義は始て起ち上ることが出來るのである。

偖て前述の（イ）（ロ）の二點も東亞新秩序に外ならないが、此では殘された國際政治上の意義に於ける東亞新秩序に論及する。此の新秩序なる文字は誠に漠然として居る。當局も之を認め其の漸次に發展すべきを說かれた。併し吾人東亞舊秩序を熟知せる者には新秩序の意味は日

星の如く明らかである。舊秩序とは何であるか。其の第一は國際聯盟規約、不戰條約、海軍軍縮條約等に表現せられた一般國際平和機構である。此の機構は超大既成飽和帝國主義國英、米を主とし、佛蘭西を副とし、彼等の剩す所なき領導下に「ヴエルサイユ」體制の存續世界の現狀維持を克ち得んとしたものである。聯盟規約第十條は其の中核であるが、占席競爭に於ける一秒の先順位を神聖化せむとする愚劣なる規定であつて、聯盟は現狀維持國の傀儡となり終つたのである。自由主義、資本主義體制の日本は滿洲問題すらも提げて行つて自己を忘れ、東洋を忘れ、一般抽象普遍原則に照して支那と列國會議の前で果てしなく爭ふたのである。八紘一宇皇道國家の面目を奈何。記せよ、政治不平等條約の平均壽命は宇宙原則に從へば滿二年に過ぎないことを。滿洲から響く世界大維新の曉鐘に超大獨逸は立ち上り、捷克國は灰の如く舞ふた。之に伴れて聯盟は顚落し、軍縮秩序は破碎した。舊秩序の第二は太平洋關係を基調とする特殊極東平和機構で、九國條約、四國協約、其の他支那關係政治條約に體現されて居る。其の內容は東亞に君臨した絕對領導權者米國の極東政策を其の儘盛りたるものである。かかる際自由主義的資本主義的體制の日本は自ら歐米に追隨し、支那の歐米依存に拍車した。其の後になつて日支相對で交涉をしようと思ふても支那は之を拒んで問題を壽府や華盛頓へ運んだ。斯く

の如くにして日本存立の要件東亞の安定等一切は抽象原則たる米國の軌道內に解消し去つた。

以上第一第二の兩秩序の背後に英米佛等國際金融資本主義の潛在せることは云ふ迄もない。舊秩序の第三は孫文主義に現はれた聯露容共で、曳て第七回「コミンテルン」大會の獨逸、日本への攻擊集中の決議、中國共產黨の八・一宣言に顯はれた抗日救國人民戰線結成の決議に隨順して西安事變後國共合作が出來たことである。舊秩序の第四は以上を背景とし、國民黨政權が支那に傳統的なる以夷征夷、遠交近攻の策を弄し、自由意思を以て日本を敵國として邁進し來つたことである。

然らば其の反對を意味する東亞新秩序に於ては東亞は既に滿洲國に見るが如く一般及び極東平和機構から引拔かれねばならぬ。新中國は國際聯盟より脫退し、九國條約を十割事情變更の原則に從つて破棄せねばならぬ。租界治外法權等の半植民地體制や英米資本主義の羈絆から脫せねばならぬ。剿共滅黨、聯日興邦に就き、日、獨、伊、滿防共協定に參加せねばならぬ。加之、政治、經濟、文化の自立性を極度に恢復した新中國が日本及び滿洲國と東洋意識に立つて團結し、將來永劫に東亞內の內戰を罷め、相携へて共存共榮の道程に上らねばならぬ。其の結果として採用せらるべき東亞の大憲章に於ては日滿支三國の一體性が高調さるると同時に、三

國の全體主義世界觀に於ける價値の序列が容認され、此の基本關係の一切の國際關係に優位することが宣明されねばならぬ。滿洲國は日露戰爭に於て東洋的東亞保全に盡した日本の戰勝紀念碑であり、蔣政權を傀儡とする歐化力將又西力との戰ひに於て吾人が東亞恢興の鍵鑰として戰ひ取つたものであるから、黎明する東亞新秩序の儀表として新中國は之を承認すべきである。新中國の新政權未だ自立せざる今日、ソ聯の中國侵入、中國共產黨跋扈の現狀を以てすれば防共協定に軍事合作を伴ふべきは當然であり、之に必要なる尨大なる國防體制の支持に必要なる東亞的廣義國防計劃經濟の樹立も亦缺くべからざる要件である。帝國政府が昨年十一月三日の聲明に於て「帝國の冀求する所は東亞永遠の安定を確保すべき新秩序の建設に在り、今次征戰究極の目的亦此に存す。この新秩序の建設は日滿支三國相携へ、政治文化等各般に亘り互助連環の關係を樹立するを以て根幹とし、東亞に於ける國際正義の確立、共同防共の達成、新文化の創造、經濟結合の實現を期するに在り、是れ實に東亞を安定し、世界の進運に寄與する所以なり」と述べ、十二月二十二日發表の近衞首相の對支國交調整方針談に於て當局が滿洲國の承認、防共協定及び防共駐兵等に論及せる事共は體系化して見れば以上の趣旨に外ならない。聯日興邦を標榜する新中國政權は無留保に之を支持して居るのである。

新中國青年の抱ける民族主義の問題は人々の惱みとする所であるが、舊中國は既に第三「インター」、人民戰線、金融的資本主義的帝國主義と連絡せることでもあり、彼等も民族主義が自然であつても、最終ではないことを知つて居るのである。右の國際組合せを選んだ結果今次の事變となり、其の結果新中國政權の樹立を見たのであるから、中國の民族主義が著しく歪曲されて三日月型民族主義となり居る際、彼等は與へられたる環境の下に於て如何にせば最も大きく中國の民族主義を生かし得るかと云ふことを熟慮すべきである。近衞首相が「支那の民族的熱情を認識し、支那の獨立國家としての完成を必要とすることに於て日本程切實なるものはないのであります」と述べた言葉は充分玩味すべきである。胡適氏は世界には散砂の如き六十餘國があるのみと云ふたが、古哲は事に本末、始終、厚薄の別あることや、親仁善隣を敎へて居る。誤なき原理は既に一度述べたるが如く具體的國際主義的民族主義でなければならぬ。孫文は日本が東洋の楯たることを認めた。楯を排した上赤化歐化の鋭鋒を引き寄せる、驅日興邦が滅邦滅亞となるのは當然である。新民主義は興邦を通して興亞へ、興亞を通して興邦へと主張するものである。

以上が余の把握し得たる新民主義であるが實際以上は新中國創建の憲章であり、新民會の實

踐綱領であると見て大過なきを信ずるものである。

九、東亞運命協同體に賦與すべき意味

此の言葉は民族主義を揚棄する爲めに、全體主義世界觀の要請を充す爲めに、東亞の一體性を强調する爲めに按出されたものと思はれる。論者の說く所は區々に亘り往々觀念的空想的でもある。想ふに日支國交調整方針として急に按出され、寧ろ其の體現を將來に期待されるものは協同體ではないのである。東亞を先天的有機的生命體たる全部と立てて、日本なる最高唯一の普遍民族我を其の部分たる表現人と見るのは不當である。(日本は過去三十年間一度だつて日本を代表する高邁の政治家を支那に送つたことはない。日本の對支政策は往々西歐帝國主義の追隨であつた。現在の日本の目的が東亞の救濟にあつても、其の內には同時に日本存立の爲め將又東洋的使命を擔ふ雄邦日本完成の爲め東亞共榮に依る經濟的强化の問題が含まれて居る。從て日本の行動が完全に愛他的と見へ惡い。言葉と心との通ぜぬ場合患者には救命手術の爲めの割腹か、殺人の爲めの割腹か解からない。日本は起死回生の手術を濟ませて其の結果を充分に見せつける迄で支那の內部から自然に湧出づる協力を得ることは六ヶ敷い。一方的な「サヂ

ズム」は徹底してこそ意味をなす。不徹底なら日本の眞意は永久に解る時は來ぬ。而て東亞舊秩序は永續するであらう。)事實上遺憾ながら目下支那大陸は準軍政下に在り、日本の意慾が熾烈に働きかけて居るのであつて、現狀は日本的秩序の大陸反映であり、寧ろ皇道の光被を以て目すべく、同胞は自肅して武德を樹つるの後楯となり、同時に善隣の民の父兄となつて輔導し、萬民輔翼の道を誤まらぬ樣にせなければならぬ。當局が新秩序、互助連環の關係、連絡體等と云ふて、協同體と云はないのは蓋し考のあることであらう。察する所此の新熟語に日本の跌石となり得べき四海同胞主義的な自己解消論が含まれて居る爲めではあるまいか。

唯日滿支が皇室を全く異にし、言語歷史傳統を殆んど異にせるも、人種、文字、宗敎、風俗習慣を多く共通にし、地理的經濟的一體性を保持せるは、顯著なる近親民族と云ふべく、其の團結と云ふ漠然たる意味にて東亞運命協同體など云ふは決して差支ないと思はれる。此の言葉に應ずる客觀的事實は將來文化的提携に依り右近親關係が發展强化されて行き、東亞新秩序が渾然融和して一體をなせる東亞を現出し、東亞が謂はば涅槃に入るときを以て眞に具體化されるのである。尙固有の本然の大東亞に東力東漸を齎らし、今日の小東亞即ち日本、滿洲、支那本部が大東亞に飛躍するであらうとき其の彼岸に於ける新文化創造の理念を揭げて之を東亞協

同體と呼ぶことにするならば更に有意義であらう。協同體と云ふ文字を協同社會（ゲマインシャフト）即ち利益社會（ゲゼルシャフト）の反對概念とのみ譯し且解する必要はあるまい。

一〇、結　論

西洋史に見えたる民族主義、民主主義、社會主義は支那革命史上の歪曲あるを特色となして毫末も創意なき孫文主義即ち三民主義とは嚴に區別すべきである。而て前者は正しく把握揚棄され、十全に認識された環境に建設的に適用されねばならぬ。之に反し北支臨時政府が云ふ所の如く後者の孫文主義即ち三民主義は之を全く抹殺し去らねばならぬ。蓋し繆斌氏の云ふが如く此の後者の實踐は共產主義の溫床となり、聯露容共、歐米依存、西力東漸、遠交近攻、抗日侮日、滅邦滅亞に墮したからである。新民主義は今次の日支大事變を結果した舊秩序に代はりて、北支臨時政府、中支維新政府に體現せられたる新秩序の大憲章であり、之等政權の根本的政治綱領である。此の主義の內には現在日本の東洋的意慾、日本的、具體的國際主義が潑剌と動いて居るのを見逃せない。本主義は傳統的東洋精神への復歸、東洋中道全體國家主義の發揚、東亞新秩序の創建を中核とするものであつて、其の實踐口號は次の如く措定されねばならぬ。

自己實現を通して興邦へ、興邦を通して自己實現へ。
興邦を通して興亞へ、興亞を通して興邦へ。
興亞を通して眞正國際主義に合致する世界新秩序の建設へ、世界新秩序を通して大東亞協同體の完成へ。

第八章　東亞聯合の憲章

（一）　吾人は既に前章に於て滿洲事變、日支大事變の意義を尋ねて世界大維新の黎明を感得し、第二十世紀の後半が如何なる可能性を藏し、如何なる希望を湧かしむるかを說き、世界舊秩序、東亞舊秩序の如何に橫暴極まるものなるかを闡明し、進んで東亞新秩序、世界新秩序が何人を其の宿主となし、如何なる體制を取るべきかを明瞭にし、宿命の東亞聯合の自律性を指摘して東亞六億の大衆を玆に動員し、大東亞主義宣言を以て初て天地の公道に合する日、滿、支三人四脚の目標とも云ふべき世界政策を樹立し、西洋的他律秩序より東洋的自律秩序への道程を揣摩し、日本的東亞新秩序を母系とする臨時、維新兩政權の新中國建設綱領を闡明して、新民主義の內容を最も妥當する樣に解說する所があつた。從て吾人は今や安んじて東亞聯合の大憲章案の立案に從事することが出來る。

（二）　日支大事變の勃發する直前の外交交渉に於て帝國政府が平和的國交調整の指針として提示した原則は北支冀察政務委員會の獨立、將又北支緩衝地帶の設定、滿洲國の事實上の承認、

日支經濟提携　共同防共の數項に限られて居たものの如くである。孫文門下の逸才で、大局を摑める政治家汪兆銘氏は昨年十二月二十九日の日支國交調整方針に關する近衞聲明を以て救國和平の契機を藏するものと看做し、直接交渉に依て和を議せむことを提唱し、更に本年三月二十八日に至つて同一の聲明を繰返す所があつた。同氏は南京陷落以前の獨逸大使の調停案が、（イ）內蒙の自治、（ロ）內蒙及び北支兩政權の中央に隷屬すること、（ハ）北支駐兵區域を擴大すること、（ニ）抗日人物を以て北支政權の最高首腦となさざること、（ホ）上海停戰區域を擴大すべきこと、（ヘ）排日問題に關しては川越張群會談の方針に遵據して處理すべきこと、（ト）防共問題に關し辨法を設くること、（チ）關稅の改善、（リ）中國に依る諸外國人の權利尊重等の數項に過ぎざりしことを擧げ、當時國府は此の調停案を以て商議の基礎となすべしとの意嚮なりしを以て今日近衞聲明を以て和平交渉の基礎となし得ざるの筈なしと述べ、更に語を繼いで「余が誠心誠意を以て求むる所は東亞百年の大計である、余は日支兩國相戰へば即ち兩者共に傷き、兩國和平すれば即ち共存すること明々白々であることを斷じて疑はない。兩國が和平の爲めに共に努力すれば必らずや東亞百年の安定を齎らし得るであらう、然らずんば兩者は共に傷き、齋しく滅亡する。」と述べて居る。以上は實に中國の眞正なる先覺者の警世時言と云ふべ

く、是を容るべく國府に其の人が居らないのを遺憾とする。夫にも拘はらず吾人が前數章に於て提言したことは實に中國の眞の先知先覺に依り共鳴せらるべきを確信し得るに到りたるを以て、吾人は今や進んで試みに東亞聯合の大憲章又は約法案を立案せむと欲する。但し本書の任務としては原則の設定を以て足り、條文の立案は未だ其の必要なきものと認める。

（三）今回の事變の結果として日支間に講和條約を結び得ないとの說は一應尤もである。蓋し國民黨政權は戰爭相手としては不足せないが、講和の對手としては不足するからである。蔣介石を相手とせずとは此の意味と解せらるるが、尙彼が一身に世界舊秩序、東亞舊秩序を體現して居ると云ふ理由にも據るのである。併し吾人は新中國の政權と如何なる條約をも結ぶことが出來る。但し此の政權は皇軍の占據地區に自立して、聯日興邦を標榜し、帝國の無留保の支持を受けて居るのであるから、此の政權と講和條約を結ぶと云ふことは奇異の感を與へる。從て將來新中國と帝國との間に結ばるる條約は一部講和條約の持つ內容を持つことありとするも、國交調整の爲めにする東亞的立法たるを本質となすべきである。其の內容は順調に進めば昨年十二月二十二日發表の帝國政府聲明と相距ること著しく遠くあるまい。

右國交調整の爲めにする國際立法は共同宣言の形式を以て爲さるべしとの說を爲すものが多

い。議定書と呼んでも差支えない。彼の聯盟規約が一つの條約であることに鑑みて、共同宣言議定書なるものも一つの條約には相違ないのであつて、共同宣言と云ひ、議定書と云ひ、決して其の內容を規定するものではないのである。此の言葉の後に吾人は共同宣言とか議定書とか云ふ形式は此の際結構だと思ふものである。而てよしや形式は平等國家間の交涉、協力の形を帶ぶるとも其の內容は帝國が自立して東亞の爲に立法するの氣構へが必要である。然らざれば吾人は東亞に新無秩序の種子を蒔くこととなるのである。

（四）吾人は新東亞大憲章の前文を次の如く規定したい。

國際聯盟は規約第十條の規定を以て往時の遊獵の結果と時間に於ける少許の先順位とを神聖化し、超大旣成飽和帝國主義國の現狀維持の機關に墮し、眞正の國際主義將又大乘的國際正義の宿主たるに値ひせざるに至り、東半球に蟄居する米國、創造力の衝動に驅らるる日、獨、伊の脫退に依り全く顚落し終りたるに依り、

此の事實に鑑み列强は同盟、集團又は特殊協定等の舊時體制に復歸せむとし、同時に主我的、功利的平和秩序確立の必要に促されて、大英帝國集團、ソ聯邦等の紐帶强化に依り、將又汎米主義、汎拉典主義、汎「スカンヂナヴィア」主義、汎巴爾幹主義、加之人民戰線、

民主主義戰線、國民戰線等の確立結成に依り自己主張に權威あらしめむとしつつあるに依り、

右の政治的結合の線に沿ひて列國は經濟的集團を結成して經濟的國家主義を補强し、經濟的「オータルキー」の確保に鋭意し、曳て集團的國防經濟の强化に努力するに至りたるに依り、

全世界は擧げて歐洲化せられ、超大旣成飽和帝國主義國の重壓下に天地人の三才は互助連環の關係を失ひ、全世界は二、三の專横國家を構成する少數民族の支配下に立ち、民族主義、民主主義、社會主義等の運用を以てしては最早人類の苦惱を醫するに足らざるに至り、而て東亞は聯盟規約、歐洲的世界秩序、資本的帝國主義、太平洋體制、國際共產黨等の舊秩序の牽制の下に歐化勢力の爲に侵蝕せられて小東亞となり、相剋混亂の巷と化し、殆んど國際政治の主體としての存在を失ふに至りたるに依り、

同文同種の近親民族關係に在る東亞の諸民族は歐米的他律體制の下に在りて骨肉相喰むの愚を覺り、爾今政治、軍事、經濟、文化の各領域に亘り互助連環の關係に立ち、東亞の內戰を解消し、聯合協力するを以て世界の現狀に則し、自己の主張に權威あらしむると共に

共存共榮に達するの途なりと信じたるに依り、

日、滿、支三國は合はせて六億大衆を動員して其の正當と信ずる主張を世界に反映せしめ、東力を本然固有の東亞に浸透せしめて大東亞を歐亞より戰ひ取らむが爲に原締約國として東亞聯合を組織するものとす。

（五）　東亞聯合の原締約國は日、滿、支三國である。從て其の成立當時に於ける原加盟國は三ケ國である。併し此の三國の結合は東亞聯合に必要にして充分なる要件を具備せしむるに足りて居る。此の關係に於て東西の衝突、日支葛藤より揚棄せられたる滿洲國は新中國に於て其の獨立を認め、其の五族協和の王道樂土を以て東亞聯合の儀表と爲すべきである。東亞聯合は其の世界政策として大東亞主義を標榜し、此の主義を中心としてのみ一體化されうる。大東亞主義とは固有本然の東亞に東力東漸を齎らし、東亞の諸民族主義を最大限に生かすべく、大東亞を歐亞より戰ひ取る鬪爭の口號である。大東亞主義を離れては東亞新秩序も餘り多くの意味を持たない。政治的經濟的意義に於ける大東亞主義實現の彼岸に於ける新文化創造工作の理念が東亞協同體であるのである。一國の部分たるも尙高度の自治を有し特定地域に居住する民族は國際聯盟の例に倣ひ、之らも加盟國に加ふることが出來る。斯くすることに依りて吾人は各

地方の複雜なる事情の要請に應ずることが出來る。例へば蒙疆地區、外蒙新疆、西藏等は此の建前を取容れずしては之を東亞聯合の機構內に拉致すること困難であらう。獨立國の加盟は宣言書を東亞聯合の書記局に寄託することに依りて之を爲し、高度自治民族の加盟は東亞聯合最高會議の決定に依ることとする。

（六）東亞聯合は、（イ）東洋的自律秩序を意慾する日本が東亞大陸の物質力に依り支持せられて雄邦日本となり右秩序の宿主となるを必要としたること、（ロ）東亞大陸が既に西洋的舊他律秩序の領域となり終りたることの二原因に依り武力の干涉なしには誕生し得ざる立場に在り、爲めに東亞自律秩序が日本的秩序に抱擁されつつ黎明を告げざるを得ざりし事情を知る。勿論東亞新秩序は東邦諸民族の內部より流露する自發的協力に依り徐々に代替せらるるに至るべしと雖も、蔣政權の存續、西洋的舊秩序の脅威下に在りては日本を東亞聯合の指導者（フューレル）と仰ぐにあらざれば其の結盟の威力を發揮し難かるべし。斯るが故に日本は東亞聯合の一員たると同時に東亞聯合の指導者國家たるものとす。一歩一歩實現すべき右自發的協力體制の下に於ては東亞聯合の盟主の地位は道德的權威に把住するを以て理想とする。

（七）本共同宣言又は議定書の設定する東亞聯合の活動は聯合の最高會議、其の任命する外

交委員會、軍事委員會、經濟委員會、文敎委員會及び常設書記局に依り表現せらるる。最高會議は各加盟國の首相より成り聯合の權能內に屬する一切の事項を掌る。議長は當分日本の總理大臣を以て之に充つる。外交委員會、軍事委員會、經濟委員會、文敎委員會は加盟國の夫々の外務大臣、陸海軍大臣、財政經濟大臣、文部大臣を以て構成す。之等委員會は最高會議の諮問機關たるも、事前に明確に最高會議より委任せられたる事項に關しては東亞聯合の最終の決定を採擇することが出來る。以上の專問委員會は機宜に依り夫々分科會を設置して專門事項の調査報告に當らしむることが出來る。最高會議及各種委員會を現任の大臣を以て構成することは聯合の行動が現實の問題から遊離して、實行力なき空想的のものとなるのを阻止するに役立つものである。最高會議の決定及び各種委員會の決定は夫々條約としての拘束力と實行力とを持たなければならない。過去の國際聯盟や國際會議が多く實際政治に關係なき代表者の集合より成り觀念の遊戲に墮したことは國際聯盟顚落の重大原因であつたことに鑑み、東亞聯合に於ては夫が加盟國間の緊切問題の交換所となる樣に工夫されねばならぬ。原聯合國以外の加盟國は專門委員會に於ては事項を限り原聯合國の代表者に委任することが出來る。聯合の常設書記局は之を東京に設置し、最高會議の選任したる加盟國の學識經驗ある者を以て之を構成する。但

し屬員に關しては事務總長之を選任し、最高會議に報告すれば足りる。第一期事務總長には日本國臣民たる甲某を任命する。最高會議及び各專門委員會は東京に於て會合するを本則とするも、其の決議を以て隨時他の場所に於ても會合することが出來る。最高會議及び各專門委員會は尠くも毎年春秋二回は會合して其の繼續性と活動性とを確保せねばならぬ。聯合の經費は最高會議の決定する割合に從ひ、各加盟國が之を分擔するものとする。

（八）　東亞聯合の目的は一切の加盟國を互助連環の關係に置き、東亞聯合內部の內戰を一掃し、政治的、軍事的、經濟的、文化的提携協力を促進し、各加盟國の興邦に依りて全部たる東亞の興隆に資し、東亞の興隆に依りて各加盟國の興邦に資するに在る。斯の如くするときは東亞諸近親民族の一體性は發揚され、其の綜合國力を以て東亞は其の六億の人口と其の占據する面積とに正比例したる發言權を世界に於て行使し、文明の飛躍的進步に寄與することが出來る。尙前述の如く東亞聯合は固有本然の大東亞に東力東漸を齎らすことに依り東亞舊秩序內の相剋を發展的に解消せしめ、同時に歐亞より大東亞を戰ひ取ることに協力せねばならぬ。東亞聯合は大東亞主義を以て其の盟約の不可分の一部と思惟する。

以上の東亞新秩序即ち日、滿、支等の互助連環關係は爾餘の一切の國際關係に優先せなけれ

ばならない。而て日滿間の既存基本的不可分關係は斯の如き東亞新秩序を體現せるものであるから東亞聯合の目的と日滿基本條約とは併行する目的を有し、互に相扞格せざるものと容認されねばならぬ。東亞聯合加盟國は聯合の目的と相反する新規の國際條約に加盟してはならない。又今後新に締結せらるべき條約は各加盟國共之を聯合の書記局に登錄するを可とする。

東亞聯合成立以前の舊秩序に屬する國際條約特に國際聯盟規約、九國條約、四國協約、ソ支間政治條約等の如き政治條約にして東亞を世界の他の部分に對し隷屬關係に立たしむるものは一切破棄されねばならない。東亞聯合の自律性を確保する爲めには新中國の世界舊秩序よりの解放が先決問題である。之が爲に新中國は治外法權、租借地、租界、居留地、公使館區域、外國軍隊、稅關及び關稅收入の外國監理、鐵道鑛山利權、幣制上及び貿易上の隷屬關係を淸算せなくてはならない。以上の東亞聯合の目的を達成する爲めに必要とせらるる新規の東亞聯合內の協力は民族的熱情を相互に承認すること、東亞聯合內の各民族主義は東亞的限界に服さねばならぬこと、獨立國家としての完成を相互に支持することと云ふ新しき主義原則の下に協定せられなくてはならない。

（九）　以上の目的を達成する爲めに必要なる一切の手段は東亞聯合の行動範圍內に在る。從て

聯合の各機關は之に應ずる極めて廣汎なる權限を持つのである。即ち內部に在つて各加盟國の國力を充實さすことも、外部に對し其の結束に依る東亞綜合力、東亞總力戰體制を充實さすことも共に聯合の權限に屬せしめらるるのである。

（一〇）世界舊秩序、東亞舊秩序の下に於ては東邦諸國間の紛爭は巴里平和會議、國際聯盟、華盛頓會議等に附議され、東邦間には戰爭が戰はれた。併し新秩序の下に於ては其の反對が事實でなくてはならない。東邦間の紛爭は事前の政治經濟の調整に依りて其の發生原因から剪除されなくてはならない。夫にも拘はらず紛爭が發生した場合には其の紛爭は直接交涉にあらざれば即ち外交委員會、之に隷屬せしめらるべき調停委員會及び最高會議の調停に依りて最終的に解決されねばならない。東亞聯合の憲章は東亞の內戰を禁止するものでなければならぬ。

以上の次第であるから東亞聯合の外交委員會の擔任する問題は共同の對外政策將又世界政策の樹立と其の遂行とである。東亞聯合は內戰を停止するけれども外戰を拋棄するものではない。尠くも世界の他の部分に對し本然の固有の東亞に東力東漸を持ち來して大東亞主義を實現し、其の彼岸に於ける文化工作の高遠な理想として揭ぐる東亞協同體の基礎を築き終はるまでは實力を以て東亞聯合の世界政策たる大東亞主義に定められたる大東亞を戰ひ取るの決意がな

くてはならない。此の程度に於ては東亞聯合は決して平和的現狀雄持的ではなくして鬪爭的現狀打破的であらねばならぬ。

以上東亞聯合の最少限度の世界政策綱領たる大東亞主義の實現の爲にはソ聯を必然的假裝敵國、英佛を可能的可裝敵國米國を可能的中立國と立てなければならないことを遺憾とする。然るに右三國は獨、伊と全く對蹠の關係に立つて居るのであるし、獨、伊は東亞聯合加盟國と全く同一の有機的全體主義的世界觀に立ち、既に日、滿等と防共協定に依り結ばれて居るのであるから、獨、伊等は東亞聯合と防共同盟に依て結ばれなければならない。東亞聯合は同時に對ソ軍事同盟でなければならない。目下の獨ソ接近は波蘭問題對英問題の爲めと見たい。

東亞聯合は大東亞主義の至善に止まらむことを欲するから、此の東亞新秩序を越へて更に鬪爭的、現狀打破的であることを見合はせるかも知れぬ。併し東亞聯合は東亞新秩序の彼岸が直に道義的世界新秩序でなければならないこと、其の新秩序の下に於ては天、地、人三才が直接に互助連環の關係に置かれ、東亞が其の人口に應ずる發言權を有し、先進國生產と後進國生產、工產と農產とが衡平な價値を持ち、人類全般の文化と幸福との水準が高められねばならぬことを主張せむと欲する。併し世界の他の部分に於ては他の秩序が行はれることを武力干涉に依て

變改するを欲せない。けれども東亞聯合の意慾する新世界秩序の生誕の爲めに舊時の國際聯盟に於けるが如く世界的協力が東亞聯合に向つて要求せらるるならば、我方の協力は人種の平等、宗教の平等、「モンロー」主義の抹殺、超大既成飽和帝國主義國の解體等本書第三章に述べたる事項を條件として與へらるるであらう。以上の主義原則の發展は外交委員會の任務である。

（一一）東亞聯合は二十世紀の大病人ソ聯の解體を促進し、以て大東亞主義の實現に資する軍事同盟たることを顯著なる存在理由とする。從て延々八千哩に恆る日、滿、支對ソ聯の國境には東亞聯合軍の配備を必要とする。此の意味に於て日滿軍事同盟は其の儘東亞聯合の內に取容れられねばならぬ。新中國とソ聯支配圈との接壤地帶には現下の實情に照らし、日支兩國の軍隊を併せ配備するの必要がある。從て右軍事同盟の存續期間中特定地點に日本軍の防共駐屯を認め、內蒙地方を特殊防共地域とすることが必要である。英佛支配圈より來る浸透力は寧ろ平和的資本主義的なるが故に英佛支配圈に對しては新中國の軍隊が之に當るものとする。以上の軍隊の維持費は經濟的相互依存關係を除く外各加盟國の負擔とする。

東亞聯合の自立し得る爲めには西太平洋の海上覇權を掌握することは不可缺の要件である。然るに現下の實情に照し、日本帝國海軍が獨自此の任務に當らねばならない狀態に在る。仍て

爾餘の加盟國は軍艦又は建艦費の寄與に依り日本海軍の任務達成を容易ならしむるを經濟的且つ效果的なりとする。

之を要するに東亞聯合は其の共通國境に於ける武裝を撤去し、世界の他の部分に對する防禦力を强化するの必要に迫らるるのであつて、此の要請に答ふる爲めには結局一つの大陸大洋大空體制を確立し、之を堅持するの必要があるのである。此の原則の開展と實施とは東亞聯合の軍事委員會の任務である。

（一二）東亞聯合結成の結果として各加盟國の軍備は等しく東亞的に使用さるることとなつた。此の場合に於て各加盟國の軍備は充實され、强化される程善いとせなければならぬ。然るに從來東亞の經濟は斯の如き原則に依て律せられずに各國每にばら〳〵に世界經濟に連絡して利と不利とを被つて來たのである。然るに東亞聯合が出來た後に於ては斯る事態は存續を許さるべきではく、東亞の天然、資本、勞働は第一次に東亞聯合の御用に立たねばならぬ。東亞の自給自足率は最大限迄で高められねばならぬ。孫文は次植民地支那から歐米資本主義國へ持ち去らるる利益は年々十二億圓に上ると云ふた。現在の貨幣價値を計算に入るるならば夫は三十億圓にも上るであらう、何故に斯の如き現象が起るか、英帝國內には四千萬人の帝國主義者が居

る、其の傍に四億の奴隷が居る、全く抹殺された民族主義が居る。兩者の生活程度は山と谷程違ふ。前者の工業勞働生産價値は磅で計算され、後者の原始産業勞働生産價値は下落した馬克や法の如きもので計算され、そして其の間に交換が行はれる。英本國の勞働者を勞働貴族とすれば、植民地の夫は奴隷で、常時飢饉狀態に在る。國際社會主義の空想たる所以は玆に在る。而て歐米の金融資本主義、其の延長たる買辨資本は中國の生産物を支配し、其の反作用として之を市場として壓へて居るから中國は年三十億圓を搾取される經濟機構の內に嵌つて居る。英國の在支資本を百億圓と見積り其の內六十億圓は彼等が持參したものでなく、支那に於て騙取獲得したものである。然るときは此の機構は許すべからざる不正義である。之に反し日支間の生活程度の差は英支間の生活程度の差に比して問題とならぬ。極度に安く買つて極度に高く賣り附ける必要は毫もない。兩者は經濟「ブロック」を形成することに依り支那が從來失ひ來りたる三十億圓を日支共存共榮の原則に從て或は半々に分配し、或は新中國に三分の二を殘す樣に分配することが出來る。此の原則は北支開發中支振興會社等に於て資本の大半が日本側から出資さるる場合に於ても尙充分顧慮されねばならぬ事柄である。東亞新秩序により經濟的には日本のみが利すると云ふことは孰れの日本人も考へないことだ。日滿支經濟「ブロック」は十

割の妥當性を持つて居ること疑ひなく、資本技術の共助は勿論、關稅同盟將又互惠協定の採用に依り東亞の經濟的一體性が强化されねばならぬ。幣制、爲替、貿易統制も此の線に沿ふて按配せらるることが必要である。

右强化の必要は國防資源及び國防産業を確保する見地に於て特に緊切である。自己存立の爲めの使命と過重なる東洋的使命とを併せ擔はしめられて雄邦たらんが爲め經濟强化の必要に逼られた日本の苦境と日本資源の缺乏と蔣政權の反擊とが端的に今次の日支大事變の最深の原因となつて居る。此の見地から日滿支經濟「ブロック」は東亞の「オータルキー」を目指して、平和産業、軍事産業、和戰兩用産業の飛躍的擴張に赴かねばならない。三者を通じて適地適業主義は普遍原則でなければならず、後の二者の場合に在りては尙東亞國防經濟の需要が顧念されねばならない。

東亞の國際情勢は前述の大陸大洋體制の確立を要求して止まない。其の爲に之を支持する全東亞聯合の國防經濟體制は是非共計畫經濟に依らざるを得ない。全東亞國防計畫經濟五ヶ年計畫を樹立し、現存の日本生産力擴充五ヶ年計畫、滿洲國の夫を之に即應せしむると共に、新中國の生産力擴充五ヶ年計畫を北支開發會社、中支振興會社の事業計畫と睨み合はせて立案し、

其の圓滿なる遂行を期することが東亞聯合の經濟委員會の任務である。本委員會は企劃、財政、金融、農、工、商、交通等各分科會を持ち、加盟國の當局を網羅して連絡、計畫、實施が孰れも圓滿に進行する樣に指導されねばならぬ。

（一三）今次事變の直接原因は一點として創意は持たないが歪曲を特色とした孫文主義即ち三民主義を基調として、抗日的排日的黨化教育を實施した結果が廣く深く大衆に浸透した結果である。斯るが故に東亞聯合の一環たる新中國は曩に三民主義を否定すると同時に明明德新民を出典とする新民主義を標榜する所があつた。新民主義は此の更生新中國の根本政治綱領であつて、吾人が既に縷述したる所の如く傳統的東洋精神への復歸、東洋的中道全體主義の發揚、東亞新秩序の建設を根軸とするものである。從て東亞聯合加盟國の教育は何れも此の線に沿ふて實施さるる樣計畫されねばならない。特に高遠なる新文化の創造即ち東亞結盟體の結實を待望して、東亞聯合加盟國相互間に善隣國際主義に基く共通感情及意識の育成が必要であり、外國語の研究に於ては東亞聯合の語學に先順位が與へられ、支那語、日本語は夫々中等教育に於ける必修課目とされ、東亞の一體性が將來に向つて發揚されねばならぬ。斯の如き教育體系を案出し、之を遺憾なく實施することが文教委員會の任務である。從來對支文化事業なるものが

團匪賠償金を基金として實施されて來たが、從來の日支政治關係に禍ひされて、不協力、怠業を背景とした文化事業に墮して居たから何等見るべき成果を始めから約束されなかつたのである。此の障碍は東亞聯合に於ては除去せらるべきが故に今後は人才と建前とを新にして東亞新秩序の體現に協力する樣指導されねばならぬ。之も文教委員會の任務であらねばならぬ。

（一四）東亞聯合加盟國は夫々の民族基本構造を統括方面とする東洋的中道全體國家主義を國民政治力結成の根本原理となし、東亞全體主義の發揚に支障なき樣夫々の資本主義經濟體制、自由主義的政治機構の革新を斷行し、東亞聯合加盟國の國家的性格を一致せしむるに努めねばならぬ。東亞舊秩序を一掃して新秩序を樹立するが爲めには各加盟國內の右舊秩序に依存する舊秩序を一掃することが是非とも必要である。

第九章　大陸太洋體制の布陣

一、雄邦日本と東亞恢興

昨年予が上梓した拙著に『雄邦日本と東亞恢興』なる題名を附したのは、之を以て日本の目標課題を示さむとしたものに外ならぬ。

雄邦日本と東亞恢興とは、夫々極東國際政治に於ける一併行性原理の不可分の部分である。雄邦日本とは六割を拒否して兎に角、十割を要求した十割日本と云ふ意味であるが、同時に又、英米等にも膝を屈しない、自由獨立の生活軌道を歩む國として、世界政治に於て、第二位に下ることを受諾せないと云ふ意味を含んで居る。

六割から十割への飛躍は、物質的よりは寧ろ心理的な基礎の上に立つて居り、筆者が軍備に於ける無形の要素を輕視するを戒め、日本の强所は弱所に內在すると云ふたのはこの事である。夫が誤でないことは海の荒鷲隊や「ボイル」湖上空戰で善く證明されて居る。併し其處に

は亦强烈な愛國心や犧牲的精神の苦鬪の偲ばれるものが多分にある。

東亞恢興と云ふ意味は東亞の東亞諸民族に依る自律自決が過去一世紀間に損傷されて來たものを原狀に戻すと云ふ意味である。

筆者が東洋的東亞保全と云ふ語を用ふるのも同一の意味からである。大亞細亞主義を云ふたり人種戰を云はしめる事は、折角日本と三人四脚を防共協定の基礎の上に組んで居る獨伊の有る際に急激に餘りに廣大の責任を負ひ過ぎて爲に思はざる不幸を招來することになつて善くないかと思ふ。

併し東亞に關する限りは東亞聯合將又極東「アンフイクチオニー・ブンド」を作つて、東亞の平和、提携に關する一切の事を處理すると同時に、他の世界的結合たる聯盟勢力ソ聯勢力は勿論、汎米勢力の容喙を斷乎として絕對的に排擊し、且東亞の失地は全部之を恢復する事を要件とする。何故に雄邦日本と東亞恢興とを併行させるかと云へば、此の二者は全く車の兩輪に比すべきもので其の一方を缺けば、他方は決して招徠され得ないからである。此の極東國際政治上の併行性原理を認めることは日本否東亞諸民族ばかりでなく、世界全民族の平和の爲に絕對に必要である。

滿洲國と云ふものが出來て右併行性原理の體現者になつて居ることは、もつけの幸である。目下の日支事變は支那を否其の師導權を歐米聯盟勢力一般と日本勢力とが奪合つて居る爲である。蔣政權打倒を必要とするのは、夫が誰人も知つて居る通り歐米聯盟勢力一般の傀儡となり終つて居るからである。我等は今や東亞の政治的「イレデンチズム」及地理的「イレデンチズム」の爲に戰つて居るのである。日支事變は親權又は師導權爭奪戰たるを本質とする。

東亞諸民族、特に支那を日本の秩序將又軌道內に拉致して、相提携し彼の力を以て我が力となすことは容易の業でなく、血の洗禮迄も必要とする。筆者は武德主義確立の必要を絕叫して來て居るのであるが、追々中國の識者が此の文字を使用してくれる樣になつた。彼等は沒法子と云ひたいのである。其處から價値轉換が生れて來る。然るに日本爲政者一部の政治的敗戰主義者は戰爭最中に或は勝利の直後に無意識ではあらうが支那人をして有法子と云はしむるに垂んとして居る。拙著は右の敗戰主義を克服せむが爲に書かれたもので支那識者を救ふに役立つものである。筆者は雄邦日本、東亞恢興、東洋的東亞保全、東洋文化の復興、失地恢復に依る戰利品は、北方に於ては之を日本に、南方及び西方に於ては之を支那、或は蒙疆に合併する事に依り、支那民族主義の要望を大きく生かすこと等の題目に依り、日滿支三人四脚組織化の目

的利益は充分であると思ふし、之以外には何處を搜しても何物も發見され得ない。此處に東亞諸民族の民族的利己主義に對する一律の東洋的軌範、東亞的限界が發見されるのである。以上は筆者の主張の骨格であるが大聲は俚耳に入り難い樣である。

「東亞人の大東亞」は東力東漸の語を以て現はさるべきであるが、事實上は支那の歐化、次植民地化の爲に東力西漸の形を取つて居る。蔣政權が歐米の傀儡となり、我方が之と長期消耗戰を戰ふ爲に東亞の無秩序は助長されるし、日本の自己强化は帝國主義的侵入と支那人には誤解されるし、日本人の東亞的熱望は到底支那人に理解される見込はない。だから、臨時政府と高襟な約束をなし、支那の事は支那人にやらせるなどと云ふて自繩自縛して勝利の降伏をやり準軍政下に急ぎ爲すべき經濟開發等も爲さずに居るのは違算である。理想は高遠に合理的に併し建設は放膽的に着實に、之が眞に支那親日家を救ひ、新秩序を不動に築く所以である。

二、目的と方便

之れ以上述べんが爲には是非共先づ闡明せられねばならない一つの問題に吾人は逢着する。夫は時局問題に就て客と談話する時に必ず突當る問題でもある。前述の如く筆者が武德主義の

確立と云ふことを主張すれば、客は直に答へる。夫が出來ることか出來ないことかは別問題として、支那青年は既に民族主義を一度掴んだから其の要望に迎合せなくては長期間續く樣な時局の收拾は出來まい、其の上に經濟建設も出來るのではあるまいかと。

此の知識人として日本の經濟上の弱點をも一應知り拔いた客の言葉は、夫自身現下時局の建設的意義を否定し、蘆溝橋事件の半年又は一年前の對支新認識論を繰返し、延いて我國目下の大陸工作を過誤と斷ずるに等しい。何故なれば何よりもまづ支那の民族的要望を達成せしめたいと云ふなれば、あの程度の統一を齎した蔣政權の言分を通してやるが一番よく、日本は實に無用なことをして居ると云はなくてはならないからである。所が斯樣な果しのない循環法に今でも邦人の頗る多數が彷徨して居るのは、人々が現時の武力行使と云ふ一時の方便と、夫を通して東亞に招徠させたい新秩序新體制、即ち恒久の目的と云ふものを混同して考へるからである。外科醫が手足を切斷するのは生命を救ふと云ふ目的達成の方便である。人を不具にする爲めではない。四肢を切斷すると云ふことと生命を保存することは一見百パーセント矛盾して居るが、方便と目的との順序關係が明瞭となるに從つて、兩者の相救ふ不可分關係が容認されて來るのである。此の方便と目的との反對になる性格を吾人は忘れてはならぬ。極端な例は色仕

掛の復讐の如きものである。「極東外交論策」の著者が日露不可侵條約の締結を主張した所以は緊張を減じて創造を隆にせんとしたのである。

然らば日本の目下の對支外科手術は主として方便であつて、目的の達成は今準備せられつつあるも後に來るものであらねばならぬ。前述の雄邦日本と東亞恢復、東洋的東亞保全、東洋文化の復興、東亞失地の恢復等は目的であり、武德主義の確立、蔣政權の一掃、北支臨時政府、中支維新政府の擁立等は手段である。唯注意すべきは方便でも餘りにも基礎的繼續的の要件は、直に兼て目的となり得ることである。武德主義なる言葉は實に斯樣な、主として方便兼て目的を構成する。之に反し單なる銃劍、謀略は方便たる性質を顯著にし、平和の爲めの戰爭と云つた樣に往々一時的にして目的とは正反對の樣相を呈するのである。目的的方便、方便的目的があればある程、兩者の心意上の區別が必要である。偖て今度の事變の目的であるが、之は凡そ設定しにくいものの一つである。世界大戰を例に取るも、夫がサラヂエヴォに於ける汎セルビア主義運動に絡まる暗殺事件に端を發し、夫が全歐に延燒した結果起つたのであるから、何れの政府も國民に對し防禦的戰爭である位のことを言譯し、白耳義、セルビア、アルサス・ローレーンの恢復を主張する丈で、何等の積極的目的を示し得なかつた。演說會に於ける談論

風發に獨逸の軍國主義を罵倒し、カイゼルを其の元兇として法廷に拉致すべしと云ひ、世界を氏主主義の爲に安全にすべしと云ふ位に盡きた。戰爭の末期に至つては稍組織的な綱目が列べられる樣になつたが、ウイルソンの夫もロイド・ヂョーヂの夫も、戰爭目的と云はむよりは寧ろ講和條件の豫備案であつたのである。然らば近衞前內閣が智略、柔術拔きの今度の戰爭に於て國民に目的を明示し得なかつたとしても不思議ではない。政府は今迄蔣政權を對手とせず、支那の主權、領土權を犯す意なしと云ひ、主として否定的命題を揭げて來て居る。積極的建設的命題としては思想的領域に於ける防共提携であり、何時もながらの日滿支經濟提携である。其の力なさ、其の貧困さは驚く計りである。國民精神總動員が行詰つたのは政府が此の戰爭目的を闡明にし得ない缺陷に胚胎して居ると云ふ論者の說は肯定出來る。其處で吾人は日本の歷史的必然の裡を探つて、前述の樣な遠大な併し適確な目的を揭げて見たに過ぎないのである。

目的が不明確であれば方便とても中途半端たるを免かれない。權益尊重と云ふ言葉を度々聞くが、日支戰爭は歐米の權益を尊重する目的で戰はれて居るのであらうか。歐米の權益尊重の方便となり得るものであらうか。外交辭令と云ふことは勿論あることではあるが、夫を自身の跌き石たらしめてはならぬのに、何時しか依然として聯盟規約に屈服し、九國條約、不戰條約、

加之米國中立法に屈服し、外國權益に屈服してゐる。之では今回の聖戰の目的も意義もあつたものではない。吾人の考では今回の戰爭は右樣の一切の聯盟的、歐米的勢力の擊滅の爲めの戰爭であつて、彼等の權益の我が東亞的使命に有害なるものは當然蹂躙され、剪除されねばならぬ。

然るに追隨戰爭は間歇的、曠日彌久戰に發展し、要地の陷落は妥協工作と交錯し、戰爭遂行は勿論戰後の經營すら支那側の消極的抵抗を增す方法や、口號を撰み、戰爭を支配する原理を否定して行はれて居る始末である。之で有終の美を爲さむとするのは誠に木によりて魚を求むるものであるまいか。翻譯統制經濟は實施され、戰時體制は强化せらるるも、五相會議後の發表ある每に國策は動もすれば昏迷し、國民は適從する所に迷はむとして居る。張鼓峰事件は其の部分部分に就て善處の跡を認め得るも、露國の不侵略條約の提議ありて後六ケ年にして日本の一應の不戰の意思を明確にしたに過ぎず、鈍重も亦甚しいと云ふべく此の事件全體としての東洋的反響、及び世界的反響は決して目出度きものであるとは思はれないのである。目的が明確でないから方便も妥當を制しかねてゐる。

昨年十一月三日及び十二月二十二日の當局聲明は漸く前述の缺陷を補ふに至つたが、稍我が

力を計りて退嬰的の計を立てむとする傾向が伺はれる。其の内容は第三章東亞新秩序で分析したから今は繰返さない。唯吾人は東亞新秩序が生まれると云ふよりも、長期建設丈けが登場して來る樣に直感するのを禁じ得ない。玆に本稿ある所以である。

三、勝利の降伏

社會主義は必然に敗戰主義を伴ひ、自由主義も之に墮する。從つて一應の知識人は敗戰主義者に近い存在であつて、當局者中にも斯る者が潜入して居ないとは必せない。當局者中に若し經濟に政治を追隨せしめ樣とする人々があれば此の人々は容易に俗に弱氣と稱する敗戰主義に墮する。支那人は日本のことを輕蔑して小日本と云ふのが常である。之は滿洲事變前に叫ばれた征倭論と同樣、日本の弱點は物資の缺乏、財政經濟の一寸法師的なるに在る。故に大戰爭に逢へば日本には容易に財政經濟上の行詰りが來る可能性があり、長期戰の場合には夫が必至の運命であるから日本恐るるに足らずと云ふのである。蔣介石も多分に此の考に依つて動いて居り、ゲリラ戰も往々人よりも物資を狙ふと云ふ有樣である。此の時に際し日本側から支那人へ向つて、如何にもお前達の云ふ通り日本は小日本だ、行詰りが來そうだ、否最早半身が不隨になつた樣な氣がする、と相槌を打つ必要が何處にあるか。

兎に角此の種の經濟的敗戰主義は蔽ふべからざる事實であつて、此の種の論者は須く右の敗戰の責任を最も多く負はねばならぬ。今度の戰爭は聖戰だ、經濟的利益を說くべからず、唯仁義あるのみと云ふが如き說も夫自身はよいとして、若し今度の戰爭は算盤に載る仕事ではない、始めから損の仕事だと覺悟せよと云ふのであれば、之も經濟的敗戰主義に一步を踏入るるものである。吾人は最も孤立下の長期消耗戰を憤る資格あり、謀將何處に在りやと云ひたいのであるが、吾人は今度の事變が有意義のものであり、又有意義と爲し得るものであり、夫は眼前に於ては兎に角、長い將來迄には必ずペイする仕事だと考へたい。夫が出來ない人間は、出來る人間に地位を讓るがよいと考へる。戰後久しく日本が支那に數十師團の兵を駐兵する必要ありと假定し、百數十師を抱擁した支那が之を養ひ得ない道理はない。

敗戰主義は可能のことより逃避する結果を產む點に於て弊害が極まるのである。尙政治的敗戰主義を擧げることが出來る。前述の如き無目的、無方便は人々をして所詮今度の事變は意義のない仕事である。結果なぞ期待するのが間違であると考へさす樣になる。偖てこそ戰爭目的は愈々貧困となり昏迷に墮り、躊躇逡巡方便の用ふべきもの無きに至らしめねば止まない。最

後に感傷的敗戰主義も亦跋扈して居る。昨秋水害が來た、交通は杜絶した。冷氣の爲め凶作であるかも知れぬ。〆の時も人の和も充分でないと叫ぶのである。此の論者の尤なるものは七年前の滿洲事變其のものを災厄なりとなして、之を呪はむとするかに見える。斯の如くんば焉ぞ獨伊と伍して更に防共協定に軍裝を施し得ようぞ。吾人は此の內部の敵に克つにあらざれば外敵に克つこと能はずと考へるものである。

筆者の立場は明朗である。筆者は近衞內閣成立の始め「大陸政策を確立せよ」と題し、迫り來る時艱の豫感を以て次の如く飛檄して置いた。

『我等の視野の屆く限り時艱克服の鍵は備を立てて敵をして乘ぜしめず、他日神風に御して今日より蓄積されむとする彈藥をまつろはざる匪賊達の頭上に降り注がしむるに在らねばならぬ。其の道程に至るに際し吾人國民は自由主義を滅却せぬ限り奢侈的消費部分の朝宗を快諾せねばならぬ。其の基礎の上に初て統制企畫經濟一般も成立し得て、强力全體國家との太刀打ちに堪ふる國家體制も出來ると云ふものである。近衞內閣の成立存在の歷史的意義は彈丸國家の陶鑄に盡きて居ると吾人は信じて疑はざるものである。……報國の劍は宗祖鎌足より傳へてある筈である。今は之を拔いて國民を差招くべき秋だ』

斯て吾人は本來勝戰主義者の大道を步んで來たものであり最後迄此の道を辿りたい決心であるが故に、今や進んで乾坤第一邦の實踐に付て以下に述べむと欲する。

四、乾坤第一邦

作用あれば反作用あること前述の如くであるが故に、作用が大なれば反作用も亦正比例的に大ならざるを得ない。世界大戰中獨逸は二十餘ケ國を對手として戰鬪には決して負けては居らず、物資缺乏も手傳ふて國內敗戰主義の擡頭の爲に屈辱の憂目を見た。併し右の戰勝の事實は、今日猶獨逸人の最大の誇で兵營等に刻してある事柄である。此の事實から來る興奮と奈落の底の生活とは其の反動として犧牲的精神に燃ゆる全體主義の指導者國家として忽ちに獨逸を勃興せしめた。

彼の獨逸と同樣に日本は「日本對世界」と云ふも過言でない位に世界孤立の中に聳立して居る。既に支那は人口五億と一大大陸を掩有する大國であるのに、島帝國として柔術の技も使はずに之と四ツに取組んで追々に之を捩伏せむとして居る。獨逸位ならいざ知らず、他の歐米の一强國が容易に敵對出來まいと思はれる蔣介石の支那を制縛して居る。然も吾人は他の片手を

以て善くソ聯の脅威を壓へて居る。之は巨人の二人力を併せたものであつて、奈翁の大帝國の版圖よりも更に廣大な地域を蓋ふて居る。十七師團の常備軍を玆迄に伸ばす當局の苦心は並大抵のことではなかつたらう。尙南方から英、佛、和の旣成資本主義又は現狀維持「ブロック」の妨害が來る。此の勢力は守勢的帝國主義の面目を發揮し、勇猛果敢さは之を缺くも執拗陰險であつて我方の鋭鋒は之を避けつつ商賣上手に支那を强化し、其の抵抗力を增さむとして居る。隙さへあれば我が背後を狙ふこと請合なるも、然らざる限り喜面以て我方の弱氣叩頭、保障等を最大限に利用せむとし、曳いて我が大陸政策の自由手腕を縛せむと期して居る。我國に對する政治的逆潮でなくして何であらう。此の「ブロック」は西沙島を占領し、海南島の不可侵を云ひ出し、「カムラン」灣を軍港とし、我方にして怯懦ならむか、上海に其の例あるが如く廣東の中立を言ひ出さないものでもない。併し之は完全に封じられた。

高等世界政策には勿論時間の要素と空間の要素とを勘定に入れなければならぬが、夫でも米國は支那に對して今日も九國條約、不戰條約以來の國際義務を感じたがつたり、張鼓峰事件に特別の緊張を見せたりして居る。筆者は支那を歐洲に較べて米國の對支政策は「モンロウ」主義に違反して居る、だから「フイリピン」獨立案や、極東無關心主義は强化されて米國は極東

から手を洗ふかも知れんとも考へて見たが、之は不充分な認識で實は米國に取り支那は南米である。夫を自己の勢力範圍に拉致したのが華府會議以來の所謂太平洋政策であつて、米國が歐洲、阿弗利加を見棄てた樣に極東を見棄てるものと考へるのは早計である。「ヤング」は米國海軍擴張は東京とリバープールとの間に立ちて勢力均衡上の決定權を掌握するに在ると云ふて居るが、斯樣なことは顧みて他を云ふもので、米海軍の目標は日本以外絕對にあり得ない。

之丈けの鐵柵を周圍に繞らす日本の立場は、包圍政策下の獨逸と等しく、海軍力は十割を以て足れりとせず、我が西太平洋の海上優越權を脅威せむと向ひ來る一切の勢力の結合を擊滅する丈けの十二割位の實力を日本海軍は養はねばならぬ。國際環境は實に雄邦日本に之丈けの强壓を以て迫つて來て居るのである。日本よ彈丸國家になれと余輩が力說したのは實に玆のことである。此の試練に打克てる日本は眞に世界歷史に比類なき乾坤第一邦の貫錄を示すものと云はねばならぬ。

五、大陸大洋大空體制の確立

乾坤第一邦は吾人が意識すると否とに拘はらず、古今獨步の大英雄又は大帝國が嘗て遂行し

得なかつた大陸及び太洋の封鎖、否寧ろ大陸太洋體制の確立を吾人に負荷するものの如くである。

（イ）大陸體制（Kontinentalsperre, Kontinental system）

大陸封鎖又は大陸體制の元祖は奈翁である。佛蘭西は一七九三年以來、佛と明瞭に平和狀態にあらざる國特に英國よりする製造品の輸入を禁止した。之に對し英國は海上覇權を掌握して中立國船舶に命令し得る地位に在つたから五年後になつて中立國船舶は敵國植民地產品を英國の一港又は自國港へのみ運搬すべしと發令した。然るに米國船が西班牙や佛蘭西の植民地產品を佛、和の港へ運ぶ樣になるに及んで、一八〇六年五月セイヌ河口よりオステンドに至る區域間は實力を以て之を封鎖し、ブレストよりエルベ河口迄を紙上封鎖した。

奈翁は之に對抗上十一月二十一日の伯林條令を以て英國の國際法違反に對し復仇する旨を聲明し、英國を封鎖し英國との往來通信を禁止すること、佛軍又は佛同盟軍占領地域內の英人を捕虜とすること、英人の貯藏品、商品財產等は之を捕獲すること、沒收品收入の半額は英艦の爲に損失を蒙りたる商人への賠償に振向くべきこと、英國又は英植民地より直に來りたる船舶又は發令後該地に在りしことある船舶は入港を禁止すること、虛僞の申告を爲したる船舶は之

を沒收すること、本令は西班牙、ナポリ、和蘭其他の同盟國をして等しく之を實施せしむることを下知した。其の目的は英國の富、通商、勢威を抹殺することに在りて、追々普、露、丁、墺、瑞典、葡も之に加入した。併し內亂の爲め西、葡には之を徹底せしむるを得なかつた。尙後に至り奈翁は同盟國の海港を差押へた。斯て此の太洋封鎖と大陸封鎖とは双方相次で强化せられ、奈翁は大陸の「オータルキー」を考へて、代用品の奬勵をやつたのであるが、密輸入盛に行はれ完全には實行されず、大陸諸國の經濟的損失を以て奈翁權力の失墜と共に終熄した。

之は戰時經濟政策として實行されたものではあるが、之が日滿支經濟提携の實施後の事態に近似せないとは限らない。併し吾人が今大陸に就て問はむとする所は、平時の政治且經濟的の統制力、支配力又は秩序に關係し、右は天羽聲明の事實が裏書する如く「モンロー」主義の如き內容を持つものであるが故に封鎖と云はずして體制と云ふを適當とする。從て奈翁の場合の如く決して自殺的意義を持つものではない。偖て奈翁は大佛蘭西を中心として大陸封鎖を實行せむとしたのであるが、制海權を有せざりしが故に失敗したのである。吾人は是非共西太平洋に覇權を確立せなければならないし、夫れとの關聯に於て今次の日支事變を東亞的に有意義に落着せしむるに於ては、吾人の所謂武德主義の確立に伴ふて大陸體制の確立は頗る容易となつ

て來るのであつて、奈翁の失敗せし所に吾人は成功し得る見込が多分にある。

（ロ）太洋體制

米國の中立國船舶の權利又は通商の自由なる要求は「海洋の自由」なる言葉に依りて知られて居るのであるが、海洋の自由なる語は英國の太洋封鎖又は太洋體制の存在ありて然る後意義を爲すのである。英國は海國として葡萄牙、西班牙、和蘭、佛蘭西より遲れて地平線上に現はれ始め海賊行爲をやつて居たのであるが、波浪を支配する者は世界を支配すと云ふて遲れ馳せに各地に割込を策し、前驅開拓者と次々に海上制覇戰をやつて之を破り、海軍擴張に鋭意し、海上制覇の確立と共に大植民帝國を完成した。日不沒國は日不沒制海圏を持つた次第であつた。壯年帝國主義國になつてからも二國標準の建艦案を堅持し、獨逸の建艦競爭に對しても十對十六の比率を保持せむとし、小にしては海峽、北海、大にしては大西洋、地中海、印度洋の制海權を微動だもさせないことを念願とした。世界大戰後は米國の勃興に依り大西洋に不戰原則を立つると同時に米國のみに十割海軍を認むるに至つた。併し英の太洋體制は動搖しつつも骨子は依然變らない。

帝國は目下支那海全部に亘り支那船舶に對して實力封鎖をやつて居るのであつて、其の態樣

は奈翁戰爭中や世界大戰中の英國の封鎖と根本に於て異つては居らない。我國の大陸政策は、西太平洋の海上覇權を掌握し、有事の際には實力封鎖を行ひ、平時にも之を爲す丈けの潛勢力を貯へることを絶對に必要とする。此の際に於て英、米、佛、露の海軍擴張特に其の極東艦隊の增强は我方に筒先を向けて來るのであるから、十割ではなくて十二割或は十五割の實力保持を帝國海軍に取り必要ならしむるもので、今や雄邦日本の十割海軍は乾坤第一邦の十二割海軍に推移することを要求されて居ると見るのは僻目であらうか。彈丸國家は海上に於ては西太平洋體制艦隊を持たねばならないのである。

（ハ）大陸太洋大空體制

大陸ありての太洋であることは云ふ迄もない。奈翁は佛蘭西と云ふ西歐の一大地域を足場にして、其の華かなりし大帝國に大陸封鎖を實行せむとしたのであるが、自給自足困難にして、既に海外依存性强かりし歐洲に於て制海權を敵に握られたるが故に、彼の政策は經濟的自殺行爲となり、自ら進んで密輸入を奬勵した程で、大陸封鎖は完全に實行され得なかつたばかりでなく明に失敗に終つた。併し英國は其の海上制覇が完全なりしが故に其の延長として大陸植民地、未開諸民族の上に大陸封鎖を布くことが出來た。阿弗利加、濠洲、印度が即ち夫である。

之は太洋主、大陸從の體制と云ふべく、其の事は英國陸軍の少數なることに現はれて居る。未だ以て完全なる大陸太洋體制と云ふことは出來ない。

米國は其の惠まれたる環境の下に自國本土の內に大陸體制を實行し、米國加奈陀軍事協定、「カリビアン」海政策の發展、「モンロー」主義の確立に依り立派に目に見えざる潛勢封鎖を兩米大陸の上に實行して居る。之は米國生來のもので後天的に獲得されたものでない。其の基礎の上に世界大戰後は西大西洋に柔軟なる、而して東太平洋に硬直なる太洋體制を實行して居るのである。之は固有の大陸體制に後天的の太洋體制を併せたものであつて、吾人の大陸太洋體制に最も近似せるものである。最近の大規模海空軍の擴張は明確に大陸太洋大空體制の確立を期してゐる。

筆者は最も漠然たる政治的經濟的秩序を布くと云ふ意味に於て體制なる文字を使用せんとするものであるが、帝國海軍は既に西太平洋には筆者が極東外交論策に於て述べたる如き禁令を布き、今全支那海に現實の封鎖を實行して居るのであつて、多數の太洋には及んで居ないが、英帝國の太洋封鎖に等しきものを持つに至つてゐる。加之島帝國は支那人の所謂小日本を以して大陸政策の發展の結果五億の古文明を有する民族の上に大陸體制を布き、大陸太洋體制又

は大陸太洋秩序を完成せざるを得ざるに至つた。之は世界歷史に全く獨步の大偉業である。之丈けの認識があれば海軍政策も陸軍政策も外交政策も一元的の國策も樹立され得て、莫須有の智者の夢想もせない支那に於ける長期戰と云ふ樣な場面には逢着せずに濟んだであらう。今や宿命の大陸太洋大空「ブロック」、大陸太洋大空體制又は秩序の創造に滿洲國を足場として吾人は着手して居るのである。河相情報部長の强き言葉を以てすれば「全有か皆無か」の悲壯なる決意すら藏しつつ此の壯擧に邁進して居るのである。

六、賭戰地域と長期建設

日本が大陸太洋體制を布かねばならぬと云ふことは此の一大地表が日本の賭戰地域となつたと云ふことである。日本の舊時の國際軍縮問題を扱ふた連中は賭戰地域の意味が解らずに此の問題を扱ふた。此の大陸太洋體制から來る重壓は非常なものであるが、此の體制で蔽はれる地域內には米國の賭戰地域は無い、唯遊獵地域がある丈けだ。右地域內には英國の可能的賭戰地域が一部含まれてゐる。併し夫も可能的である丈けで算盤を彈く連中だから遣り樣では素直に退却させる可能性もある。右地域には尙ソ聯の絕對的賭戰地域が含まれて居る。ソ聯の分裂が

實現されることが望ましいのは實に此の理由に依るのである。日本が獨、伊と隔絶して居り、孤立下に在ることは明瞭であるが、併し我が廣大なる賭戰地域に含まれる他國の賭戰地域は比較的に最少限である。多少の叡智さへあれば日本の大陸太洋體制は一擧手の勞であるのだ。

最近陸相は日本が露支二正面作戰準備を必要とすることを說き、海相は日本海軍力は世界の最强の海軍力と拮抗出來ねばならぬと云ふたが、之等は部分的の不完全なる表現であつて、日本の全國防は大陸太洋體制の確立に必要なる實力と云ふ言葉で表現されねば不充分であるのである。廣義國防と云ふことが軍部から提唱されたが、夫が反對に文官から主張されない位のだらしなさであるから今の樣な孤立下の長期消耗戰が見舞つて來るのである。

大陸の現實に足を着けて見れば當局の云ふ東亞新秩序と云ふ言葉よりも長期建設と云ふ言葉の方が實際的價値がありそうである。目下の處我が力と爲り得る支那側の力は地平線上に見當らない。支那に於ては一層經濟的帝國主義の舊時的相剋が激成されむとして居る。夫に共產軍も寧ろ伸びる機會に惠まれようとして居る。東亞無秩序、東亞無政府狀態が赤裸々に現はれて居る。反て長期建設と云ふ言葉の方が實行的價値を持つ。吾人は其の建設の目標として高く大陸太洋體制の確立なる標語を揭げて置く。

七、殼を脫げ

「ヒツトラー」の獨逸は數次の大革命を喫し奈落の底から立上つた全く新しい新興勢力に率ゐられた全體國家である。我國は何と云ふても一九一四年以來一度も目醒しい革新すらやつたことのない政治的實勢力は五十年一日の如き舊態依然たる國家である。戰時體制や統制經濟や生產力擴充や移住や彈丸國家や之を遂行するに悉く錆の着いた數十數百の「ブレーキ」に阻止せられて、然も新推進力は未だ極めて弱い狀態に置かれて居る。斯くては國力の絕對的强化、大陸太洋體制を布き乾坤第一邦になるには非常の支障を感ずる次第であつて、戰時經濟體制すら舊來の資本主義者自由主義者の陣營から出た人々に依り動かされて居る。從つて小日本の面影が餘りに多きに過ぎ、政府の一切の行動は皮を脫ぎかけて外界の恐ろしさに之を脫ぎかねて頭に被つて居る蛹にも似たる姿態が見受けられる。之では大偉業を宗成することは出來ない。長期建設の爲めにする乾坤第一邦の大陸太洋體制確立の空前の大事業は、日本內部の爆發的展開を以て脫ぎかねて居る皮を七花八裂さすことを要求して居るのであるまいか。

農政學の先覺佐藤信淵先生は、當時幕府の倉廩が空乏を告げ大衆に菜色あるのを見て烱眼に

も社會の疾患が特種問屋階級の搾取又は中飽にあるを察し、謂はば專賣制度又は國家社會主義を唱導し、問屋階級を排擊して大衆と國庫とを直に結付け、資金の双方への環流を提言した。誰か日本人に創造なしと云ふ、彼は東北の山奥に於て實踐と思索とに依り、既に立派なる全體主義を編出してゐたのである。而して彼は之に附加して云ふた。此の種の改革は從來の支配階級たる諸大名特に老中と云ふ樣な連中に出來る仕事ではなく、此の改革は是非共民間より布衣の徒を引揚げて之に委任せなければ駄目であると。彼の言は百代の後乾坤第一邦の大陸太洋體制を布くことが帝國の宿命であるかに看取せられ、舊日本が殼を破つて蛾とならむとするに際し、誠に吾人の胸底に迫るものがある。

西方に於て「ナチス」の旗「ファシズム」の旗の正に天に冲せむとするに當り我國に碌々たる「マルクス・ボーイ」ありて尙一人の佐藤信淵の使徒の現はれざるは吾人をして寂寥の感を抱かしめずには置かないのである。

八、結　論

筆者は前揭舊著に「時局拾收の根本認識」と題して處見を披瀝したことがあるが、今日に於

ても殆んど修正すべきものを持たない。吾人は武德主義の確立に依り隣邦人をして一應は沒法子を自白させ、其の基礎の上に聯盟的歐米勢力拔きの東亞に歸つた新民主義の新支那東亞聯合に歸依し、其の民族的要望に東亞的限界を素直に受容した中華民國の甦生を促さねばならぬ。今や支那は嘗て例尠なき程の民族戰爭を戰ふてゐるのであるから說いても到底解らぬ。是非共絕對絕命の行詰りより內省に依る價値轉換に誘導して來なければならぬ。

漠然たる否定的命題を以て國民精神を總動員することは徒勞であつて、其の運動が失敗に歸したのは當然である。然も政府當局は小日本の政治經濟の貧困さの前に毅然として立直ることすら逡巡して居る。吾人が多くの「ヴイヂョン」を以つて昨日「雄邦日本の東亞恢興」を云ひ、今日乾坤第一邦の實踐方法として大陸太洋大空體制の確立を說くは此の貧困を補はむが爲めである。

第十章　我が世界政策と列强

一、序　說

日本當局の聲明に於ける東亞新秩序、長期建設、二正面作戰陸軍力維持、世界最大海軍力と均勢の海軍力維持と云ふ標語は之を筆者の言葉を以てすれば、東洋的東亞保全、東亞自律秩序の設定、東亞聯合の結成、大東亞主義の堅持、大陸太洋體制の確立、大東亞新秩序建設、世界新秩序建設、世界大維新となるのであるが、此の事は始て體系ある日本世界政策の誕生を以て目すべきものである。此の始て科學的と云ひうる世界政策は神武天皇の六合一都、八紘一宇、天業恢弘の御豫言の發展である。右政策の開展は有色人種の覺醒、飽和過熟文明國の人口減退と之に反する創造力に富める諸國の人口增大、右矛盾より發生する白人諸國の相剋とに依りて不可避となり、世界の流轉と新興勢力の勝利とが保障されて居るのである。此の世界政策の特色は夫が直に歐米の四大既成飽和帝國主義の全部と激突を來す運命に置かれてゐる點に在り、

其の烽火は既に至る所に揚げられて來たのである。

と之が鎭壓方策如何、之が本章の課題である。

二、蔣政權

日支和平の動きは過去に遡る時は「トラウトマン」氏の滿洲國承認、抗日政策の拋棄、日支經濟提携、防共の四原則を條件とする和平斡旋を擧ぐる事が出來る。次は「宇垣・クレーギー」會談を擧げることが出來るが流產に終つた。十二月二十二日の近衞聲明は東亞新秩序を盛りた る外は右四原則の線に沿ふたもので特色は非割讓、非賠償を確約せる點にある。其の內容に就ては東亞新秩序の章に詳論したが故に玆に之を繰返さない。

十二月二十二日の近衞聲明に對し中國新政權は勿論全幅の支持を與へた。之に反し蔣政權は豫期された如く、日本は「緩兵の策」を用ひて居ると云ひ、自ら「前途の慘憺を知る」と批評し、大公報は滿洲國と提携せば支那自ら之と同一地步に在ることを容認したことになる、反共協定に加はるならば支那分裂の現狀に鑑み日本に牛耳られることとなる、日支經濟合作は利益を日本に吸收せらるる結果となる、日本の駐兵權を認むるならば支那は完全に日本の植民地と

化して滅亡する。故に主權尊重、治外法權撤廢、租界回收等の好餌に釣られず、抗戰を續けて最後の勝利を獲得せなければならぬと論じて居る。香港工商日報等は日本が經濟的困難から和平を求めて來たので、兼ねて支那の分裂を策したものであるとなし、支那は過去十八ケ月間の焦土抗戰を繼續するの堅き決心を有し、和平派なるものは國民黨政府部内には無いと論じて居る。

今や海岸線全部と南京、南昌、漢口、開封、太原等を失ふた蔣政權は四川省を中心として雲南、貴州、廣西、甘肅、寧夏、陝西の全省と廣東、湖南、江西、湖北の一部分及び支那の邊疆たる西康、青海人口一億八千萬を地盤となし、抗戰體形の立直しに狂奔し、兵力減耗の補充、軍需工業の建設、交通開拓に鋭意し、輸出入の統制、輸出の增進に躍起となつてゐる。併し孰れも文化、產業、交通等の點から見て未開地域で、交戰據點としての價値は疑はしく、蔣政權下の中央軍及び雜軍は原始生活狀態に接近しての「ゲリラ」戰術に墮し、四月攻勢や、五月攻勢も掛け聲丈けに終つて居る。加ふるに重慶、成都、昆明等の重點が何れも我が空爆下に在るので抗戰繼續に必要な建設は見るべきものがない。其處で蔣政權は和平派の擡頭、抗戰意識の減耗を憂へ、日本軍は點と線とを占領せるに過ぎない、蠶食でなくて鯨呑だから恐るるに足りない。日本軍は弱り、日本國は疲弊の極にあるから此れ以上數省を失ふとも最後の勝利は支那側にある、事變は日本軍を鴨綠江岸まで押しつめた時に終る、平和は日本軍の支那よりの撤退を待つて始めて之を議すべきであるなどと宣傳し、抗戰意識の昂揚に努め、主戰派の主和派に對する監視網を全國に敷き、國共合作の强化に努力して居る。其の結果中央軍は雜軍を睨み伏せ、地方將領の保境安民的獨立を阻止し、抗日體制の統一を保つて居るのである。勿論蔣の軍隊に進出力があるわけではなく、日英協定の打擊は大きいであらうが、あまり早急の潰滅を期待するは短見であらう。蔣の百八十度轉向と云ふことは最早問題にならず、其の下野により國民黨を救ふと云ふ事も中々困難の樣に思はれる。夫が爲めにや、陸軍省情報部編「國家總力戰の戰士に告ぐ」は狹義の日支事變丈けが片附くに尙兩三年を要する場合あるべきを警告して居るのである。東亞大事變の內輪戰は略終結した。

南京陷落以降國民黨內には著しく和平派が擡頭してゐたが、陳誠、馮玉祥、于右任、孫科等の主戰派に依り壓へ附けられて來た。併し共產黨が長沙を燒き拂ふや、汪兆銘は敢然起つて焦土戰術、遊擊戰術を攻擊し、反共和平を叫んで昆明を經て河內に脫出した。汪兆銘は爾來第一次乃至第七次聲明を行つて、近衞聲明に呼應し、日支は和すれば共に存し、戰へば共に滅ぶと

說き、日本の條件即ち善隣友好、經濟提携、共同防共は蔣介石すら之を受諾するの用意があつたと說き、和平救國を絕叫し、全國に呼び掛けて居る。本來和平派は國民黨の過半數を占めて居る上に汪兆銘は國民黨文治派の長老として最高權威の把持者であるから其の進退の全支那特に中國青年層に及ぼす反響は頗る大きく、他面其の蔣政權に及ぼす衝擊も大きかつた樣である。私見に依れば近衞聲明と汪聲明との間には多少の距離があり、聖戰目的貫徹の爲には汪をして眞實の東亞新秩序の使徒たらしめる事が望ましい。最後の切札が出んとする場合、之に至高の祈願を繫ぎ、特等の神饌を供するは敢て不可なきも、思想戰たる事を顯著にする目下の聖戰に於て自他に毒物を混用せないことは肝要の事柄である。臨時、維新兩政府、兩者の聯合委員會等の强化合作、其の上に君臨する汪兆銘を中心とする統一中央政權の登場、其の國民黨和平派及び雜軍等に及ぼす精神的影響、吳佩孚等の舊軍閥將領又國民黨將領の轉向から政治力と武力とが合作する樣になり、其處から新中國と東亞新秩序とが起ち上ることになるであらう。

三、米　國

米國の極東政策と「モンロー」主義との關係を按ずるに、米國の極東政策は「モンロー」主

義の消極的方面即ち舊世界（歐羅巴）に對する不干涉政策とは不一致の關係にある。併し前者は後者の積極的方面即ち南米に於ては歐洲の支配權を排除して自己の支配權特に弗外交を發展さすと云ふ方面とは一致の關係に在る。故に米國は支那を南米化せんとするのであつて、此の意味に於ては矢張極東に「モンロー」主義を布かむとするものであり、日本の東亞大陸綏靖とは兩立し得ない。吾人は米國の妨害特に消極的不承認政策又はスチムソン主義位は斷乎として之を蹂躙せねばならないのである。加之吾人の新秩序の延長たる世界新秩序に於ては西半球の東半球に對する質量的劣位が確立され、其の西半球（南北兩米大陸）に於て多數大國を抱擁する南米の北米に對する平等が認められねばならないのである。

翻つて日本は唯朝鮮に西歐諸國の侵略が加はるのを虞れて居た。清國は朝鮮に對し宗主權を主張しながらも、其の內治外交には責任なしと主張し、其の獨立を裏書した。其處で日本側から朝鮮自立の爲めに其の內政改革に共同して援助しようと云へば支那側は之を拒絕した。朝鮮が支那のものとして殘り、日本が大陸から手を退いて居たら勿論朝鮮は滿洲と共に露國のものとなつて居たであらう。三國干涉に依り日清戰爭の獲物たる遼東半島を還附したとき、支那は夫を第三國に讓渡せざる旨を約束するを拒んだ。加之倭人の露を畏るること虎の如きが故に露

を以て倭を制すべしと爲して露と防守同盟密約を結び、露西亞を滿洲に引入れ、團匪事件を契機として東洋的には全く滿洲を棄て去らむとした。夫れと同一の事が今日も支那の到處に繰返されて居る。日本は躊躇逡巡し、米國務卿が支那の門戸開放、支那の不可侵を提唱し、露國の滿洲侵略に對して抗議するに當り最も之を歡迎した。門戸開放主義は英人支那稅關吏「ヒツピスレー」に依りて立案され、之が其の友人在北京米國公使館書記官「ロックヒル」に渡り、此の人が「ヘイ」の被信任者で遂に米國の外交宣言となつたので、此の宣言の系圖は英國に遡る。さて米國も英國も彼等の賭戰地域に入らぬ滿洲の爲に戰ふを欲せなかつた。日本が乾坤一擲露國に宣戰したとき米國が好意的援助を惜まなかつたのも偶然ではない。「ポーツマス」會議直前「ルーズヴエルト」大統領は金子特使に告ぐるに、日本が過渡期に於ける亞細亞諸民族の指導者保護者たるべきことは恰も米國が米大陸の隣邦に對する夫の如くあるべきこと、日本「モンロー」主義は歐洲諸國の併呑氣運を除き亞細亞民族自立の楯たるべきこと、該主義の掩有する範圍は印度、安南、「フイリピン」群島、香港、其の他の歐米植民地を除く以外の亞細亞諸邦を含むべきこと、合はせて日本は米國の極東政策を尊重すべきことを以てしたとのことである。

以上は亞細亞特に東亞に於ける日、米の目的が大乘的に一致して居ることを示してゐる。併し此の一致は既に一度述べた所の如く實際上は小乘的不一致として發現して居る。蓋し第一に米國が帝國に支那の門戸開放と支那の不可侵を嚴守し、滿洲を支那に返還せんことを要望したのは彼等の南米政策の東亞應用から出でたのであつて、決して日本を理解するが故ではなかつたからである。露國がまだ滿洲の大半を占有して居るのにどうして日本が退却出來るか。此の點に關する米國人の無理解は殆んど絶對的である。第二に米國は太平洋彼岸の國として亞細亞大陸の海港の自由問題、沿岸通商自由の問題と云ふ一面のみを見て、西歐列强の大陸背面より來る政治的、軍事的、經濟的、思想的侵略には殆んど風馬牛相關せざるの態度を持するに反し、既に大陸に立てる日本は、北滿、外蒙、新疆方面に於ける露國の進出、西藏及び中、南支に於ける英國及佛國の策動に對抗せなければならず、之が爲に大陸の核心を睥睨して居らねばならなかつた。第二十世紀に入りて以降も英、露、佛の對支侵略が繰返されたるに米國は何等有意義の措置に出でず、其の極東政策は專ら日本抑制即ち大陸背面よりする進出の庇護に役立つた。日米は東亞の大局に處する態度に於て友邦ではあり得ない。

米國極東政策の第二版たる不承認主義は山東問題より起り、西伯利亞出兵を經て、滿洲事變

後まで繰返され、今度も亦繰返されて居る。吾人が舊著雄邦日本の東亜恢興第三編第六章に述べた事柄の續きとして、吾人は最近米國が英、佛と協同動作に出で、昨年十月六日と十二月二十一日との前後二回の抗議に於て日本軍占領地域に於て米國人の往來活動が制限さるることは日本人の特惠的地位に在ることを意味し、門戸開放主義に對する違反を構成するものである、諸締盟國の權利無視、條約上の義務違反から生れた新事態は承認出來ない、東亜に關する國際會議の開會なら同意すると云ふ樣なことを主張して止まない。黄河の水が乾いても米國の斯る言分は變更せない。帝國政府は對米回答に於て事變前の事態に適用されたる門戸開放、機會均等及び九國條約の觀念乃至原則を以て現在及び今後の事態を律せんとする事は、何等當面の問題の解決を齎す所以ではないと應酬した。米國は英佛と協同的又は併行的に對蔣借款二千五百萬弗を賦與し、軍需品、機械、食料品等を大量に供給し、米支銀協定を結びて爲替上の便益を供與した。他面對日武器輸出を一部的に阻止して居る。「スチムソン」は此の頃、英、佛、ソとの合作を說いた。米國には排獨、又は排獨、伊、日熱が强く、英、佛、ソ親近論者が六割を占めると云ひ、日英衝突には米は英に組みすると說く者の說は一考に値ひする。米國が西半球に大陸太洋大空體制を布かむとし、無敵空軍、條約量を超ゆること四大空體の獨自のはかかに

割又は夫以上の海軍力を增强する其の鋭鋒は全部日本に向つて居ると見るが安全である。併し卑見に依れば東亜と西太平洋とは米國の賭戰地域に含まれて居らぬ。米國に取り日本は支那よりも四倍も重要な市場である。日本貿易の最大の對手は圓「ブロック」を除いたら米國であつて、日本は軍需材料等最も多くを米國から仰ぐ、米國からの輸出を止められぬ方がよい、そこで米國の感情を尊重するに急で、英と米とを引離す樣に努める必要がある。米國も亦失業者はあり、孤立論者は多く、選擧對策は考へねばならず、旁〻其の成功の要件も多少はあるわけだ。もし西太平洋に太洋體制を布く器量が日本側に在れば、遊獵の目的にならぬ丈けの準備が日本側に在れば、既に門戸開放主義の爲め戰ふの意なしと言明してゐる米國の感情的理想主義を氣拔けさせ、米國の海軍力を中立化し、無害とすることは必ずや出來る。此の任に當る人々は此の前面の可能的假想敵に對し、北方ソ聯、南方英、佛の海軍力が尙微力とは云へ呼應する關係に在ることを忘れない樣に要望する。東亜新秩序が大陸太洋大空體制を確立した乾坤第一邦日本を必要とするとは此の意味である。

最近上院外交委員長「ビットマン」氏の對日絶交論が起り、大統領の對議會調書中に於ける中立法改正に依る日、獨、伊等侵略國に對する經濟制裁論が起り、續いて對日經濟制裁案、英

米協同戰線說等も流布されたが、其の孰れもが具體化するに至らない。米國務長官は天津事變に關し之を日英間の地方的衝突と認めるが、局面の發展には重大關心を有すると稱し、主として在支米國人の生命財產の保護に留意し、排日援蔣に深入りしすぎて英國の爲めに火中の栗を拾ふの愚を犯すまいと戒心して居るの狀が窺はれる。先日米國は突如として日米通商航海條約を廢棄する旨通告して來た。之は追て對日强硬政策例へば經濟制裁の如き手段を執る場合の障碍を除去し、東亞に於て英國の讓步に追隨せずとて英國を牽制し。我方に心理的壓迫を加へ、大陸政策を牽制すると同時に、米國の在支權益確保上の手段に供したものであると觀測されてゐる。從つて今日既に實行されて居る武器禁輸の强化とか、中立法の發動とか、嫌がらせが嵩じて來る事も豫斷し得られる。此の時は顧慮なく戰爭宣言をやり、交戰權を獲得すべきだ。併し來年二月の大統領選擧戰を控へて排日氣勢の澎湃たる輿論に媚び、選擧戰を有利に導かむとする內政的考慮が決定的要素であるとの觀測も行はれて居るので、此の場合には何等按ずる程の事態は結果せぬかも知れない。兎に角廢棄通告の効力發生には六ヶ月の期間があり、新條約締結に至る餘裕もあり、一國の經濟制裁は左迄恐るゝに足らず、死中に活を求むるの手段は幾等もある。今迄の經過で米國に取り第二義的なる門戶開放と不可侵との爲めに米國が干戈を執

ることが出來ず、極東が米國の賭戰地域外にある事が愈々明瞭となつた。併し前述の如く東亞の大局に處する上に於て日米は決して友邦であり得ない事も愈々明瞭となり、米國が婦女子の如き女々しき態度で敵性を現はして來たのは全く吾人の覺悟の上の事である。吾人は諸條約の破棄等徹底報復手段を考究すると同時に相當の覺悟を以て東亞新秩序の建設に猛進せなければならないのである。

四、英　國

英國は支那の第一國際的開拓者で、日淸戰爭迄は獨自で支那の對外關係を決定した勢力は見上げたものである。今日でも北京に於ける唯一の國際的國際日で一切の銀行が休業するのは英國の天長節であると云ふ事に徵しても其の實勢力を測知する事が出來よう。今日の通貨で計算すれば全體の投資は百二十億圓にも達するであらう。天津條約以來、天津、北京、唐山方面に於て爲したる投資、京奉、津浦、京漢、京包線等に對して爲したる借款、鑛山の經營、稅關の監理權等があるのに鑑み、急に北支から退却することを期待するわけには行かない。唯死活的利益と云ふ程のものでもないから溫和に引退る可能性も多少はある。其の成否は日本の國力の

强弱、外交的立場の順逆、歐洲情勢奈何に依存する。之に反し中支即ち揚子江流域は多年獨自の勢力範圍として經營し來り、對支投資の七割五分が上海に在るので挺子でも動くまいと頑張る様子である。既に英支提携の爲に讓れる限りは支那自身に對して讓つて仕舞ふて居る。印度洋印度に對する脅威を日支消耗戰に依り双葉の内に摘取らむと深く考へてゐる藝當は非凡で、大英帝國らしい働き振ではある。多少の違算は日本の財政經濟力過小評價の爲め援蔣政策に行き過ぎて居る點にあるだらう。香港、廣東を中心とする南支も中支に準ずる。從つて此の方面に於ては戰爭か無血革命かは別として東亞の國際的革命と云はるべき程の流轉なしには新秩序は生れまいと思はれる。新秩序は暫らく誕生を見合はせるか、必要の前に全租界租借地を排除して痙攣的に躍り出でるか、誠に興味ある問題である。近衞聲明は充分明瞭ではないが中南支に於ては前者をめざしてゐるかに思はれる。日英は支那に於て一部の共通利益を支那の民族運動に對して共々に擁護するの立場に置かれ、日本と英帝國との貿易は孰れも頗る重要だが、兩者共提携を時期を異にして拒み合ひ、兩者は今事變を契機として全く異なれる軌道を歩む様になつた。日本に舊秩序を戀する親英論者はあるが覆水は到底盆に戻らないであらう。英國を通しての今頃の日支和協なども東亞新秩序の手前出來ない相談であらう。而て英國も米國同様日

本が支那の政治、經濟、文化生活を强制的に其の支配下に置くことは認めるを欲せない、九國條約の一方的廢棄は之を認め得ない、極東關係會議なら協力する用意があると云ふ主張を繰返して居るのである。大局論として前掲拙稿に述べたことは今も其の儘有効である。即ち北支に於ては英國が其の餘り大ならざる利益を今次の日支事變後の事態に適合せしむる様淸算するの可能性が稍々多い。併し反對に中南支に於ける英國の重大利益は右淸算を可能ならしむる見込が極て尠い。（拙共著、英國反省せよ九〇頁參照）現に英國人は經濟力を動員して日本の國力低下を期すること、其の方便として援蔣政策を持續すること、民主主義國戰線を動員して共同干渉を誘致すること、英國の東亞に於ける地位を確守すること等の方針を堅持して居る。新聞論調は支那に對する好意的中立、對蔣援助の供與、自國權益の保全、對日報復と云ふ様な言葉で充ちてゐる。倫敦「タイムス」は近衞聲明に關し、戰勝國の講和條件としては近代歐洲諸國の例に比し穩當の感あるも仔細に檢討するとき日本側提案は實質に於て從來と何等變化なし、支那は日本を盟主とする東亞「ブロック」内の從屬的地位を受諾せざるべからず、支那が誠意を以て之を受諾せば講和條件は寛大にすべく、諸外國が之を默認するに於ては其の經濟上の權益は之を保持し得べしと云ふに在りと批評して居る。何の道不退轉の我が國策が特に余輩の所

謂大東亞新秩序がいつかは中南支の制壓をも必要とする結果、日英双方の利益に痙攣的取引を必要ならしむる虞が多分にある。併し此の取引をして戰爭に墮せざらしむることは、相手が昔は「平和と光榮」今は「一生平和だ」と悦ぶ程平和に戀々たる國民であるに鑑み、絶望的ではなくて唯之が爲には英國人の比較的可塑性を前にして我が政府に於て外交に於ける時間空間の前後遠近を峻別し、國力の擴充利用に於て活殺自在の妙機を捉ふることを必要とするのである。兎や角する間に他國の極東艦隊及び空軍の强化することは之を念頭に置き、常住不敗に立つを忘れてはならない。

拙著、雄邦日本の東亞恢興第三編第六章の記述に加ふべきは天津英租界隔絶以後の發展である。我が同胞の頭には從來排英とか抗英とか云ふ事は浮び得なかつた。蓋し我が智識人の學問は飜譯學問、準飜譯學問たることを本質とし、(其處から大學の顚落が結果した)自由に考へること、自主的自律的に判斷する事を阻止されて併も覺らずに居たのである。從つて世界大戰終末期や、華盛頓會議に於て加へられた忘恩の處置に對しても同胞は餘り憤ふる所を知らなかつた。併し今度の日支事變には英國の敵性は餘りにも顯著なるものがあつた。特に我が最後の成功の保障と賴む天津に於てすら「テロ」犯人の庇護、抗日反日分子特に蔣政權、共產軍代表

に對する便宜供與、抗日文書の氾濫、英工部局夫自身の反日策動、聯銀券に對する妨害等目に餘るものがあり、此の儘で推移するならば英租界と云ふ重慶の出店、英蔣合作の據點に制せられて東亞新秩序は北支に於てすらも死產に終はる虞がある。其處で天津海關監督程錫庚氏暗殺犯人引渡拒絶事件を契機として昭和十四年六月十四日以降天津駐屯の皇軍は斷乎として天津英佛兩租界を隔絶し、嚴重なる檢問檢索を開始し、後には鐵條網を廻らし之に電流を通ずるに至つた。此の出來事は滿洲事變に始まる東亞新秩序建設途上の一里塚であると同時に、過去一世紀間の東亞外交史を知れる者に取り深甚なる影響を持つ劃時代的出來事であるのである。

國際政治の見地から見ると外交の課題は內的需要の國際的當爲化にあるのである。如何なる外交上の主義原則にも孰れかの國の利己主義が宿つて居る。過去四十年間極東を領導し、搔き廻はした門戶開放、機會均等、不可侵を中心とする極東國際政治の大憲章も實は米國を傀儡とする英國の籠絡手段であつたのだ。極東領導權は英米合作に依り完全に握られ、極東諸民族は其の下敷となつて殆んど獨立國ではなかつたのである。而して吾人が義憤を禁じ得なかつたのは斯る言ひ甲斐なき事態に對してである。今回の事變の實相は極東領導權、親權、師導權の爭奪戰たるにあつて、其の不俱戴天の交戰國は日、英であるのである。此の光に照らす時蔣介石

と東亞との演じつゝある滑稽なる悲劇が浮彫りになつて現はれる。今や天津の封鎖に依つて東亞大事變に於ける外輪戰の伏面の敵は赤裸になつて吾人の前に登場したのである。

天津英租界の封鎖に端を發する東京會談の結果として「英國政府は大規模なる戰鬪行爲の行はれて居る支那に於ける現實の事態を確認し、且右事態が存續する限り支那に於ける日本軍が其の安全を確保し、且治安を維持するため特殊の要求を有することを認め、また日本軍を害し又は支那側を剩するが如き行爲を排除するの要あることを認識す。英國政府は日本軍が如上の目的を達成するに當り之が妨害となるべき一切の行爲及び措置を排除し、且在支英國官憲及び英國國民にこれを明示し右政策を確認せしむべし」と云ふ有田「クレーギー」協定が締結された。英國は從來も表向き中立を守つて來たので政策の變更ではないと說明する。併し吾人の國際政治眼よりすれば右協定は英國が壯年期を過ぎんとし、死活利益でもなき儘に、印度洋に接する茫大な領土迄も賭けて乾坤一擲の豫防戰爭を敢てする事を避けて、支那に於ける平和的變更に同意し、極東領導權東亞親帥權を日本に引渡したと解せらるる場合に於て重大な意義がある。蓋し此の第一の讓步は日本の既得の地位を鞏固にし、日本の進出力を旺盛にし、第二の讓步に持つて行くからである。本協定の眞價は其の日本經濟力過小評價に基く援蔣の打切り、共

同租界改革、新中央政權への協力、抗日英官吏の更迭、通貨問題の解決に如何に具體化するかを待たなければ判明せないが、英大使が本協定は上海、鼓浪嶼等にも誠意を以て適用するが幸に上海には摩擦もないと云ひ、平沼首相が右協定は全支に適用され、外國の權益は新秩序と兩立する範圍內で認められるのだと言明した事は滿足するに足りる。勿論英國は新協定に依り東亞新秩序を認めた次第でなく、日本の優位も認めたとはしたくないであらうから、新協定が北支のみに適用されたり、租界返還問題の中止、英國の權益尊重等を條件として居らないとは尙早に斷言出來ないのである。

英國が兎に角此の程度の讓步を爲したのは、英國極東海軍が佛和海軍を合はすも尙帝國海軍の六分の一に過ぎずして到底極東にて勝味なきこと、「ダンチヒ」問題等で歐洲が一觸即發の危機にあること、蘇英同盟に依る對獨包圍陣完成の望尠なきこと、米國引入に失敗したこと、英國の在支利益が死活利益にあらざること、援蔣が負け馬の馬券を買ふに等しきこと等に職由する。從つて蔣の抗戰力、世界の情勢、我方弱點の曝露等により東京協定の効果は千變萬化するものと見なければならない。併し興亞外交の此の初步的勝利が尠くも北支に於て東亞舊秩序に對し新秩序を併立させ、聖戰に七割の勝利を確保すると同時に、我が親帥權の全支に對する

確立に依り小東亜新秩序が大東亜新秩序に移行し、遂には聖戰に十割の勝利を保障するに至らむことは今や期して待つことが出來る。事變はどうやら峠を越した樣である。

五、佛　國

佛國の極東政策は歐洲外交政策の唯の延長たることを著しき特色とする。此の點帝政獨逸の極東に於ける波瀾萬丈の外交政策と全く異つて居る。今日に於ても佛ソ同盟あるに鑑み、ソ聯との合作は消極的である丈けで、佛國の東亜に於ける蠢動は日本を憚かり彈力性を示すこともあるが、ソ聯の夫と併行し得ること帝政露西亜時代と同一轍である。英國との關係に於ては、佛國は英國の「ポッケット」中に在ると云ふても過言でない程英國追隨をやる。其の事は對蔣援助の爲めにする天津、上海佛租界内の蠢動に於ても全く同一轍である。帝國が海南島、新南群島を壓へたことは佛國に取り痛手で彼を抗日に向けるかも知れぬ。佛國も亦英、米に追隨して民主主義國戰線に加はり、日本の對支政策は支那の不可侵、支那に於ける門戸開放主義と兩立せず、九國條約は有効で一方的に廢棄は許されない、併し本條約を永久有効なりと主張する次第ではなく、關係國會議の開催に協力する用意があると主張して居るのである。日本としては

恫喝し去るべきだが虎の威を借る狐の樣な所に居るので都合が惡い點もある。東亜新秩序としては三國干涉以來の蟠りの殘餘を清算する意味で、大東亜主義を進行せしむる意味で、追て何とか措置せなくてはならないであらう。虎が片附けば最早問題でないことは云ふ迄もない。過去七十年間雲南、廣東、廣西方面に勢力を扶植して來た佛國は英國同樣蔣援助を以て權益保持の捷徑と考へ、印度支那、廣州灣を通ずる五ツの援蔣「ルート」を經由して軍需品を供給し、此の事實を指摘した谷公使に對する「アグレマン」を拒否し、佛蘭西の飛行士多數を送りて支那空軍の再建を助け、三億法を投じて「カムラン」灣の要塞化に乘出し、河内等に飛行基地飛行機工場を設置し、英國と呼應して極東防備を强固にする意味に於て「シンガポール」に於ける英佛極東軍事會議に參加して居る事は忘却してはならないのである。

六、蘇　聯　邦

日本に滿點の國策政治家ありしならむには西伯利亞出征の時占據點にどつしり腰を据え、其の延長として滿洲問題を解決し、熱河攻略の頃北支五省を完全なる緩衝地帶となして、今頃は海に十二割海軍、陸に百萬不敗の大兵を擁して嶋を負ふ虎となり切つて居たであらう。此の場

合には支那は隨意に所謂東亞新秩序の建設者となり、資本的、共產的帝國主義を片附け、日支事變は起らなかつたらう。然るに日本人は尺土寸地も銃劍と枯骨で念入りに耕したがる癖があつて、滿洲に三十年掛つて居る次第である。

筆者はソ聯を「二十世紀の大病人」と命名したことは前述の通りであるが、何故に然か云ふか。蓋し人間は自然の子である、自然の內に人間は生きて居る。又自然が人間の內に生きて居る。明確なる國家組織が成立する以前人間は何萬年となく斯る生活を續けて來て居る。國家が黎明を告げても耕して喰ひ、井を掘りて飲む、帝堯我に於て何かあらむと歌ふて居る。此の人間が宇宙法則（コスミック・ロー）の兒であることは全部否定し難いのである。玆に筆者が日本中道全體國家主義を提唱し、國防戰爭の必要を前提としてのみ極度の國家社會主義、寧ろ國家國家主義を是認せむとする所以がある。然るに露國は猶太人の机上の空論を實行した。併し宇宙法則を奈何ともすることが出來ぬ。人間の熱情は多く家族我、民族我を通して動員される。然るにソ聯の熱情は一切人工的虛僞である。能率增進の方法として共產黨への誠忠、社會主義者的競爭、突擊主義、「スタハノフ」運動を以て次々に第一次第二次五ヶ年計畫を推進して來たが、機械の損傷、「スタハノフ」運動者の優遇と夫に對する反感との爲め二年足らずで「スタハノフ」運動は罷み、

第三次五ヶ年計畫は最早之を語るものもない。合同本部、併行本部、「トハチエフスキー」事件、右翼「トロツキスト」、宮殿陰謀事件等で幹部の大手入となり、將校の六七割減となり、軍部內反「スターリン」熱の昂揚となり、赤軍戰鬪力の減退となり、昔の「チエカー」、「ゲー・ペー・ウー」即ち今の內務人民委員部で「プロレタリヤ」獨裁の標徵たる拔身の劍を振ひ、毒藥を使用し、密告地獄を現出するあり、「愉悅を通しての力」と云ふ獨逸と對蹠點に立ち、國內政治は全く暗黑化され終つた。之は國家を變じて生甲斐なき牢獄となしたものである。「コンフォーミズム」迎合の外生き樣のない社會は怖ろしい社會である。此の反動は「トロツキスト」の樣な陰謀なしとするも必ずや來らざるを得ない。腐れ切つた「スターリン」獨裁權の崩壞は時の問題と見て間違ひなからう。蘇聯が佛蘭西大革命末期の症狀を全面的に露呈しながら辛うじて國內的に彌縫し得て居るのは革命第一期生にして地下潛行運動の强豪「スターリン」の巨腕に待つので、昔は自由の名に於て今は共產の名に於て血に狂ふ罪が犯し續けられて居る丈けだ。其處には主義もへちまもあつたものではない。蘇聯には世界革命は出來ぬ。併し國內的には「マルクス」の學說に反し所謂「プロレタリヤ」專制確立後尙永久革命に晒されて居るのである。

露國は百六十種又は二百種の異民族から成ると云ふ。而てソ聯は十月革命の標語として民族主義を標榜し、少數民族の懷柔、各種民族共和邦の創設に努力して來た。併し未發達である爲階級意識は跟跡丈けで遙に民族意識の方が强い各少數民族は右中央政府の方針に慣れて分離獨立の傾向を顯著にする樣になつたので、中央政府は政策を一變し、大「ロシア」主義を高調し、其の言語も少數民族に强い、其の產業から自給自足性を奪ひ、少數民族の移住、混同を促進すると云ふ態度に出で、少數民族の指導者を慘殺した。此の反動として反共產主義、反「スターリン」主義と民族主義との合作に依り機會だにあれば爆發せむとする「ウクライナ」以下の分離運動は興味を以て注視さるべきである。

支那事變に際しては彼等は日ソ衝突を惧れて、矢表に立つを避けて、裏へ廻るの主義を取り、嘗て忘恩にも共產黨を彈壓した蔣介石の哀訴嘆願に聞きて之を援助するの方針に出で、徐々に浦鹽斯德、「オデッサ」、「コンミンテルン・ルート」より援蔣の爲武器を送り、新疆への駐兵を交換條件として蘭州、西安方面への武器輸送を次第に增し、支那の機械化部隊の練習生を大量に預かることとなし、棚晒し不良武器を支那に高價に賣付けて利得して居る。斯て支那の長期抗戰を可能ならしめ、日本の國力を減耗させ、結局に於て支那の全般的赤化を招徠せむと

欲して居る。而て蔣が陝西、甘肅、寧夏を共產軍の地盤と定めて居るので、此の方面から日本對支那紅軍及ソ聯派遣兵との連引が始めらるる可能性が多いと云はなければならぬ。近衞首相の防共區域防共駐屯の必要も首肯出來ると云ふものである。

筆者は前揭舊稿に於て「ソ聯は自主的戰爭計畫を持たないものと判斷してよい樣である」と述べたが、張鼓峰事件を經たる今日に於ても此の言を撤去する必要を認めない。「ボイル」湖畔及び「ノモンハン」の上空にては我が荒鷲群が一以て十に當つて世界戰史に輝く武勳を樹て、陸上に於ても機械化部隊の熱戰に頑敵を壓迫して居るのであるが、此のソ蒙軍と日滿軍との衝突は反覆され、其の間敵機は深く滿洲に侵入し、萬一の危險が氣遣はれる程であるが、夫でも尙吾人はソ聯が國境防備を堅むるに鋭意して居るのでソ聯對日滿兩國の全面戰を展開するの意圖は無之きものと觀測したいのである。彼等は外國領土は一寸の土地も欲しくないと云ひ、國際戰爭が自己政權の命取りであることを知つてゐる。夫にも拘はらず彼等は不法越境等國境事變を頻屢にし、鑛山、漁業利權を壓迫し、强がりを僞裝して我方を牽制せむとし、外交上も我が權益の消削に鋭意し、不俱戴天の敵性を愈々顯著にして居る。今凡百の視角から見て日露戰爭は既に始まつて居ると云ふても過言ではない。併しソ軍は赤色國際革命と愛國主義との矛盾、

軍團に於ける指揮官と其の監視者たる政務官との對立、優遇されて警察と國境守備に當る「ゲー・ペー・ウー」と正規軍との相剋で充分に戰へるとは思はれない。吾人は天の時、地の利、人の和を得て、是非共露國の分裂を誘致せなければならぬ。順が少々狂うたが蔣政權は之を潰滅せしめて、次には先づ北進へ、之が帝國の宿命である。此の順序が顚倒することありせば夫は逆路である。東亞の東北の綏靖は遲るれば遲るる程困難を增す場合あることも、次の戰爭も容易に長期戰となり得ることも覺悟せなければならぬ。夫は相手の陸軍ばかりでなく、海軍も亦增强されるからである。近日ソ聯の弱勢黑海艦隊が十二隻孰れかの方面へ出たと云ふ樣な情報も飛ぶ程である。併しソ聯が二十世紀の大病人であることには變更がないのだから吾人は百年戰爭の覺悟で臥薪嘗膽を續けるならば必ずや救はれる時が來るに相違ない。

七、包圍政策

世界大戰前歐洲で獨逸を惱ました包圍政策は再開された。世界大戰前外交上伊太利は獨墺側にあつた。墺、捷克、「メメル」を併はせ匈牙利と結んだ獨逸と「エチオピア」、「アルバニア」を併はせて軍事的に强大になり、或は「ニース」「コルシカ」「チュニス」と叫び、或は「チ

ユニス」「スエズ」「ジブチ」と叫ぶ伊太利とが英、佛等の策動に拘はらず硬く握手して居るのであるから、獨逸の植民地及海軍力喪失と云ふ點を除く外世界大戰前の三國同盟は陸空軍の關する限り稍强化されて再生した次第である。人口八千萬、陸軍八十萬、空軍五千臺を算する獨逸の佛蘭西に對する優勢は絕對的である。伊太利の空軍、潛水艦又賴むに足る。英の海軍はまだまだ絕對優勢であるが、獨、伊は潛水艦、空軍で之を惱ますことが出來る。今度は英海軍を打倒する新機軸を出してから、歐洲一般戰爭に入ることが彼等に取り望ましい。偖て「ロカルノ」條約に於て英の賭戰地域にあらずと英が認めた獨逸の東部國境を佛蘭西丈けは保障して居た。然るに捷克は獨逸に併合され、之に依つて「チャーチル」の云ふが如く歐洲の同盟組織が全部崩壞した。其の翌日になつて英國が慌てゝ之は英國の賭戰地域だと廣告しても誰も眞劍に受容れる者はあるまい。獨逸は腹の中で笑つて居るに違ひない。多少手應する波蘭、丸で脆弱な羅馬尼亞、希臘、土耳古を連ねて獨伊樞軸の包圍陣を形成して見ても、其の睨は到底きかない。昨日無効なりしものをより惡い環境の下に又作つて見ても明日の有効は決して期せられないと思ふ。更生西班牙、勃爾牙利、洪牙利は勿論、「ユーゴー・スラヴィア」も多分國民戰線側に組みして居る。刀を誠に遊ばすに餘地あり、「トランスシルバニア」、「ダンチヒ」、「コリ

ドール」等が次々に回收される番であらう。併し獨伊は餘り焦せらず、漸く丸呑にして胃に收めた獲物を消化して筋力を强める爲め少時猛牛の反芻時代を現出するであらうと思はれる。歐洲は大なる危機を藏しつつも暫く火花は散らぬと解される。併し「ダンチヒ」の形勢が一觸即發に近くなり、英米が軍擴を急いで居るから獨伊の幸運が一九三九年中の早期攻擊にあることも念頭に置く必要がある。右の包圍陣に氣分の上でソ聯が加はり、前述の世界的病人と云ふ弱點を持ちながらも資本主義の最高峰と結んで居り、米國も之に加はらむとして居るのは宇宙法則の存在を立證するものである。本質的對立は現狀維持と現狀打破だ。說を爲す者は曰はく、赤露が獨伊の成功を欲せないのは勿論だが、英佛も亦大に弱はり、其處に全歐洲赤化の契機を摑み得る機會を狙ふて居るから之は誠に危險なる伴侶であると。或は然らむ。併しながら赤露に對する十字軍などと云ふことを考へる人達も亦公式丈けで「イデオロギー」丈けで世の中を考へる弊に墮するもので、吾人は嘗て左樣なことを考へたことはないのである。久しき懸案の英佛ソ同盟が「バルト」海諸國保障問題の爲めに行き惱み、或は流產の形勢にあるとも噂せらるゝは歐洲包圍政策未完成の標徵として獨逸の爲めに賀すべきである。他面英の對獨接近の身振りがあり、波蘭問題が燃えさからんとする際「ソ」獨接近特に必要から來る經濟的接近が傳

へるゝことは注意する必要がある。英、佛、ソ同盟が極東問題を戰爭原因として取上げる可能性あることも是非注視の必要があらう。伯林羅馬樞軸に對する包圍政策陣と我國に對する夫れとが全く同一の可能的想定敵より成れることは防共協定が左樣な單純なものでなく、多くの可能性を包藏せることを立證して居る。唯歐洲に於ける現狀打破派の結盟が勿論伊太利の役に立つ事もあつたが、其の後は主として獨逸の方にのみ役立ち、反對給付として今後又伊太利の役に立つ爲めには「チュニス」、「ヂブチ」、「スエズ」を持つ英佛に對抗上結盟は英佛を主たる對手とせなければならぬ事、伊太利に取つては今東地中海の方が問題でソ聯領のことなどは遠い遠い將來の問題の樣に考へらるゝ事、日、獨、伊防共協定强化の爲めには此の伊太利に血の着いたソ聯の肉片例へば石油地帶でも見せ付ける必要ある事、「イデオロギー」は問題でないが實は露國が完全全體主義で、獨伊が不完全全體主義である事等は之を念頭に置く必要がある。

歐洲の如上の新形勢と相似の形勢が蔣政權、ソ聯、佛、英、米の故意の提携又は併行的合力に依り東亞に於ても生れ出でむとして居る。最近も英、米、佛は北支爲替集中問題に關し共同申入を爲した。一と昔前から「第二の獨逸」と云ふことは考へられたのであるが、孰れもユル輝や弱虫共の取捲きであるから各個擊破の餘地は充分に殘されて居る。加之蔣政權に對する片

手切は續けられるであらうし、今後一面多少の國力の消耗が續かうとも、長期建設を通して我が國力が恢復し、伸長して行くならば、我に對する包圍政策は形成もされず、形成されても威力を發揮することはあるまい。猫の首に鈴を着けて之を無害にしようと云ふ鼠の相談は誰が鈴を着けに行くかと云ふ問題に逢着して無爲に散會した。併し猫が餘りに子供だと相談は蒸し返される處がある。此處でも時局問題の解決は矢張主觀の側に多くある樣である。目下の帝國の口號が東亞新秩序よりも寧ろ長期建設、高速度廣義軍擴であるべき事由は最早疑を容れないのである。（拙著、雄邦日本の東亞恢興、第四編歐洲の現勢、同第三編第六章、支那事變を繞る列强參照）

歐洲化されたる四大既成飽和主義團の君臨する世界が十九世紀の唯物的世界觀に立脚する物質偏重の國際的序列、例へば五、五、三、一・七五と云ふ比率を生み出したのは當然である。其處で猶太思想を背景とする政治的自由主義、經濟的個人主義即ち資本主義、唯物的階級鬪爭主義等が傳統的道德的權威を失墜せしめ、社會を解體に導かむとし、此の動向に合する如く國家間の序列を設定したのは當然である。獨、伊の全體主義の奇蹟的革命は以上の十九世紀の物質至上主義の價値判斷に對する精神的革命として生れ出でたもので、國家間の國際的序列は此

の健全なる精神的價値の順位に從つて決定せらるることを要請する。精神的不平等が反て經濟的平等を合理化すると云ふ樣な世界新秩序に含まれた深い哲理は到底唯物論に固まつた淺薄な歐米先進國に理解される筈がない。旁〻天、地、人三才を互助連環の關係に置きて世界の全物質を全人類の精神的物質的向上に役立たせることは有機的平和的手段では實現されず、反て世界舊秩序下の相剋革命に依り達成せられむとして居るのである。日本が支那に依りて理解せられざりしは政治的奇蹟を演成して來た國民戰線が人民戰線に依りて理解せられざるに等しい。國際間に在りては精神は理解せらるべきものにあらずして宣示（アンヂーゼ）せらるべきものである。

玆に於て吾人は前述の如く對立する組織されたる現狀維持派陣營と打破派陣營とを見る。前者は第三國際と民主主義戰線との合作である。其の强點は太平洋の三分の二、印度洋太西洋を支配し、領土資源に惠まれ、廣義國防特に海軍力に强點を有し、包圍政策を布き、外戰作戰を組織し得る點にある。其の弱點は其の構成要素たる四大飽和既成帝國主義國が相當生活軌道を異にし、二十世紀の大病人小病人を含み、守成的にして攻擊精神に乏しく、徵兵制度を布き難く、唯物主義に墮し、資本主義と共產主義との矛盾を藏する點にある。後者は防共陣營にして、吾人は之を大陸國際雄邦主義と呼び得ると思ふ。其の强點は陸軍力、潛水艦、空軍力に於

て優り、進攻的精神に富み、內戰作戰の利を夫々發揮し得るのみならず、多少之を强化してソ聯に對する包圍政策を組織し得る點にある。併し其の弱點は領土資源に惠まれず、貿易上多く現狀維持派に依存し、經濟上相救ふに不便であり、海上西太平洋と東地中海と北海「バルチック」海の一少部分とを制壓し得るに過ぎずして、印度洋、大西洋に依り殆んど隔絕せられて居り、陸上も亦現狀維持陣營に依りて遠く隔てられ、一方伯林羅馬、他方東京の間には歐亞と云ふ一大陸塊が橫はり、其の間に數十の國家、數百の民族が蠢動してゐて、然も夫等の民族が殆んど全部現狀維持派の陣營に隷屬し、手掛りが無い爲めに望ましい否必要な相互援助を組織化するに頗る困難なる點に在る。防共協定を軍事的に强化する意味に於て日伊海軍協定又は日獨伊陸海空軍協定等を想定することは出來るが、軍事協力を組織化することは技術上六ケ敷い問題を多々、含んでゐるのである。

帝國輿論の一部に經濟上其の他の理由に依り民主主義戰線に對して明確に敵對的地位に立つを欲せず、尠くも英、米とは今迄の樣な關係を持續し、他面獨、伊とは芽生へた慇懃の關係を持續し、民主主義戰線と國民主義戰線との兩者に對して不即不離、正しく其の中間を步む事に依りて利益を收め、中位の成果を獲得し、時局の收拾に資したいとの念願がある事も看取される。併し之は國際政治の動向が許さない。獨伊に近づき之と協力せない事は我が孤立の脫却に役立つ何等の手を打たない事になる。日、獨、伊防共警察協定が唯夫丈けのものだと極印を押さるれば夫は廢紙に等しきものとなる。其の瞬間に克明に東亞新秩序に反對する英米等の力は一層擡頭する。既に英米間には軍事同盟がないのに、海軍演習に於ける英米の合作があり、「シンガポール」を米海軍に使用さす等の說があり、技術家の合作に依る極東に於ける英米海軍協力案があり、對日本長距離封鎖實施に關する秘密了解等があると噂されるではないか。對英、米追隨が惡いならば對獨、伊追隨も惡いではないかなどと日、獨、伊同盟論を笑ふ者もあるが、自己に順なる力を求めて之を利用せない事は端的に自己に逆なる力に屈服する所以であつて、何もせず現狀維持で居ると云ふ事は對英米媚態を續け、東亞新秩序を撤去する事に歸するのである。斯るが故に日、獨、伊防共軍事協定は勿論、日、獨、伊全般軍事協定は問題として取上げられざるを得ない。勿論日本としては前者の方が後者の方よりも好ましい事は之を容認するけれども兎に角兩者共一應問題として愼重に取上げられざるを得ない。其の採擇さるゝ場合軍事協定には共同の利益や共通の國策を支持する爲めに軍事的に協力すると云ふ主義を宣明すれば足りて居る。之に技術的の軍機軍略に關する協定例へば兵數、分擔作戰區域、共同作戰

區域、同盟軍の編成、合作、指揮等に關する協定を附隨せしむるか否かは次の第二義的の措置である。世界大戰前の三國協商は軍事同盟ですらなかつたのである。大戰に入りて大陸上の英陸軍が佛軍最高指揮官の指揮に屬する樣になつたのは交戰十數箇月、苦い經驗を重ねた後の事であつたのである。世界大戰の際何の必要ありてか、日本海軍は地中海までも出動したが、將來の戰爭では約束しても地中海まで海軍を出し得ないかも知れぬ。兵は兇器だ。活殺自在に行かねばならぬ。さはれ日、獨、伊間に軍事協力を網の目の樣に組織化するの困難は前述の如く日本の兵力、固有の作戰範圍も大體明瞭であり、唯併行的協力が最も可能性があるのであるから、技術的協定は別個のものとし後廻はしとするが當然である。後廻はしとするも時局の進展、軍擴競爭の歸趨が追々に對症の良藥を敎へてくれるであらう。日英協定が出來たと思ふたら法幣問題で行き惱み、米國からは通商條約破棄の通告を受けると云ふ次第で東亞新秩序と云ふ日本永遠の運命を決する動向は朧氣の遠卷きの皇國包圍陣に對し之を無害とする爲め現狀打破國陣營の結成を要請して止まないのである。

第十一章　時局を見透す

昨年の秋迄は漢口の陷落、廣東の攻略以前でもあり、之等の出來事が起つた時には蔣政權も地方政權に顚落する次第であるから、何等かの急展開が見られるものと人々は思ひ込み、其の希望を「時局見透し」の代用品として生きて來た樣である。然るに蔣政權は頭の無くなつてもまだ生きてゐる蛇の樣に日本軍の占據した點と線と多少の平面とを除く全地域、加之上海、天津、厦門等の租界等に迄命脈を繫いで、裡外合作まで唱へて、蔣と云ふ求心力に結ばれて生きて居る。今迄の支那國內戰爭なら前哨戰の優劣で一週間位に勝負が決した。中國で始めて出來た民族戰爭にぶつかり、先方の註文通り、文字通り孤立下の長期消耗戰をやると云ふ不手際が演成されたのは群盲ありて一英雄なき日本の痛恨事であつた。

之以上大規模の戰爭は東洋にあり得無い。今や海南島、南昌陷り、今後に四川を含めた第二「コンミンテルン・ルート」方面の綏靖を期待し得るも、皇軍は主として匪賊討伐に向ふ樣になり、占據地域に蟠居せねばならぬ。氣迷狀態は始まつた。近衞內閣は斯くては果てじと思ふ

たと見へ、又日支大戰爭には目的があるべきで漸く之を發見したと見へ、昨年十一月三日、十二月二十二日に至りて聲明を發し、東亞新秩序建設を期すると云ふ時局處理方針を發表した。恐らく之は日、滿、支經濟「ブロック」から東亞聯合體制と云ふ觀念に迄高められた要請の外交的表現であるだらう。筆者は前章に於て此の外交的表現に具體的形態の妥當するものを賦與しようと試みた次第である。

然るに此の新秩序なる語は今日の目標として餘りにも星雲狀態を呈して居る。其處で議會に於て質問する者が現はれると、當局の答辯は大體漠然たる觀念を措定して置いて、夫から追々に發展するのを待つのだと云ふ。支那とは平等の立場に立ちて協力するのだ、積極的に協力するのだと云ふ。暗雲低迷狀態は濃くなるとも解消する筈は無いのである。

軍事が主として內攻して居る間に東亞新秩序の聲明や、北支、中支に於ける親日政權の經濟的地位强化工作やに呼應して「トラウトマン」時代に始まる初步的な外交交涉は漸く瀕繁となるに至つた。時局に依る英、米、佛等の損害は稍大きく、東亞新秩序の爲めに或は支那から追出しを喰ふのではないかと危惧されるので、彼等は例の九國條約を楯に取つて捩込んで來る。海南島を占領されては英、佛の外交協同動作は一段と濃化せざるを得ない。英、米、佛の間に

は尠くも外交上の一致聯絡がある。蔣介石の西南開發は外援なくしては行はれず、佛印や緬甸からする援助は制限されて居るが現に行はれ、英、米は對蔣援助借款を與へて自己の爲に戰ふ蔣の長期抵抗を可能ならしめ、數年後に於ける日本の疲弊に乘ぜんと虎視眈々たる有樣である。夫に日ソ關係は國境事變、漁業問題、北樺太鑛業權問題等で益ゝ緊張して來た。前者の解決で小康が得られたと思ふたら、又「ボイル」湖畔の上空と地上で大格鬪が演成された。世の中は机上で學徒が想像する樣に「イデオロギー」なぞで決して動いては居ない。もつと機微な緊切利益、死活問題で動いて居る。而て世人は共產主義戰線と資本主義國戰線とが結局對峙する樣になると考へたのであるが、そんなことは絕對に無い。寧ろ大に可能性あるのは宇宙法則の命ずる現狀打破國（全體主義戰線）とソ聯を含む現狀維持國（民主、人民戰線）との對立である。而て日本は現狀打破の過程に於て世界歐洲化を體現する英、米、佛、ソの四大旣成飽和帝國主義國を蔣政權と一括して向ふに廻す破目に陷つて居る。其處で筆者の考へた謀略は舊著極東外交論策第二編第七章「日露支關係と不可侵條約」に盛られた兇露を謀る案であつたのだが不可能に終つた。日本の巨腕に喰止める太平洋の海嘯及び亞細亞の狂瀾は最大限の規模を取るに至つた。此の國際形勢は日本の氣迷狀態を一層深酷ならしめて居る。

筆者は滿洲事變の際「私見に從へば理論上聯盟が可塑性を發揮して滿洲事變を丸呑にする可能性は、日本の聯盟脱退の可能性よりも寧ろ尠ない」と斷言して完全に成功した經驗があるので、自信力があり過ぎると笑はれるかも知れぬが、玆に萬人の課題である所の「時局の見透し」を試みに附けて見樣と思ふ。

奈翁の覆轍を踏まぬ程度に於ての片手切の戰勝で大體支那の樞要區は制したが、其の後に殘つたものは福建に於て海と接した海上交通路の最後のものをも切斷され、英佛國境と接し、ソ聯及共產軍と結ぶ支那の五分の四乃至は六分の五の大地域である。今は日本軍の前面に直接して蔣、英、佛(米)、ソ聯合軍が立つて居ると見て大過はない。今春議會に於ける陸相の聲明に依れば南昌陷落直前に於て黨軍は二百萬より九十萬と半減し、軍需品は一會戰を支ふるに辛ふじて足りる程度となり、抗戰主體は英、佛、米に依存して西南支那に、抗戰副體は赤色「ルート」に依存して西北支那に在り、些細に觀察すれば五原、寧夏に三萬、山西正面に十三萬、洛陽遵州に十萬、漢水河方面に十七萬、四川方面に五萬、長沙、南昌方面に三十萬、湖口、蕪湖、杭州正面に十一萬、南支方面に九萬の敵兵を算し、其の外北支に三十萬、中支に十五萬の匪團を算する。租界を攻略せざる限り潛行的抗日の行はるる占據區域內の要衝天津、上海一帶

の完全の明朗化は至難である。前記の五分の四と此の要衝とに舊秩序の政治的經濟的支配力が屈する色もなくて控えてゐる。此の抵抗力を前にして日本は疲弊しない樣に努力して來たが經濟の逼迫が聊かも無い譯ではない。陸相の議會に於ける答辯は我方より進んで日露戰爭は之を求めず、彼より進攻し來るなれば擊退の準備は完璧であると云ふ程度である。此の狀態を前にして力の失せた露西亞はある程度支那を助けることはするが戰爭に乘出すことは避けたい事情にあるので、日本が此の支那事變と蓋然性ある日ソ衝突とを時間的に引き離す方針は外交上の努力と相俟つて成功するものと思はれる。外蒙と滿洲國との間の空戰陸戰は頗る大規模ではあるが、向ふは經濟的に大切な自國領土を犯されたものと考へてやつてゐるらしいから右認識を覆すに足らない。

獨逸の致須國處分「メーメル」合併後の狀勢、伊太利の「アルバニア」併合後の夫が日本に有利であることは事實である。併し獨、伊も日本同樣先づ喰つたものを消化し自己を擴大强化して次に伸びて行くと云ふ二段の工作をやらねばならぬ惱みを持つて居る。卑見に依れば世界大戰に於ける獨逸の戰敗の原因は勝敗決定の瞬間に於ける東部國境への兵力轉送と云ふことよりも、現狀打破國として開戰の時期、攻擊の時期を自由に選み得る地位に在るのに、此の優位

を棄てて巴爾幹に突發した暗殺事件に引摺られて他動的他律的に戰爭に引込まれて行つたと云ふ點にあると考へる。獨逸ともあらうものが、「シュリーフェン」の軍略ありて政略なく、完全自主的な戰爭を仕組まずに「サラヂエヴオ」事件への交際で戰爭を始めて行くとは何事であるか。攻擊時期の選擇は寧ろ現狀維持國たる英國に握ぎられた。現狀維持國が先づ攻擊する場合は彼等がまだ過熟國でない證據で之を破ることは不可能である。獨逸の戰勝の機會は戰はざるに既に封ぜられたのだ。斯樣な缺陷を遠き過去に於て日本は屢〻最大限に示して居る。世界大戰と云ふ五ケ年に一度の機會を一寸も利用せない樣な國民に榮える資格があるものにや、誠に痛嘆に値ひする。以上の經驗があるので「ヒツトラー」の獨逸は眞の敵が英國であることを知つて居ても、先づ勝つて然る後戰爭を挑むと云ふ風に強い波蘭には多少遠慮し、獨ソ接近の味を見せ、愼重に徐々に進むものと思はれる。「ムツソリニ」にしても剛と斷丈けでは決してない。從て筆者は歐洲一般戰爭を今直ぐには期待せない者である。英米の高速度軍擴が獨伊の獨裁者をして機會は一九三九年だと考へさす處もあるが、彼等獨裁者も亦獲得した成果は之を守らむと欲するなるべく、矢張堅くなる方が傾向であらう。例へば英國は一九四二年に主力艦二十二隻、航空母艦十二隻、巡洋艦八十三隻、驅逐艦二百隻、潛水艦七十三隻となり、艦齡超

過艦を加ふれば二百萬噸に達する。米も其の頃には主力艦二十二隻、航空母艦八隻、巡洋艦四十六隻、驅逐艦百四十六隻、潛水艦五十五隻、艦齡超過艦を加へて總噸數二百三十五萬噸となる。露は米國に縋りて佛伊に追付かむと焦慮して居る。獨伊は英國が二百萬噸に達する頃夫々三十六萬噸、六十六萬噸で、量的には合はせて英國の半額に過ぎない。獨伊が無敵空軍を誇ると雖も輕々に動けぬことも明瞭であらう。從て「ダンチヒ」に絡まるそれこそ一觸即發の歐洲情勢のみが日本の苦痛を輕減してくれると思ふたら當事は違ふだらう。併し英佛が極東に自由手腕を振へない重壓を受けて居ることは事實である。此の意味で極東の勢力均衡は充分取れて居ると見てよい。

此の狀勢下に於ても日本が生產力や軍備の高速度擴充を充分にやらず、一切進攻的態勢を取らず、怯懦であると世界政策の道連として同盟問題まで取上げた獨伊に賴み甲斐なしと見られ、英米から輕視さるる虞がなきにしもあらずである。筆者は嘗て波蘭國防の重點が露國に向ひ、次點が獨逸に向ひ、獨逸系波蘭が波蘭に取り餘りにも軍事上產業上重要である爲め、波蘭が獨逸と取引して、兩者相携へて東進し、波蘭は黑海に、獨逸は「バルチツク」海に向ふが如き解決の至難なるを說き、此の困難を克服する爲めには第三の要素即ち日本の介入を必要とすること

とを注意して置いたが、我國の發せざる間に獨波關係は斷絶し、英波、佛波同盟は昂揚し、ソ獨は接近し、對ソ壓力の減少するを見た。世界政策を行ふ意圖なしに東亞新秩序を云ふは片手落ちであらう。（舊著、雄邦日本の東亞恢興、二八四頁、三一七頁）獨伊との積極的協力を差控へ、英米の鼻息を窺ふに專らなるに於ては一層然りである。

天津、上海、香港、厦門、廣東等の英佛據點と英佛植民地とは夫れ自身最大限の消極的抵抗を示し、揚子江の開放を執拗に要求し、米國を引摺りつつ蔣政權の强化に努めて居る。此の勢力は進攻性は之を持たないが、新秩序は之を抹殺せむと努力するに違ひない。必要が此の勢力の抹殺を强制するやも知れぬ。昨年二回の近衞聲明は相剋を避けたさに九國條約に一目置き、此の英佛の權益を尊重しようと云ふのであるから、此の方面が向ふから明朗化して來ることは期待出來ない。舊秩序の支配力は寧ろ依然として大部分殘るものと思はねばならぬ。

新秩序の掛け聲の裏に潜む辛き現實を全部忘れるのはよくない。四大飽和帝國主義國が世界の四分の三を占め、世界資源の八割五分迄を壟斷するものとすれば、日本の貿易が此の四分の三、乃至八割五分に多く依存することも明瞭である。多分日本貿易特に軍需品、生產力擴充材料、平和輸出工業原料等は獨伊等よりもはいるが、過半は人民戰線國からはいるであらう。敵

方に靡いて居り、敵に廻はる虞ある國に多少でも經濟上依存してゐると云ふことが現狀打破國の惱みである。寧ろ此の惱み、此の矛盾から現狀打破國と云ふ猛獸が生れて來たと見るが正しい。先方が貿易の門戸を閉鎖せぬにしても貯藏金は少なし、產金の增すには程度もあり、貿易は最高限の時よりも相當減少し、受取勘定であつた「見えぬ貿易」からの手取金も激減を免かれないし、信用はないし、外國投資も多額ではなく、其の動員に不便がある。新秩序から云へば尊重したくない所謂第三國の權益と云ふものを我が當局が尊重したくなつたと假定して之を極度に非難するわけには行かない。東亞新秩序の陣痛は長くて嬰兒は中位の大きさかも知れない。然しこの程度の難關はさした問題ではない。

日本が從て今後積極性を示し、進攻して行く相手は依然として蔣政權だ。平沼首相の近日の演說にも蔣政權の潰滅と云ふ言葉が見えた。實際皇軍が四川を略し蔣を貴州、雲南に封殺するが望ましい。併し我方の軍事が消極的である場合には厚和、蒲州、開封、漢口、南昌、上海に圍まれた地域內の治安强化と自重的進出とに限られると思はれるから、蔣政權の潰滅は自潰作用が手傳へば兎も角然らざる限り最短の期間內に之を期待することが出來ないであらう。何處迄も追ひ詰めての潰滅だとすれば尙二、三年は掛り五百萬の大軍も尙足らざるを覺えるではあ

るまいか。斯て東亞新秩序の正面の頑敵は殘存する。宋や明が滅ぶるに十年二十年掛つて居ることは想起すべきである。此の外日本は海南島、廣東を維持して蔣政權の蘇生を喰止めるに資するであらう。近衞聲明に從へば政府は遠き將來に於て、全く順境に立つに至れば、漢口、南京、上海、廣東からは遠き將來には兵を撤する意思と思はれるから、軍事が此の方面で徹底して積極的であり、永久的に腰が据はるものとは思はれない。經濟開發も中支では振興と云ふ程度で、我方の割込を策するものかとも推せられ、北支の潜在資源を利用したいと云ふのとは多少の相違がある。結局日本の目下の企畫は其の全部が實現しても以上の如きものであり、其の八九割が實現するものとすれば結局昨秋發見された新秩序は舊秩序と併立して判然と頭を出す位で、蘆溝橋事變の起る以前に於て北支獨立政權を考へ、北支五省の緩衝地帶化を考へて居た其の當時の案に漢口、南昌、上海、廣東、海南島等の弱き結合地帶を加へたものが今度こそは十全に實現する次第である。此の案は蒙疆の特殊化、北支駐兵の意圖、北支富源開發の意圖から考へて決して拋棄されたり縮少されたりする筈はあり得ない。故に今次事變が齎らす成果は滿洲事變の延長として四、五年前勢に乘じて比較的容易に實現し得たことを實現するに加ふる所が極度に多くはあるまい。是が五萬年に一度の機會を少しも利用せず今何處へやら消し飛んだ「チェツコ」軍とやらを救援して、徹底占據した東部西伯利亞から地理の研究位ゐやつて撤退した過去の日本爲政家の驚嘆すべき政治能力の成果であるのである。東部西伯利亞を壓へ、滿洲國を建て、北支に睨みをきかせたら今度の事變は起らず、西歐勢力は支那自らが退けてくれるのだ。此のだらし無かりし人力を竭し切らざりし國民に神風ばかりが吹いて望ましい仕事をしてくれると期待するのは不可であらう。

斯く觀じ來るときは外國の論調が示す如く支那人の目には、將又世界の客觀には日本の西歐帝國主義的進攻が支那の北支には十全に、中南支には五、六割行渡つたことが今度の事變の成果である如く映ずるであらう。而して亞細亞には全面的に世界舊秩序と其の延長たる東亞舊秩序とが依然として濃厚に君臨し、芽生へた東亞新秩序は右舊秩序の雲霧を開いて滿洲及び北支に判然と聳立し、中南支には舊秩序と新秩序と並列して入會地をなし、新秩序の滿潮には夫れは漲溢して舊秩序を壓倒し、夫自身を大東亞に光被せしめむとし、其の干潮には舊秩序の下敷となつて溺沒せんとし、曳いて北支にさへ暗影を投ぜんとし、其の平潮には兩秩序は互に堅持して讓らず、上海を擴大した樣な東亞無政府狀態が中南支を支配するであらう。然るときは舊秩序下の在來の相剋は中、南支に於ては或は一層激化せられ、白人の優越は全く失はれ終るこ

となく、北支に於ても此の相剋の殘存幽靈が出沒せないとは必し得ない。此の殘存する東亞無秩序、東亞無政府狀態の下に於て、大和民族は、今度の事變で頗る擴大された活動舞臺の上に於て、北支開發會社、其の八大子會社、中支振興會社等を通じて、國軍が蔣政權潰滅を續ける銃後に於て、物心總動員で各般の支障と戰ひつつ生產力の擴充、國防力の强化に驀進することとなるであらう。併も氣ばかりはやつても其の應戰建設併進の成果は目下の處では或は相對的であらう。斯くては東亞に於て同胞中の悲觀論者は大鵬が圖南の鵬翼を振ふのを見ずして、子鷲(グロン)が中學校位に入學するのを發見するであらう。勿論「ロスタン」の悲劇子鷲の樣に其に其の羽翼が伸び、羽搏きしかけて而して永久に疊まるが如きことなき樣に祈念して止まない。

觀じ來れば現實問題として東亞協同體と云ふが如き足の地に着かない突嗟の考案は今の處問題にはならぬ。世界大維新、世界新秩序と呼ばれた科學的の大言壯語も一部分高閣に束ねられねばならないであらう。次に東亞新秩序、日滿支互助連環關係、東亞聯合、東洋的自律秩序、乾坤第一邦の世界政策、大陸太洋大空體制の實現、反共世界觀の勝利、新中國の建設、新民主義の凱歌と云ふ眞正國際正義にも合するし科學的でもある要望も全部的には我等の頭に具體化された丈けで、猶其の上に蔽ひ被さつて居る錆びた鐵板を押し退けて登場すべく忍んで悔ひざ

る不退轉の努力を對價として要求するであらう。東亞に於ける白人優越拋棄論を既に聞くに至りたりとは云へ、芳香を放つ梅花の嚴冬に於ける合言葉が霜辛雪苦である樣に、長期漫性消耗戰下の帝國の合言葉は未だ新秩序全貌の高翔の夫ではなくして、寧ろ地味な長期建設であるのではあるまいか。而て此の際待望を許さるるものは歐洲の大變亂よりも、遠く約束された樣なソ聯の崩壞よりも、蔣政權の分裂潰滅の方ではあるまいか。

時局の主人即ち "master of the situation" と云ふ者が無く、時局に引摺られて來て居る時、昨秋から今春へ掛けて朝野の一部に憂色の漂ひ、以上述べ來つた所の如く時局の前途に充分自信が持てない樣子であつたことは誠に餘儀ない次第であつた。併し今夏事變滿二周年紀念日を迎ふる頃になりては聊か自信が增し、時局はどうやら成功裡に局を結ぶだらうと云ふ考へが盛り上つて來た樣である。蔣政權に反擊の力などある筈はなく、第三國又は第三國群の武力干涉無くば吾人は成功する以外に行き所はないのだ。問題は我が限りある力に鑑み成功が一部的か全部的か、七割か十割かと云ふ點に繫つて居る丈けだ。此の樂觀に拍車したものは最近の有田「クレーギー」會談の圓滿妥結であらねばならぬ。天津英租界隔絕問題を契機として、天津問題の背景をなす一般問題に關し、日英間に諒解事項の覺書が交換されたことは前述の通りであ

る。本覺書は英國極東政策の方向轉換と云はむよりは寧ろ英國が印度洋に沿ふ茫大の領土まで賭けて極東に於て乾坤一擲の豫防戰爭に出づる意思なく、好まないが現實の事態に則應して平和的變更を受諾する、そして其の結果東亞領導權を日本に讓ると云ふ用意を示した點に於て重要意義がある。併し英國側は新秩序を認めて其の建設に積極的に協力するとは云はず、唯現實の事態丈けを認め害我利敵行爲をやらないと云ふて居る丈けである。從つて英大使が右覺書の原則は北支丈けではなく、日本軍占領地域には上海、鼓浪嶼にも漏れなく適用すると云ふに拘はらず、上海には彼の云ふ所に依ると摩擦もなく、又兩租界共に共同租界であるから英國が善意を以て任意的に適用する程度に於てのみ右覺書は効力を發揮するので日米通商條約破棄もあり今後千變萬化するであらう。唯我が勝利の第一歩が確定的である事丈けは動かない。

今度の戰爭の特異點は夫が日本と蔣政權との間に戰はれて居るに拘はらず、戰爭の眞性格が東亞領導權の爭奪戰たるにある。犯人引渡拒絶問題から始まつて天津英佛租界の封鎖隔絶檢問檢索となり、始めて右爭奪戰の對手方が表面に現はれた。此の覆面の眞の敵英國は隱れてゐた敵性を赤裸々に示すと同時に之を一應淸算した次第である。由來帝國政府は領土的野心なく、外國の權益は尊重すると揚言して來たのであるから、日英諒解事項の成立に際し之を繰返し、

租界の現狀維持など約さなかつたと斷言する事は困難である。併し此の半世紀間極東で爭はれたものは人の氣が附かない東亞領導權であり、其の如何なるものなりしかは華盛頓會議の成績を見れば明瞭であり、吾人が追隨外交を排擊するのは、右の既成領導權を排擊するの謂ひである。所詮世界及び東亞の國際政治は必ずや誰人かが之を左右するに決つて居るから今度こそは日本が全世界に向つて東亞の領導權、親權、師導權を握つた事を高らかに聲明するがよい。此の師導權に服し、全支に光被する新秩序と兩立する限りに於て歐米の既得權益は之を認めてやると云ふ事を附け加へて聲明するがよい。事變の本質は日本を玆まで押し進めて居る。此處まで來れば近衛聲明よりも進んだ大東亞新秩序の黎明となるのであつて、聖戰の十割の成功は玆まで來なければ嘘である。吾人は始めから夫を待望してゐる。

新支那の統一中央政權は新しき表皮が古き表皮に代はる如き方式で生れるがよいとて、近衛聲明に呼應して起つた汪兆銘の和平救國運動に囑望する者が多いのは當然である。支那紙は今秋には汪氏を大總統に、吳佩孚を軍事委員長に、梁鴻志を參議院長にする樣な「コンビネーション」で、南京邊に新中央政權の樹立を豫斷して居る。此の運動は日英協定と共に今事變始末の一里塚になるもので、吾人は斯る政府の登場を歡迎する。唯其の蔣政權の餘喘と內戰をやる

軍事力に到つては格別の底力は無く、依然日本が近づきつゝある蔣政權の潰滅、治安維持の第一線に當らねばなるまい。其處で吾人は、胎動中の新支那中央政權に胎教を與へたい一事を持つ。汪兆銘氏は日本の條件が善隣友好、共同防共、經濟提携の三者で何でもない樣に云ふて居るが、事變の本質は日本が東亞師導權の爭奪戰に勝利を得た事を示し、日本は新中國に性格賦與、靈魂植付けをやつて居るので、之は精神的國家創造であるのである。識者の支那の內政に干涉せず、支那の事は支那人にやらせよと云ふ主張の意味には共鳴出來るが、夫は此の一大事を忘れない事の後にしてほしいと思ふ。

物質的秩序より精神的秩序の世界に入らむとする高遠なる理想の實現、最もあり難きものを存在に持ち來す努力は袋を搜して物を取出す樣に其の成功を必し得ないものがある。凡そ創造の惱みは斯の如きもので、蹉跌を全く除外し得ない。我國が一九一九年の獨逸の地位に陷ちたならば其の立上りはより困難と思はれる。故に成果を中道に止めて、危險率を最小にする中道は發見されるだらう。敵方に廻る者を或は最小限にし、或は遲くし、中立に止まる者を多くし敵方の力を殺ぎ、其の分裂を促進し、味方の强點を長じ、弱點を匡救する謀略は大目的を見失はない限り皆な寬容さるべきであつて、國民は短見焦燥ではなく、時には當局に欺かるることも愛國心の必要部分であると心得ねばなるまい。斯て綜合戰果は大きくなる。されど浮世は所詮綱渡りたるを廢するわけには行かぬ。

今次の大事變以來、吾人は十年戰爭、三十年戰爭、百年戰爭等の言葉を聞いたが、之等の言葉は當らずと雖も遠からずで、吾人は世界歷史に類例なき二百年戰爭、三百年戰爭すら絕無を必すべからずと考へるものである。蓋し、東亞、歐洲、及び中間の歐亞並に阿弗利加に國際無政府狀態の全面的曝露を露呈し、其の廣大さ、其の深遠さに於て到底過去の無政府狀態に比すべきものなきが故である。其の出發點に立ちて今や非常時局は政治、軍事の財政、經濟、外交に對する絕對優位を確立した。此の體制下に於ては勢の赴く所廣義國防强化總力戰體制の確立こそは國家生活の全部であり、此の線に沿ふて人、物（マテリアルス）、金（マニー）の配列が要請せらるる。長期建設の文字には以上の理由で吾人は最重要の意義を發見するのであるが、當局も世人も充分に之を明瞭にして居らない。陸相の一月二十二日の聲明には「之が爲には今後に於ける軍備の充實、生產力の擴充、其の他の施設等に萬全を期せねばならぬと存ずる次第であります」と述べてある丈けである。想ふに長期建設の主眼は日滿及び北支の廣義國防的一體化であつて、日本國內に於ては總動員法の發動、統制經濟の强化、軍需產業五ヶ年計畫の遂行と成つて現はれ、滿

洲に於ては夙に産業開發五ヶ年計畫と成りて現はれ、最近人民總必任義務服役制即ち兵役、公役補償税制度の採用と成りて現はれ、之と併行して日滿共同防衛の趣旨に基き平戰兩時に於ける共同防衛に關聯する日滿各機關諸施設策を同盟國防衛司令官のもとに實質上一元的に統制調整を圖る必要から防衛委員會を設置するに至つた。新中國に於ては防共地區設定、防共駐兵、北支開發、中支振興諸會社となりて現はれたることは前述の通りで、資本財貨、人的要素の缺乏と勇敢に戰ひつつも歩一歩前進を始めて居るのである。目下の形勢では悲觀論は敗戰主義である。唯科學的建設的なる樂觀論のみが許される。日本が完全に主人公となり切らぬ「時局の見透し」と云ふ客觀を求めての巡禮が吾人の主觀に再歸して來るのを禁じ得ない。爲さゞるに焉ぞ成ることあらむや。長期建設を手段とする吾人の危局克服の意慾の内にのみ時局の見透しは其の影を投ずるのである。而て成功の最少限度の要件は長期消耗戰を戰ひ抜きつつ、國力を恢復もし、向上もして行くことである。繰返して云へば大體の見透しとして今回の戰果は或は一應七割で止まり、小東亞新秩序の成立が戰果の總決算であるかも知れぬ。併し世界的大運動が始められてゐる以上事態は玆に膠着する事を許されず、霜辛雪苦の長期建設に依り、東亞大陸太洋大空體制が完成したる後に於て、始めて十割の成功即ち大東亞新秩序が脚光を浴びて

登場し、今次聖戰の眞意義を始めて會得した東方諸民族から歡呼して迎へらるゝと云ふ段取りになるであらう。今事變で内輪戰が片附き外輪戰の基礎工事が成るであらう。

如上の繼續的に精魂を傾け盡す最大努力の内的反動は國民黨政權潰滅の爲めにする生産力の擴充及國防の飛躍的强化と隨伴する國内的改造即ち昭和維新であらう。世界舊秩序に繫戀する内的舊秩序を擁して東亞新秩序を追求するの矛盾は克服されねばなるまい。獨逸が外交上經濟上の孤立を賭して「ユダヤ」人の排斥を斷行して居るのは範とするに足りる。其の事は次章に於て詳論する。

第十二章　身命の國有化

(一)

全體主義とか、全體國家とか云ふ言葉は獨逸から流行して來た言葉ではあるが、吾人は之を利用するに際し、特に新奇の感を抱かない。蓋し夫は民族國家を構成する悉皆の個我の連帶性、即ち民族連帶を事新しげに認めたに過ぎないからである。想ふに民族連帶と云ふ古い言葉の方が、一層階級的對立を打消し、國家の一體たる所以を端的に發揚するに適當な言葉であるのである。此の民族連帶と云ふ觀念の支配力の最大の證據は、既に大多數の國に布かれて居る徴兵制度に顯はれて居る。

此の制度は蓋然的に身命の國有化を制度として採用したものである。事變や戰爭が口惜しくも　大元帥陛下の股肱の多くを失はしめて、身命の國有化が現實の事實となつたとき、其の英靈を靖國神社に合祀遊ばされることは斯くの如き莊嚴な事實の國家的認識に基いて居ると拜察

し奉るのである。事實上戰爭の爲に或は四肢を失ひ、或は不具癈疾となりたる軍人に就ても之に準じて論じ得るのである。

吾人が既に個人主義、自由主義の吹き荒ぶ世に在つて、敎外別傳不立文字の敎義に叛き、日本中道全體國家主義を提唱し、奢侈的消費の朝宗を主張して來たのは、實に如上の事實を認識した上の最少限度の要求に過ぎなかつたのである（拙著、雄邦日本の東亜恢興、第五編第七章參照）。蓋然的に身命が國有化され、夫が愈々現實となつた場合に、物の方面に於ける當然な、併しながら比較的には餘りにも輕微な犧牲たる奢侈的消費の國有化が行はれるのは必至の勢である。既に余輩の曩日の豫言は、其の儘實行に移されて居るのである。

吾人は從來國際平和軍縮運動が現狀維持國の國策の道具であることを看取し、此の國際情勢に乘つた國內的軍縮を最大の曲事と考へたものであるが、夫は決して身命の犧牲を欲したからではなく、反て夫を絕無又は最少限度に留まらしめむと欲した結果であつた。國際無政府狀態を認識すればする程、而して徴兵制度が生命の國有化であることを知れば知る程、吾人は此の身命の消費に無限大の愼重さを拂はねばならぬ。國軍は完全に精鋭にして、之が將師たる者は百戰百勝は善の善なるものでないこと、先づ敵に勝つて然る後戰を挑むべきこと、敵の謀計を

代つべきことを知らねばならぬ。外交は聰明達識にして、一世の智勇を推倒し去らねばならぬ、軍備は廣義國防と調和する範圍内に於て、精鋭無比の科學的兵器を充分に供給されねばならぬ。之が舊拙著國際軍備縮少問題、極東外交論策に於ける筆者の態度であつた。

以上の事實を認識すれば世界大戰中、日本が微笑せる中立國として資金の流入に苦しみ、成金風が滔々として一世を風靡し、國の倉廩が滿ちて居つた時代に於て、併も戰爭目的遂行の爲め、列强が最大限の軍擴を遂げて居つた時代に於て、治に居て亂を忘れざるの國防近代化の對策を講ぜず、人心を引緊むるの財政政策を採らず、日本の宿命が指さす外交政策、大陸國策を採らなかつたことが如何に國家に禍を爲したか、今日に至つては最高の低能者と雖も覺知せずには居られまい。我等の文章報國は今迄右の覺知を克ち得むが爲にのみ爲されて來たのである。

民族連帶(ナシヨナルソリダリチー)の立場に立つてのみ、換言すれば全體主義の立場に立つてのみ、吾人は身命の國有化を了解し得る。此の國有化が實行され、個我の生命が全體に歸一し解消して靖國神社に合祀せられて後に、全體は此の個我の英靈に對して、將又其の遺愛に對して國家は最早用はないと云ひ得るか。絶對に否である。

我等は英國や、其の植民地に行はるる失業保險の樣な國民一般の國家依存の制度が國家の活力を竭盡するものでないかどうか、深き疑を抱くものであるが、身命を國有化された英靈の遺愛は勿論傷兵の國家依存は全く當然だと考へる。全體は之等の淋しき人々を其の胸に抱へて、扶養の義務を盡さねばならぬ。之は民族連帶の最少限度の神聖な要求で、傷兵保護院、厚生省ある所以である。

(二)

滿洲事變が勃發以來、我國に於て昭和維新、制度革新、庶政一新等の聲は頗る高く、五・一五事件、二・二六事件等は之に拍車を掛けた觀があつた。帝國議會、特に餘りにも老衰して居る貴族院に關する改革要望は、貴族院の內部からさへも發せられた程であつた。

然るに滿洲事變の明白なる延長として、今回の日支事變が宿命的に惹起され、超人的努力を必要とし、其の重壓に堪ゆる爲には愈々全國內一切細胞の戰慄的憤起を促さねばならぬ時期に臨んで居るに拘はらず、此の緊急を要する革新事業、將又國家若返りの工作が、全然錆びたる「ブレーキ」の下に停頓して居ると云ふことは誠に遺憾千萬である。此の際國民に身命の國有

化が行はれて居ると云ふことを高調することは、醜惡なる現狀維持的勢力の抵抗を破碎する推進力となるものではあるまいか。身命の國有化を前にして、國民は官公職等の私有化を、一時たりとも容認するであらうか。

筆者は玆に一つの體驗上の挿話を紹介して、官僚社會の一部が稍もすれば陷り易い弊害を剔抉して見たいと思ふ。勿論生存中の關係者が多いから姓名は全部預かりにして置くことが紳士道だと考へる。瑞西の壽府で、第二回の國際聯盟總會の開會されむとする際、當時同市で發行されて居た Revue de Geneve と云ふ眞面目で高尙な雜誌社の編輯長が筆者の所へ來て、是非太平洋關係に就て、日本の立場を宣明する一文を草して寄稿して貰ひたいと依賴された。

勿論外交官が斯樣な依賴に應ずる例はあるにはあるが尠ない。彼等は多く能無しであるし度胸も無い、然るに生憎筆者は年少氣鋭でもあつたし、「支那の外交及財政」を出版した直後であつたこととて自信を以て直ちに一つの長編を起草した。當時佛語は初步をやつて居たから英文で起案した。之は當時委任統治委員會に於ける日本代表として壽府に滯在中であつた岡實博士に見て貰つた所、同博士は一讀して非常に結構な出來榮だと激勵して呉れた。之れが編輯局に依て佛文に飜譯されると一層見榮えがした。勿論太平洋問題と云ふのは意氣地のない日本

が、支那特に滿洲問題を太平洋關係の中に捲込まれて飜弄されて居た當時の表現であつて、該問題の眞實の內容は、滿洲問題の事である。

筆者は二十年一日の如く、主張して止まない日本の大陸政策を堅持し、其の日本が支拂ひたる犧牲が如何に大なるものであるか、國際環境は到底日本に退却を許さない儘に挺子でも動かない決意であるし、又日本は此の主觀的正義を守る用意があることを力說して置いた。

校正刷の進行中に筆者は遇然此の話を上司の一人にした。そうすると問題が大きくなつて、相談會でもあつた樣子であつたが、程經て右樣のことは罷めて貰ひたい、强いてやるなら退官してからやるがよいと云ふキツイ達しであつた。筆者には一向得心はいかないがそんなに不都合のことなら罷めに仕樣と思つて、氣の毒に思ひながら編輯長に話すと、彼は御迷惑ならば罷めませうと快諾してくれた。

偖て夫から滿十年を經て、余が舊著「國際軍備縮少問題」で豫見した如く過たず、滿洲事變は勃發した。此の時我方の聯盟總會や理事會に於ける代表者が、如何なる働き振りを見せたかは、凡そ天下の知る人ぞ知るである。愈々やり切れなくなつて天下の豪傑野武士の松岡洋右氏が出掛けて行つて、日本人として正に言ばなければならない言分は十二分に云つて退けた次第

であつた。然し大勢は奈何ともすることが出來ず、聯盟から脱退して引揚げた、我國の自由主義者が何と言はうとさつさと脱退した方が、日本の内部から溢れ出づる國策の遂行には有利であつた。顧つて思ふに歴史の證明する所、我國の居列ぶ大官小官が聯盟で活動し國費をも尠からず費消して國運に何を貢献し得たか。夫は云ふ迄もない、全然零である。

若しも第二回聯盟總會の時、筆者の起草した長編にして「ルヴュー・ド・ジュネーヴ」に掲載されてありしならむには、滿洲事變後日本全權の云はねばならなかつた言分は、其の十年前に全部完全に言はれてあつたのである。今思ひ出す儘に官僚生活の想出を語つて心ある爲政家の考慮に委することとする。

我々が官僚群一般（全部でない、稀には偉才もある）に就て認識せなければならないことは次の事實である。基督を殺したのも羅馬の官吏であつたし、之を迎へて國教の偶像となし、「セント・ピーター」以下の大寺院を建てたのも、時こそ違へ、等しく官吏であつた。佐倉の義民を刑戮したのも役人であつたし、之が爲に神社を建立したのも矢張役人であつた。役人は大體は先覺者でなくて、先覺者をば殉教せしめ、其の反對に時勢の波に乘じ之に迎合して立身すべく、賢く立働く衆愚中の選手である。此の事實は過去七、八年間のことを回想しても思ひ半ば

に過ぐるものがある。朝日新聞社の畏友關口泰君が「流されて行く爲には表面に浮んで居た方がよく、根など土臺持つて居ない方が都合よいのである」と述べて居るのは官僚心理を穿つたものかも知れぬ。

（三）

偖て全體國家が不斷に其の生命力を培かはれ、進展して行く爲には、國家活動の第一線に國家の宿命を把握し、獨逸に於ける「ヒツトラー」の如くに一身に國家の發展的生命を體現した者が浮き上つて行くことが頗る望ましい。然るに現に獨逸に於てすら既成政黨や官僚は百方「ヒツトラー」の進出を阻むのであつた。所が我國の如く身分保障令で過度に化石化した官僚社會に於ては、右樣の弊害は一層甚しいと覺悟せなければならぬ。各省と云ふ金魚鉢の樣な繩張り内での生存競爭であるから、官僚の心掛けや努力と云ふものは、國家發展の要求とは似ても附かない反對の方向へ進み得る。同時に省と省との間の、謂はば省際事項と云つた樣な事項は、國家の最重要の國務でも全く閑却されて行く。其の犧牲に爲つたものの著例は、即ち滿洲問題であつたのである。

從て、此の缺陷を補ふ爲に眞先に考慮されなくてはならないものは、國務院の制度である。蓋し帝國の內閣制度は因襲の久敷き餘りに官僚化し分裂して無政府狀態に陷り、國家の眞生命から遊離して來て居るからである。現在五省會議なるものがあつて、各省大臣の立場を離れて眞の國務大臣の會議の代理を努めて居るのは結構であるが、尙ほ中途半端と云はなければならない。內閣制度の根本的淸算と、國務院の設定とを合はせて、此の「コーヂアン・ノット」は解かれねばならぬ。

全體主義國家の政治力たる一黨獨裁に鑑み、日本に於て國民再組織の問題が起り、夫が近衛內閣に依り取り上げられたのは決して遇然でない。併し民族性、傳統、環境、時期、指導者の問題もあり、簡單には行かない。吾人は時局の困離が加はり來るに連れて我國に於ては軍事强力內閣が妥當するのではないかと思ふ。現に世界大戰中主要なる立憲國は此の形式で民族我の乘込んだ船を漕いで來たのである。派手なことを考へなければ國民再組織は食用獸たる豚の體形を猛獸の夫に改めることで英雄政治でなくとも有能內閣ならば出來ることである。

各省は筆者の見る所では、根本的に改廢し得る餘地がある。國家の新生命を考ふる時、既に建設創設の時代を去り、政治問題の對象ではなくなり、唯善良なる行政、能率の揚る技術さへ

奉仕さるれば夫で足りる國務がある。夫は鐵道、遞信、拓務、農林等である。之等の事務は之を本屬長官の下に於ける外局の長官をして統べしむれば、既に充分である。文部、司法等に就ても同樣に論ずることが出來る。大藏、商工兩省は經濟省として一括し、之に農務長官を配すれば最も妙である。拓務、遞信、鐵道等は之を內務省に隷屬する外局として統一することが最も效果的である。此の見地から吾人は商工省を分裂して商務省を設けむとするが如きは、改惡であると考ふる者である。一方に於て斯の如き根本的行政改革を斷行してこそ、興亞院と云ふが如き、國家の新生命の籠つた國家活動に、充分の血液榮養を送ることが出來るのである。

尙細部の點に就き論ずれば、現在の外務省でも、陸軍省でも、商工省でも大藏省でも一方今迄の官制を其の儘に維持し、多數の局課と官吏とは今迄通り半醒半醉の狀態に置きながら、他方に於て長屋の如きものを增築しつつ、新規の事務に懸ずべく、臨時局課を增設增員して行つて居る。從つて此の新規の萠出づる國家活動の方面に於ては、常に手不足、經費不足の行政をやつて居る有樣である。而て斯樣に間に合はせの臨時の局課を增設する所以は、追て目下の如き事變が片附き、從つて關係各省の事務も舊に復員され、從前の局課で間に合ふ樣になるものと考へてからのことと想像される。所が之は卑見に依れば非常の認識不足である。凡そ國家の

生命も其の活動も流行を帶びないものはなく、生命力が一度或る志向する方向へ流れ去れば、決して再び原狀に戻つては來ない。新しい創造が行はるれば其の結果を基礎として、生命は又別途の創造を營まむと欲するのである。

斯るが故に國家機關も常に或る程度まで流形を帶びて居り、生命力の發展に自由自在に隨順せなければならない。之が國家生活の大原則である。興亞院を臨時の機關だなぞと考へ、善い加減の胡魔化しをやつてゐる者は、大陸政策を拋棄するの意圖を以て事に當るに等しく、絶對に許すべからざる曲事である。現在どの省にもある樣な情報部なども、國家全體主義に應ずる樣整理したらよいではないか。

企畫院と云ふものは、非常なる時代性を以て生れて來たものであつて、其處から豐なる生命が流露すべく期待されたのであるが、遺憾ながら破天荒の事もなくて無爲に終始して居る。其の根本理由は、何人が同院を玄關から覗いて見ても把握出來る樣に、同院は各省の事務官級の者の寄合世帶である。現在の分裂された省際無政府狀態の曝露であるかも知れぬ。斯る際には、其の將帥にあらゆる見地から創造力の豐富な人が當つて居らなければ到底所期の成果は收められない。それから日本にも政治と行政の監察院を置く事が緊要だ。

筆者は今試しに、二三の提案を示唆して見よう。日本の刑務所を全部大陸に移して見たらどうか。大陸に行く者は男女を問はず其の汽車汽船賃を無料にし、歸りは其の倍額とし、大陸に民族大移動をやる體制を敷いて見てはどうか。而して大陸に居る者は誰でも大陸政策確立の爲めにする國家總動員に參加させたらどうであるか。

若し日本人口の集中せる大陸上の大都市に武庫を設けて一週一回位、訓練を施すならば、今回青島、漢口の日本人區域が燒かれ、通州居留民が慘殺された樣なことは將來は絶對に起らない。唯平凡な一事を徹底的にやる丈けでも大陸政策は確立するのである。

筆者は前述の「雄邦日本の東亞恢興」なる一書を世に贈つたが、軈て雄邦の二字が乾坤第一邦の五字を以て置換へられ、東亞實は小東亞が大東亞を以て置換へられむとするは帝國の宿命である。其の爲に我國は既に述べたるが如く是非とも東亞大陸及び西太平洋の上に、米國の南北兩米大陸に對して布けるが如き、大陸大洋體制を布かなければならないので、筆者は西太平洋の海上覇權を完全に掌握して、大洋體制を布き、大陸に百萬の大兵を擁して大陸體制を布くことを是非必要と考へるものである。

之が爲には最大限に軍擴し飽迄も猛進する必要があるのである。壯丁數の過少に關しては筆

者は人口政策上の必要に鑑み、定着の國境守備隊に六十歳以上の老兵隊を組織し、國恩に酬ゆる所あらしむべしと提唱するものである。此の國防計畫と相俟つて日滿支綜合經濟力擴充の爲め東亞計畫經濟を樹立し、各人の技術及能力を最大限に發展せしむると併行して、之を國策の線に沿はしむる樣、大局的統制を加ふべきである。厚生政策も畏縮的でなく、飽く迄大陸發展と結び付けて、發展的解決を策すべきであらう。支那資源と秩錄公債と公債利拂とを結び付ける如きは夫だ。

（四）

余の友關口泰君は又、官僚の本質に就て次の樣に述べて居る。曰く「一體官吏は他力に依て動くものであつて、自力で動いてはいけないものであるから、時局に即應して、あとから追ひかけて行くことは出來ても、時勢に先立つて革新の事を行ふと云ふことは出來ないのである。夫が出來れば官僚ではなくて政治家である。新官僚が政治家になり切れずに、官僚の殼を被つたまゝ官僚の殼を破れず、官僚の殼を出きらずに、革新の事を行はむとし、夫を世人も期待したから直に其の期待は覆らざるを得なかつたのである」と。之は既に一度觸れた如くに慥に官

僚の畏縮的態度の一面であること疑を容れないけれども、筆者は官僚が國家の表現人たるの本質上是非共斯の如きものでなければならないとは信じない。

官僚の中にも新しき生きた眞理を掴み、創造の出來る人間があつて然るべきであり、官界も陸海軍等の樣に又斯の如き人物を殺さずに適所に配して、其の力を振はすべきである。「エヂソン」が萬人は何故に何の藝をも演じ得ないのか。蓋し彼等は深く考へないからであると云ふたのは實に味ふべき言葉で、今迄の內閣の閣議決定錄が淺薄な平面論理で充たされて居るのは驚くべき程である。官吏も政治家も皆な「エヂソン」の云ふ萬人の內に含まれて居るのは殘念である。是非とも之を是正することこそ、反て官吏を生かし、其の本分を盡さしむる所以である。廣田內閣以來の歷代內閣の革新運動も其の根源は××の蹶起した五・一五事件、二・二六事件以降のことであつて、××と雖も武官である丈けで官僚には相違なかつたのである。夫から世人は大臣の椅子に座はる政治家の力量を過信してはならない。彼等は往々にして、自己固有の勢力を持つて居ると云つても、夫は「ヒツトラー」や「ムツソリニ」の場合とは似てもつかない情實關係で、往々十人並の能力しか無い者が多く、辛ふじて官僚の誘拔に依り、其の任務を果たすと云つた有樣である。故に吾人は一國の領導者が、官僚の氣風を一新させる必要が

あることを力說して置きたい。

此の見地から必要なのは、官吏身分保障令の修正である。支那では敎授の任期は一年である。最近新民學院院則草案に敎授の任期を二年とし、場合に依りては更新し得ることとしてあるのは誠に嶄新の規定で、人々をして睡らせない爲に頗るよい思附であつたと思ふ。兎に角、國運の進む方向に逆行する樣な敎授が出來ても、久敷く一指をも染め得ずに居ると云ふ樣なことは、國家の半身不隨を意味するもので、甚だ遺憾である。大學總長官選問題位を荏苒決せない樣で、何の革新ぞやと云ひたいのである。此處で一歩間違ふと一方に於て身命の國有化が行はれて居る時に、他方に於て官職や國費の私有化が行はれることになると云ふことを、吾人は斷々乎として警告せざるを得ない。

最近東京帝大經濟學部に肅學が行はれたが、久敷思想問題で指彈されて來た敎授と、右指彈に努力した敎授とを、思想問題と服務規律問題とで夫々處斷した。事務ありて政治なき日本人の爲す所は大概斯の如くである。もうそろ〳〵自由主義の華を咲かせてもよい頃だと例の桃色大衆雜誌の立揚るも亦故ある哉と嘆息せざるを得ない。

由來我國に於て恩給亡國の聲は頗る高かつた。恩給法は多少修正されたとしても意義ある改

革は加へられて居らない。今や身命を國有化された人々の遺族や不具廢疾者が增加しつつある際に考ふべきことは一般通常退官者の恩給や遺族扶助料を減額して財源を捻出することである。日本の平均國民生活水準から考へて、恩給額は其の最高限を年額千二百圓か高々千八百圓位に留むべきである、恩給と議員歲費とを兼て支給さるる如き者には、後者の一方を支給すれば充分であると思ふ。筆者は日本中道全體國家主義の立場から比較的經濟の平等を以て精神的序列合理化の保障となすべしと常に主張する者である。

（五）

其の關聯に於て考ふべきは、貴族院議員と樞密顧問の終身任期制度である。我等は變死急死の場合を除くの外、官公職に就いて居る者が晏如として其の地位に居りながら死ぬことを許すべからざる不道德とするの氣風を我國に普及させたいと思ふ。

官職の私有化を認めたのでない限り、貴族院や樞密院の老人が時に兩三年も寢て居るが如き慣行は決して許すべきでないと思ふ。議院制度の改革は貴族院に向けられて居るのであるが、有爵議員の如きは最少限度に止め、職能代表等で働きのある人物を動員すべく、勅選議員の如

きも任期を六年位と爲すべきだ。六年間に出すべき味を出し竭せない樣な人間が一生其の地位に居つたからとて何が出來ようぞ。

昭和維新が內閣の政綱となつてからも革新は掛聲丈けで少しも實行されない。平沼內閣に至つては革新と云ふ事を罷めて仕舞ふたかの印象を與へてゐる。何故然るやと云ふに我國では大抵政權を握る者と云へば形式的にか格式的にか偉い老官僚や特權的階級で、內閣の孰れもが實は革新さるべき要素から構成されてゐるのである。從て革新は支配層の腹切りを意味し、中々實現せられない所以である。貴族院改革論の行衛を見れば事態は明瞭である。日本の機關は餘りに年を取つた。革新は無名の實質的英雄の登場をまたねばならぬ。

民政黨の革新政策綱領に「沈滯する政治の狀態を一新し、國民の總意協力の下に國政を改革し、活潑なる經綸を行ふべし」と云ひ、「國民各階級の均整調和を計り、健全なる社會體制を構成すべし」と云へるは、吾人の贊意を表するに吝ならざる所であるが、一切の革新は目下官公職に在る者をして其の創意を當面せる帝國の東洋的大使命達成の爲め必要とせらるる國內生產力の擴充の爲に出し竭さしむることにあらねばならぬ。又右の需要に應ずる爲には、一時に官僚の半數でも三分の一でも入れ換へて淸新の氣を注入して差支へないのである。

筆者は自主外交を率先提唱した關係上、此の際一言注意したいことがある。社會は立體構造を持つて居るから平面論理は役に立たない。其の結果として一見矛盾ではあるが、尊王攘夷の次に開國進取と來るのである。夫でこそ日本の今日の隆盛は期し得られたので、さもなければ日本も支那と似たり寄つたりの狀態に置かれたに相違ない。偖て自主外交、自己肯定外交、武威の發揚はよいが、世界の學藝技術の進步に目を閉ぢることは大危險である。帝國は原料でも機械を作る機械でも、精巧な部分品でも餘りに多くを外國に依存して居り、到底「オータルキー」を實現し得ない。故に極東に於て孤立はしても、世界に於ては完全に孤立せず、獨伊の如き協力相手を持ち、之から愈々科學上、技術上の啓示を仰ぐべきである。今日安全剃刀の刄にさへ困つて居ることを思へば、外交上軍事上の自負心はよくても、科學的技術的自負心は著しく危險で、矢張謙虛が必要であることを序でながら絕叫して置きたい。

一切の革新の推進力は生命の國有化されつつあるの事實である。國家は萬人に對し、如何なる衡平の犧牲をも要求することが出來る。官職等の私有化など斷じて許さるべきでない。此の認識に徹しさへすれば、目下全く停頓して居る昭和維新の大業も難なく成就され得るであらう。此の維新は大陸政策の遂行、特に大東亞主義實現の前提として是非要求されて居るのであ

る。蓋し舊秩序に依存する分子が跋扈してゐては、吾人は東亞諸邦中に於て指導的地位を掴み得ないからである。

第十三章　現地に視る

一、序說

韓非子の說難を讀んで見ても、俗世の知識から判斷しても、布衣の徒が「あることを爲すべし」と云へば爲政者は之れを爲さないに決つてゐる。「或ること」は將に爲すべきであるが「今の爲政者には出來まい」とけしかけて見たところで別に反響もない。其の位に在らざれば云はずとか、其の位に在れば桀紂と雖も天下を治め、其の位にあらざれば堯舜と雖も三人を治むることは得ずと云ふは一理あるかも知れぬ。其の逆を實踐に示してゐる眞の天下取りたる軍曹上りのヒツトラーやムツソリーニは現代人ではあるが歷史に輝く英雄として許すべきであらう。兎に角舞文は知識人の精神的體操としてのみ之れを爲すべきである。

二、オーコン・ロイ

先年慶應大學のオーコン・ロイが「日本の脅威（メネース・オブ・ジャパン）」と云ふ本を著して、世間の問題になつたことがある。今春來間諜問題が矢釜敷くなつて來て、當然に當局の取締が嚴重になつて來た。

今日の如き亂世――夫れは容易に適確に豫言し得たことであるが――に於て間諜が活躍し、露國の如く鎖國主義を取らずに自由に開放されて居る帝國に於て、ソ聯、英米、支那等の間者が亂舞するのは常識上豫想さるべきことである。又今日の如き亂世に於て自國の植民地に外國人を自由に活動せしむることは危險でもあり、之れを許すは過怠であるとも云へる。斯かる時世に日本人の外國人に對する先天的自屈心理は實に有害だと思はれる。長崎、浦賀の時代から邦人は對外媚態の習性が涵養されたものゝ如く、今日でも內地に於ても、時には大陸に於ても對支媚態を演出して居る。其の極端な一例がオーコン・ロイである。此の男の寫眞は一見して前垂掛をして雜巾を持つて立働く人間の夫れである。愛蘭生れで船乘りとして外國に出たことから見れば船員で逃亡者（デセルトール）である。コンスタンチノープルより歐露西伯利亞から英語の家庭教師位をしながら、日本まで流れて行つた百パーセントの「喰はせ者」所謂 avanturier である。夫れを大學の教授なり、講師なりに取立て、上流社會で歡迎し、其の當然の結果として、多くの機微に亘る事實を摑んだことは本人の述懷せる如くである。貴族の娘と結婚したと云ふことは誇張であらうが、凡そ日本人の對外媚態心理は斯の如きものである。筆者は邦人中に此の大失態事件で一人と雖も責任を負ふた者のあることを聞かないのを不思議に思ふ。

玄人である外國の使臣や駐在武官が、興味を以て狙ふ階級は、極めて一部の上層階級である。駐在國の樞機の全部又は一部を握らない樣な人間に接近したとて特に何の得る所があらうぞ。

斯かる人間は決して警視廳から一寸來いと云はれる樣な代物ではない。嘗て外國の駐在武官に過度に接近し或は接近された理由で不良少女達が檢擧された記事を見たが、彼女等が幾何の害を國家に爲し得たであらう。

オーコン・ロイの著書は、深甚なる害を我國に及ぼし得る排日書物である。戒しむべきは外に在つてはオーコン・ロイの如き喰せ者である。內に在つては沒我的媚態心理である。爲政者は自律する地位にある故彼等こそ危險な地位に居るのであつて、常に自肅するが賢明である。車に積み桝で量る役人は獨善になるよりも公僕たるを自覺すべきである。

三、北京城と云ふ都市國家

北京は既に千年の古都で其處には羅馬のバチカン宮に入つた時の様な積る沈滯の空氣が流れて居る。今となつては少數であらうが直ぐ外には從前よりの匪賊の類は云ふに及ばず、或は敗殘兵も出沒するであらうが、萬里の長城の延長とも云ふべき高さ數丈厚さ四五間の城壁を廻らした都市は太平洋上の珊瑚礁の入江の様に靜かである。一民族國家内に於ける此の都市國家は、恰も古希臘の都市國家と似て實は未完成民族國家の表徴である。蔣介石政權の統一は勿論此の城壁を必要ならしむる傾向のものであるが、國民黨の運動が直ちに東洋平和の破壞、東洋の破滅を意味するものであるが故に、宿命の東亞大禍亂の幕は切つて落さるゝに至つた。而して北京城は都市國家の役目を完全に恢復した。

此の都城内には今春光裕々大廟の彼方の森から舞上る鶯は碧空に逍遙して、柳暗花明又一村の上を蕩かす様ななごやかな微風が流れて居る。人は容易く城壁外の事を打忘れて太平の氣分に醉ひ得る。内地に於ては、國民精神總動員も活を入れ直して行はれて居り、民族全體主義の指示する統制經濟も益々强化されて、社會は强く引緊められて居るのである。然るに北京に於ては左様の事は行はれ難く、旁々鯨波を揚げて押寄する同胞達の經濟開發も未だ殆んど緒に着かず、一銅元と雖も支那側から儲けさせて貰はず、從つて一切は本國の租稅公債等に依る將來

の貯蓄の持出しであるのに、聊か日支料亭に含英咀華を事とし遊里に弦聲を揚げしむるに過ぎて居る。哈德門（ハートメンター）大街（チエー）を過ぐる者は其の東側の胡同（フートン）に廣告を列らぬる料亭、「カフェー」等の「ネオン・サイン」に驚かぬ者はあるまい。前門にも亦左様な所はあると云ふ。其處で世人の知らんと欲するのは之丈けの遊里が成立する爲めに何人が遊興し、×××××××××、結局其の經費が何處から湧いて來るかと云ふ事である様だ。筆者は内地で頗る八釜敷い官規が弛んで居ない事を切望して止まない。特に第一線が身命の犧牲を呼んで居る時に於てをやである。

大毎大陸版が從來の北京在留人は新しい景氣人の爲めに洋車（ヤンチヨウ）にさへ正當の代價では乘ることが出來ないに至つたと報道して居ることは吾人の經驗とも一致して居る。内地流の統制か、人心を引緊める方策の實施かが確かに必要になつて來て居る。

筆者は嘗て通州事變の原因に付根本的に調査したことがある。勿論逐一の報道は差控へねばならぬが、尠くも次の事を言ひ得ると思ふ。即ち同胞の全部が完全知覺の狀態に在つて、其の周圍に醞釀されつゝあつた或るものを見守つて居たならば、決して、あの様な慘事は起らなかつたに違ひない。而して同胞の孰れもが男女を問はず技巧的の虐殺に遭ふよりも勇敢に戰つて死にたかつたに違ひないと云ふことである。右の完全知覺の狀態を維持する爲めには、現在北

支に在る同胞の生活振りは大に適當と云ひ得るだらうか。

長安街から英國大使館の前を過ぎて交民巷に入る門口の城壁に、義和團事變の折の彈痕がある。其處に支那人から尠くも嫌はれて居らない西洋人は書して曰く Lest we forget「我等が忘れない爲めに」と。

四、居留民と民兵制度

際涯なき大陸に兵を動かす以上、時と場合とに依り兵力の不足する場合はあり得る。極めて少數の我が將兵が、雲霞の如き敵軍の武裝を解除した場合の經驗を再三聞いた事がある。今日でも北寧線京綏線に警乘する我が兵士は無數の支那乘客に取卷かれて居るのである。之を理論上死地に陷つて居ると云へば云へないこともない。而して大陸に於ける我が居留民は一般的に斯かる境涯に置かれて居るのである。そこで筆者に張家口、北京、漢口以南の各都市の居留民を義勇民兵に組織化せむとするの提案がある。之れは在留民の萬一の淫蕩に流るゝを抑制し、之れに完全覺醒を與ふるの間接的效果を齎らすものである。

瑞西の民兵制度は必任義務兵であるが、兵士は兵營内に起臥することは極めて例外で、彼等

は大體銃器を携へて自宅に起臥し、出でゝ制規の訓練を受くるものゝ如くである。此の制度は超越的存在であり得る政府や國軍幹部に兵士の統帥を委する代はりに、兵士達の上に直接に勞働組合、農民組合、俸給取得者聯盟等の支配權を及ぼさしめむとする野望を加味して考案せられたものにして所謂民主的統制（デモクラチック・コントロール）を軍隊に及ぼさむとするものである。

恐らく第二インターナショナルの國際會議に於て軍縮の一案として民兵制度の採用が、慫慂されて居るのは之れが爲めであらう。併し斯くの如き意圖の我國に於て排斥せらるべきは、論ずる迄もない。

けれども大陸政策の徹底的遂行上、大陸に於いては朝鮮迄も含めて各集團的居留地に於て次の理由に依り同胞の義勇民兵制度を布くことは有益なりと考慮し得ると思ふ。

第一、大陸政策の遂行上、各集團地域に於て數十年に亘り時と場合に依り兵力の不足する場合あること。

第二、大陸の先住民族大衆中に、珊瑚礁の如く點在する同胞は常に一種の盞然的危險に晒されて居ること。

第三、支那人の各世帶、各集團は必ずや消極的又は逃避的自衞制度を具備して居り、同胞に

は一層其の必要あること。

第四、徴兵制度に依る國軍と異なり、居留民義勇兵は固定せる居住地に於て僅に組織化有効化されたる共同自衛に服するに過ぎざること。

第五、支那大陸の實狀に鑑み、保安隊の如きものには銃器を携帶せしむるの必要ありて、希望すべき大陸軍備撤廢も完全には之れを實行し得ざること、從つて居留民團は叛亂することあるべき保安隊、匪賊團、敗殘兵團等よりも劣勢ならざるを必要とすること。

第六、大陸に於て同胞居留民の殺到して國軍の桎梏となる場合あるべきも、此の制度に依り此の缺陷を除去し得るのみならず、一面强力政策たる大陸政策の完璧を、居留民が增加すればする程期待し得ること。

第七、國家總動員法は既に可決せられ、國民の訓練上、勞働奉仕制の實施すら考慮せられ、既に一部民間の發意に依り實施を見て居る際、大陸居留民に此の制度を適用するは全く當然のことであると思惟せらるゝこと。

勿論此の制度は義勇兵制度に依り、現地限りの受動的共同自衛を精神として組織せらるゝ點に於て、國軍とは區別せらるべきものである。併し銃器彈藥等は國家から支給し、在鄕軍人等

を以て基幹となすべきである。平時は每朝又は隔日に一時間位兵式敎練を行ひ、射擊倶樂部に倣ひて射擊を練習し、完全知覺の狀態に於ける總員の感觸肢を働かして周圍の危險を豫知し、事前に之れに備ふるの演習をも隨時實施すべきである。勿論規律は絶對嚴正なるを要し、苟も濫用なからしむると同時に、目的の爲め迅速に行動するの機能を賦與されねばならぬ。目前の長期建設をやらねばならぬ大陸政策は尠くも此の位の非常對策を要求して居ると自分は考へる。

五、大陸政策擔任機關の移駐

等しく帝國の危機ではあつたが、軍事活動の今日程大規模ならざりし際にも大纛を廣島に進めさせられた例がある。遷都と云ふが如きことは臣民の私議を許すことではあるまいが、明治維新の際には大阪遷都論と江戸遷都論とが對立し、結局東京が選ばれたのは江戸の繁華を保つ爲めよりも、東北、北海道の鎭撫開拓が決定的論據であつたと傳へられてゐる。今日深遠なる意義を有する大陸政策の遂行に當り、內地の官僚が交々來つて少時見物をやつた後に、紙に字を書いた位のことで大陸がどうなるものでもない。是非共之れは大陸を墳墓とする同胞の體當

りで行く外致方はない。夫が日本の死活利益に觸れて居るのに支那のことを支那人にやらせてすませてゐた結果今日の事態に逢着したのではないだらうか。然らば雲霞の如き同胞の殺到は其の覺悟と準備との次第では歡迎すべきことである。夫れと同時に大陸政策遂行を全一の職責とする國家機關は擧げて之れを大陸に移す方が賢明である。自分の眼には東京と北京との間の往復旅行が、左迄大陸政策に役立つとは映じないのである。

最近議會に於て陸相が銃後の軍需工業を大陸に移すべきを示唆したのは遲いけれども吾人の意を得て居る。今夫をやつた所でソ聯の追隨にしかならない程先方の準備は進んで居るのである。吾人は天津や釜山を通過し、あの線一本で大陸と日本とを連ねて晏如として居る當局の迂を寒心を以て見てゐるものである。筆者は遷都論丈けは今は差控えて置くが陸軍省や參謀本部位は大陸へ移る位の英斷をやらなければ駄目だ。中だるみになつた戰局から人心の弛緩が生じ、又自由主義が擡頭し、大陸拋棄苦しからずと云ふが如き論が飛出さないと誰が必し得るか。

蕞爾たる一小島臺灣の日本化に、既に兒玉、後藤の名コンビを必要とした。一半島の綏靖の爲めに明治の大政治家伊藤公を必要とした。然るに滿洲國に未だクライブ・セシルローズの存

在を聞いたことはない。況んや北支、中支、南支に於てをやである。外國特に支那等に於ては、政治とは滅私奉公の名に於て滅公奉私するの術であると見られる事實が屢々ある。我國に於ては國體夫れ自身が滅私奉公を必要とする以上、誰人でも最も有能なる忠君濟難の士に遣らすべきだ。東洋精神は服善讓賢でなければならぬ。日露戰爭後の南滿洲の如き中途半端の仕事をやらぬ心算なら、此の際大に考ふべきではあるまいか。

興亞院が東京に出來て其の連絡部が蒙疆、北京、青島、上海、厦門、廣東等に其の暖簾を揚げた由である。斯る機關の機構に何故に十全に國民的要望を盛らないのであらう。陸海軍中將では唯の一勅任官である。其の下は勿論官僚で堅められるから實質的の一大偉材が自分の生命をつぎ込んだ鴻業をやらうと思ふても斯る人を動員する餘地はない。支那の政治家は實に海千山千の老獪さで服務規律の下で機械的に動いて來た人達の手に負へる樣な代物ではない。今日は持場持場に依て適才を躍らすべき時であるが、事實上は必要な場所に適當な指導者がなく、萬物が其の所を得ずに缺伸して居ると云ふ話だ。是では國民精神總動員の效果も如何かと危ぶまれるのである。是非共現地に第一流の政治家を送らねばならぬ。軍部は强弩の末勢と云ふ樣にならぬ樣に持場をかためて貰ひたきものである。

興亞院と其の連絡部とが出來て今後中央との關係は改善される事と期待される。併し尙一工夫を要するのは連絡部と連絡部、特務機關と特務機關との協調であらう。北支は新民主義で中支は大民主義で行くと云ふ樣な事や、夫に類似の事例は是正の餘地があるかも知れぬ。日露戰爭當時には諸軍司令官の上に大山總司令官あり、之に兒玉參謀長を配して軍規を嚴肅にし、一途面も振らず聖戰に邁進した次第であつた。

六、正氣時に光を放つ

日本歷史に於て和氣淸麿、藤原鎌足、楠木正成の如き純忠の人が現はれて藤田東湖をして正氣時に光を放つと歌はしめて居る。併し道鏡や、入鹿や、尊氏の如き逆臣も亦遺憾ながら日本人であつたのだ。正氣が光を放つ瞬間は寧ろ暗黑の濃い時ですらあつたのである。日本人の國自慢は時として度を越すこともあるのだが、其の誇るべきものを持つ日本人特に過去の日本人は一例を取るならば武門が大政を壟斷して、明瞭に不敬不臣の罪を犯し續けること七百年約三十世の間何を爲して居たか。大體は既成秩序に媚びて功利を貪ぼつて居たものと思はれる。明治維新の際にしても本當の先覺者は非業の最後を遂げ、高杉普作の所謂「一夜明くれば誰も來

る」と云つた連中が利を收めたことはなかつたであらうか。今だつて日本の武士は第一線でも守備戰線でも特に荒鷲隊戰線などに於ては惡戰苦鬪を續けて正氣は到處に光を放つて居る。併し其の背後に於て曩日の樣な逆臣が無い迄も公器を逆用して功利を貪ぼつて居る者はないか。吾人は尊嚴なる身命の國有化が行はれて居る時左樣なことの絕對に無からむことを要望して止まぬ。

此の頃「土と兵隊」を讀んだ。其の著者火野軍曹は出征の船中で述懷して、今迄で見ず知らずの戰友が集り來つて自分の部下となり、自分の命令下に水火をも辭せず死に赴くを今更深い感激を以て思ひ浮べて居るのである。併し筆者は云ひたい、上等兵や一等兵の多數が火野軍曹に隷屬して、水火をも辭せないと云ふのは決して火野軍曹其の人にではないのだ。彼が個我を全く蟬脫して大死一番して大我に歸一し、　陛下の下に於てのみ彼は部下を持ち得るのだ。功利なぞを追ふ餘地は絕對に無いのだ。此の事たる司令官、參謀官、部隊長、主計官に就ても全く同一に論ぜられねばならぬ。筆者は此の點の回想が足らぬではないかと思はるる事例を聞かされることがあるので特に此の點を力說したい。正氣は時に光を放つだけだとすれば常時は其の反對であることも豫想される。筆者は百億の豫算を前にして日本にも監察院と云ふものが必

要でないかどうか研究を促したいのである。

支那人は一面督戰隊や銃殺の强制もあるではあらうが、他面に於ては護國の鬼として祭らる る神社があるのでもなく、遺族が名譽を得るでも、生活の保障を得る次第でもなきに今迄は兎に角立派に蔣介石の揮下に集中して其の民族的信念の爲に戰つて來て居るのであつて、誠に健な氣の事である。獨逸人が手を擧げて「我等指導者に從はむ」と誓ふのを見るとき實に吾人は今迄にない感激を覺ゆるのである。日本人にも之以上のことがあるべきではないか。吾人は第一線以外に於てもつと屢々正氣が光を放たむことを要望して止まない。

七、國內思想戰を克服せよ

筆者は常に重要問題は同時に政治的・經濟的・文化的であると主張しながらも、實際論者の立場から政治經濟に重きを置き、犧牲に對する正當なる保障や賠償をある形式に於て得るの必要を力說し來つた。從つて思想戰の方面を高潮するのを差控えて、之れを他に讓つて來た。併し思想問題を排斥し去つて、唯の物質問題としては、到底今度の事變は解決出來ない。

然るに帝國內に於て今日に至るも尙ほ一方、自由主義、英米依存主義、社會民主主義、人民

戰線思想等の潛在せるものあるに對し、他方日本主義精神の對立して相剋し、國本社出身の當局すら全體主義戰線、國民戰線に屬する事を肯定すまいと欲するものゝ如くである。

國家總動員法案や、電力國家管理法案の討議等はよく右の相剋を明瞭にして居る。東京帝大經濟學部の肅淸にも同一の傾向があつた。國家總動員法案に關し、憲法の尊貴なる所以議會の尊重すべき所以を高調する政黨人は勿論あつた。併し憲法も亦國家の存在以後に立案せられ、國命維持の爲めに欽定せられたものであること、能率の大切な時代に議會が果してヒツトラーの此の四、五年間に完成した事業を成就するに堪ふるや否や疑問であること、獨裁と云つても獨伊の夫れの如きは第一義の民主主義なること、ブレーキが全體を支配するの利害疑はしきこと等を適度に高調する者はなかつたやうである。以上の思想的無政府狀態は筆者の見るところでは、對支經綸に反映して居る。和戰各工作は交錯し、而して時局の歸趨をさへ聊か不明瞭ならしめて居るのである。

此の事態は現地に於て支那事變を檢討すればする程淸算されねばならぬことを痛感する。蓋し筆者の見る所では今度の事變は長髮賊の亂と頗る酷似して居つて、東洋的日本的のものを以て、猶太的西洋的のものを打破すると云ふ認識なしには、事件の收拾が手際よく出來ない關係

に置かれて居るからである。

洪秀全なる進士試驗の落第生は一宣教師から聖書の拔萃と動世良言なる書を貰ひ自身上帝の子、基督の弟と夢想し東洋の經典、通俗の信仰を打破せむとした。彼を取卷く者共は大部分所謂客家の出であつた。彼等は又外人部隊に依りて太平天國の建設を助けられた。彼等は北上して十七省六百餘城を拔き、南京に來つて大饗宴をやつたが北方人の爲に遂に滅亡した。孫文、蔣介石、國民黨は客家より起り、三民主義等外來思想に鼓舞せられ歐米依存、聯露容共、外人部隊に依り其の大をなし、歐米派特に宋家の如き華僑と其の資金とに支持せられ、西洋流儀を以て一切の東洋流儀を克服せむとした輕薄才子達に引摺られ、南京に入つて增長限りなく、遂に今日の災禍を招きて滅亡の一路を辿らむとして居る。兩者の經路は全く同一轍である。

從つて大義名分の存する所今度の事變は一切の東洋人が起つて、一切の東洋的なものを以て一切の西洋的なものを排擊せむとする運動として意識されねばならぬ。西洋の科學に追付き之れを追越すことも、防共戰線の協力を確保することも、皆之れが手段に外ならぬ。筆者は思ふ、斯くの如き事件の性質が、あるひは遂に今日の帝國內部に於ける思想的無政府狀態を拋棄せしむるに至るなきやを。

思想戰と表裏をなす關係に於て、國內的に現狀維持論と革新論とが對立して居る。併し前者の戰爭に於て是非東洋的のものが勝利を占めねばならないと同樣に、後者の相剋に於て終局の勝利は革新論にあらねばならぬ。蓋し帝國の創造力活動力は、悉く大陸に移駐し、國內は產後の子持鮎でなければ、大陸開拓の目的精神に人、資材、金力を供給する輜重兵團に成り終つて居る。

憲政の尾崎咢堂翁が同胞が滿洲に重きを置きすぎる事を指摘したのは多分同一の認識に基くのであるが、最早や吾人の行動精神は直ちに大東亞を戰ひ取らむとし、其の重壓の下に革新は既成事實となつて居る。若し此の際敗戰主義に出づるか、出でしめらるゝならば其の反動は一層深甚なるものがあるであらう。

八、何ぞ鵬翼を扶搖に搏たざる

筆者は舊著に於て滿洲事變以來の運動を雄邦日本の完成、東亞の恢興（ルドレスマン）、東洋的東亞保全への歸元を意味するものと認識して來た。此の運動はハウス大佐の指摘したる人類の良心に反する如き領土の分配の修正を意圖する現狀打破的國民防共戰線の運動と合流して二十世紀の世界史

を方向轉換せしめむとして居る。

斯くの如き東西の今や洪牙利、西班牙までも加へた防共國民運動は中央亞細亞に於て東西の會合握手を見むとして居る。此の運動こそ、遂に中央亞細亞の黑點を克服すべきものであつて、無主の入會地新疆等を貫いて西進するは大陸政策のドン・キホーテ的信奉者たる、吾人の宿命的發展である。京綏鐵道を西に走つて包頭に到れば、五原沃野は眼前に展開して、小亞細亞と同氣相求め聲息相通ぜむとして居る。大和民族たるもの、何ぞ鵬翼を扶搖萬里の風に搏たざる。若し夫れもぐらの如く蟄居するを以て明哲保身の術を得たりと考ふる者あらば、そは時局認識に最も拙なる者と云はるゝに至るのではあるまいか。

第十四章　結論

封建時代を通り拔けて近世民族主義運動が始まつて以來の世界政治の動向は、之を大局的に見るならば西力東漸の一語に盡きて居る。夫は外國人の用語を借りて云ふならば、世界の歐洲化と云ふことである。六大洲、五大洋を通じて何處に絕對的に歐洲化されない政治、經濟、文化地域があるだらうか、既に一大疑問である。世界の現狀は一言にして竭すことが出來る。全世界は歐洲化されて居る。其の內北米合衆國から阿爾然丁迄の地域が歐化の儘獨立したに過ぎない。米國は何故日本の大陸發展を好まないか、彼が歐洲化の延長であるからである。彼が世界歐洲化運動の訂正第二版に過ぎざるが故である。此の米國に取り英露の東漸が必ずしも好ましくないものと映ずる筈がない。米國の對支態度を「下敷になつた犬」に對する抽象的の同情であると解するのは淺薄の見である。此の種論者は米國のあの軍擴狂想曲をどうして說明することが出來るか。

世界各國は國際法とやらに依り此の現狀を尊重する樣に要請されて居るのであるが、夫は結

局何を尊重することなのか誰も知る者とてはない。世界の大學の先生とか、政治家とか、軍人とか、外交官とか一切合切盲目の横行して居るには驚く。自分の見る所では夫は遊獵の結果として出來た世界の現狀、唯一秒又は其の數倍の占席競爭に於ける先順位を神聖不可侵のものと見て尊重せよと云ふのである。遊獵と一秒とを最高原則として立て樣と云ふのである。吾人は此の馬鹿氣た要求を絕對に拒否するものである。

西力の東漸に當り露西亞は亞細亞の屋根傳ひに太平洋岸「オホーツク」海に達し、次に滿洲朝鮮迄南下した。之に反し英國は緣側傳ひに山海關をこえ奉天附近迄達した。露英の相剋が「コンスタンチノープル」に於て、波斯の中原に於て、新疆、西藏の境界に於て、萬里の長城に於て火花を散らしたのは當然である。日本の幼弱にして羽翼未だ成らざりし日に於て、日英同盟が成り、日本が鵬翼を扶搖に摶つの日、英露相呼應するは世界歐洲化運動の必然の結果であると云はねばならぬ。

世界歐洲化の結果として土耳古より支那に達する迄完全なる獨立民族國家は一つもない。世界に於ける唯一の例外は久遠實成の黃色人眞正獨立國日本の存在である。玆に日本の世界的、東洋的意義があるのである。此の日本すらも嘗て一度は歐米人から治外法權を布かれたのであ

つたが、日本肇國の理想は國民の强靱性と相俟つて、早目に日本をして此の半植民地制度から蟬脫し得せしめた。夫にも拘はらず、我が羽翼の成らざりし日に於ては、當時の我が政治家の無自覺と相俟つて、我國は國際政治の客體と爲り終はり、巴里、華盛頓、壽府等の國際會議に於て歐米政治家を大法官の如く仰ぎつつ、支那を相手に被告席に着いて夫を覺らずに居たのである。門戶開放、機會均等主義、九國條約等は當時の遺物である。昨年十一月三日の近衞首相の放送演說、最近の對米回答等は此の見地から見るときは遲蒔きながら劃期的聲明である。其の逆轉せない樣希望して置く。

宿命論と自由意思論との相剋は久しいものであるが、宇宙の大法則の玩弄物に過ぎない人間に根本的に云へばどれ丈け意思の自由があるか疑問である。斯て日本人は環境に對する直覺的な反作用として神功皇后以來大陸に國家鎭護の第一線を置いて來た。凡そ物事は結果こそ大事である、其の結果から云へば日淸戰爭を戰つたのは唯朝鮮が淸國の掌中に在つて滿洲と一括して露國に併合さるるのを防がむが爲であつた。日露戰爭は此の運動の延長に過ぎない。況や日獨戰爭、滿洲事變、日支大事變をやである。動物の動物たる所以は運動性に在る。運動しないことは人間に取つて最大の苦痛である。其處から牢獄と云ふ觀念が生れて來たのである。され

ば孔夫子も博奕なるものあらずや、之を爲すは尙已むに勝れりと云ふて何もしないよりは賭博でもする方がよいと敎へて居るのである。此の見地から前述の日本の運動を觀察するとき、日本は西力の東漸するに對し東力西漸の運動を起して居るのである。筆者は此の運動の消極的方面を東洋的東亞保全と云ひ、其の積極的方面を大東亞主義と名附くるのである。滿洲國は東力西漸が西力東漸に打克つた世界大維新の記念碑であるのである。

小さく且弱く見えることは罪惡である。蓋し事大思想は多少は人間に免がれ難い傾向であるからである。況や支那が見て以て大なりとなす所のものに日本も嘗て三跪九叩して遲れむことを是虞るるの慨ありたるに於てをやである。支那は何時の間にか完全に西力の奴隷となり、其の驅使に甘んずる樣になつた。其の標徵は淺薄なる孫文の三民主義であり、所謂廣東精神である。長髮賊が之に依て動かされ、國民黨が之に依て動かされた。此の西力東漸の傀儡が東亞固有の聖敎を蹂躙し、堂宇を壞つたのは當然であり。東力西漸の行者である日本と衝突するのは猶更當然である。支那は「ロヴアノフ」條約以來四十年一日の如く對日反逆陰謀を續けて來たのである。日本は此の支那を前にして一度として心廣く體豐かなりと云ふ樣な氣分になり得たことはない。時に日本が西洋流帝國主義を以て支那に臨んだのは其處から來て居る。併し滿洲

事變を契機として五族協和の滿洲國を建設した日本は帝國主義の色彩を蟬脫して、東洋的東亞保全、大東亞主義の圓覺に生きる樣になり、日支相剋を完全に揚棄せしめ、日支をして此の相剋より解脫せしむるの大乘的大東亞精神の經綸に出でた。併し惜しい事には唯精神である。日本が米國の樣な雄邦に成り切つて、大陸の經濟力など何等必要とせずに、其の東洋的使命に邁進するならば、日本の善意は支那人にも解るに相違ないが、困る事には支那の物質力を日本の精神力に合はせなければ自立する雄邦となつて日本の東洋的使命を全ふする事が出來ない。右物質力を利用せむと進出する精神は異つて居ても其の進出の外形は支那人の眼に西歐的帝國主義の再版と映じたかも知れぬ。西力の傀儡勢力たる蔣政權の眼には一層然か映じたであらう。此の邊から今度の日支大事變は生れて來たのである。大東亞地域內のことであるから東力東漸と云ふべきに夫を東力西漸と呼ぶのは浩嘆に値ひする。今や東力と西力は支那の中原を爭ひ、明瞭に頹勢に在る西力の傀儡は湖南、廣西、雲南、四川、陝西に據つて退却戰を戰はむとして居るのである。

東力西漸の擴大された陣營には今や北支、中支、蒙疆の各政府の外武漢、廣東等の治安維持會等も抱擁さるるに至つた。今や日本と云ふ東力西漸の行者は滿、支と云ふ二大菩薩を得たの

である。此の秋再燃せしめたきは扶清滅洋の義和團精神である。此の運動は明瞭に、滿支提携と西力排擊とに志向して居たのである。果然義和團精神は東力西漸精神であるのである。此の精神に立てば大東亞主義の意味も、將來に待望さるる東亞協同體の意義も自ら瞑解される。東洋的東亞保全、大東亞主義、東力西漸の旗幟の下に集まれば東邦諸民族は始めて自他の區別を忘れ得る。利を以て不利となし、不利を以て利となすの襟度を互に示すことが出來る。之を理念に於て未來に待望するものが東亞協同體の精神である。滿洲に關する相剋から解脫出來ない筈はない。

大の字に寢ても手足は蚊帳の外に出さないのを賢とする。此處から大東亞主義の理念が生れる。大學にも明明德新民の次に止至善と敎へられて居るのである。吾人の大東亞の觀念は希臘時代より歐洲化された印度と義和團事件の時迄支那に朝貢した緬甸とを區別することを出發點とするのであつて、所謂大亞細亞主義よりは遙に寡慾なのである。又印度に加へた歐洲人の二十世紀間の勞働力を全く無視することは正しくないかも知れぬ。さりとて吾人は大英帝國主義が老衰して印度を無主物として殘したり、印度民族主義が自決主義を實行したりすることを厭ふ次第ではない。偖て大東亞は緬甸より發して「ネパル」、「ブータン」、「シキム」、伊犁を

經て、「オビ」河流域に至る地域以東を云ふのである。夫は亞細亞大陸の半分に當り、歐亞として亞細亞の他の半分を殘し、獨、伊等をして充分に東方に膨脹せしめ、「ビスマーク」以來の東方に向け躍進の口號に盛られた創造力を働かして天地の化育に參する樣獨、伊を誘導するの準備をさへ整へて居るのである。世人の云ふ東亞は歐亞、歐露に抱かれた日、滿、支丈けの小東亞であつて、大東亞の三分の一に過ぎない。小東亞に蹋蹐すれば日支相剋の外人間の鬪爭本能を滿足さする組合はせはない。反對に大東亞に眼を轉ずる時日支は相携へて小東亞の爲に其の失地を奪回するの聖戰に出向く外行き樣はないのである。夫にしても日本の眞意は大東亞主義が出來た上でなければ支那人には完全に飲み込めないのであるから、目下軍事行動の利便の爲めに布かれて居る準軍政下に於て日本が東洋の爲めに竭すに必要なりとせらるる未開の資源には即時に其の全部に手を附けて一切既成事實を作つて長期建設に資して置く方が臨時、維新兩政府の立場を安易にし、平和克復後の再度の相剋を避くる所以である。感情的理想論は敗戰主義と一致する事を記憶せねばならぬ。かくの如くにして大東亞に大陸大洋體制を布くにあらざれば歐洲化された全世界に對し東力西漸の本據は其の地歩を保つことが出來ない。之が爲に重ねて吾人は大東亞綜合計畫經濟と無限大軍擴を提唱する。北米合衆國が今や加奈陀より阿

爾然丁迄の國防に必要なる陸、海、空軍を引受けて、南北兩米大陸に大陸大洋體制を布くに至つたことは、愈々大東亞實現の急を告ぐるものと云はねばならぬ。

大東亞主義は積極的奮鬪的剿共主義とも稱すべく、其の長所は蘇聯解體の場合に一擧に其の九割迄を實現し得る點に在る。然る後は爾餘の點は隴を得て蜀を望むものと云ふべく、印度支那、緬甸等は先住民族の成長して自決する迄又は英佛帝國主義の老衰して此の地を必要とせざるに至る迄、英佛帝國主義に保管させて置いてもよい。吾人は蘇聯の邊境に戰火一度動かば赤軍の銃劍は一齊に「モスコウ」に向ふであらうと云ふ樣な豫言を輕卒には受け容れない。併し勞働者の祖國、社會主義者の極樂が世人の傳ふる如きものでないことは既に明瞭である。加之蘇聯は新貴族階級と獄卒と被强制勞働者とに別れて此の位不愉快な階級制度の國は無い。下等な奴、無教育な奴程上に立つて居る。共產主義と國家社會主義とは正反對であるべきだが、事實上蘇聯の貴族や獄卒達は他國の資本家の地位を兼併して居る。共產主義への忠誠、社會主義者的競爭、「スタハノフ」運動、熱情等の口號は一切虛僞の附景氣である。蘇聯の苦力は帝王であり、三井、三菱の主人公であるべきに、彼等には着るものも無い。盜むとしても他人の皮膚を盜むより外はない。喰ふ物は屢々日に食「パン」四百瓦である。垢を落すことは最後の着

衣を脫ぐことになるから入浴する譯に行かない。厚氷に穴をあけて入水しない者は暗から暗に銃殺される。蘇聯の帝王程安價に命を取られる人々はない。之は正に社會主義者達が匡救しようと欲した最惡の事態である。其處には佛蘭西革命後の法律上の自由すらもない。此の天理人性に對する完全の蔑視が顚落を伴はずして永續するとは思はれない。大東亞主義は蘇聯の亞細亞的破片を抱き上げてやるの慈悲心位は尠くも之を持つべきである。

過去に於て無自覺なる東亞六億の大衆は歐洲化された世界に於て、國際政治の客體となつて愚弄され、虛無に等しき存在として今日に至つた。然るに東洋的東亞保全の聖業に一團の熱火となつて邁進する一億の日本人が近親東方諸民族に力强く働き掛けて其の東洋意識に點火した時に六億の大衆は、始めて東亞に於て天と地との間に我等自主的の人間が居ると云ふことを認識し得たのである。今や此の西洋他律秩序に代はる東洋自律秩序建設運動が既に西力東漸の傀儡を擊滅して凱歌を奏した以上、東亞六億の大衆は知ると知らざるとに論なく、好むと好まざるとに論なく、悉く起つて大東亞主義の行者となる外意義のある生き樣はないのである。大東亞の黎明に立ちて余は東亞六億の大衆に告げる。東洋的東亞保全、東力西漸、大東亞主義"Drang nach Westen"の旗幟の下に集れと。

以上は當局の迫力なき標語東亞新秩序の最も具體的なる意義である。其の彼岸は直に世界新秩序となるのであるが、其の實現の爲めには蘇聯の分裂と英國海軍の獨伊に依る制御とを必要とするのである。然るに何事ぞ我が政治の赤貧は片手切とは云へ絶大の努力を費して、併も孤立下の長期消耗戰を餘儀なくされて居る。蹉跌又は重壓に堪へ兼ねて新秩序を拋棄したり、舊秩序夫に依存した舊外交に戻る日本あらば余は最早相手とせない。歐洲一般戰爭、二十世紀の大病人の目前の死滅から直ちに神風が吹いて來るとは期待し難い。從つて吾人の高遠なる理想は東亞新秩序即ち東洋的自律秩序の誕生でありながら、吾人は霜辛雪苦の下、大陸大洋體制の布陣を具體的目標として專ら杭を打込む地味な基礎工事たる長期建設に邁進せなければならぬ。排雲殿や佛香閣の上層建築の偉觀は國民總服役制を以て戰ひ拔かれたる三十年戰爭又は百年戰爭の後に之を期待しつつ、神算鬼謀を缺く追隨戰爭は莫須有の孤立下の長期消耗戰を可能ならしめ、交戰滿二年に垂んとして尙前面に敵の組織的抵抗力の存在を許し、大局の勝利に拘はらず、全局の勝利を收むるに至らず、戰線は一部膠着狀態に入つた。此の時に當り時局解決の鍵は客觀的條件の內には何等決定的のものを發見し得ず、寧ろ夫は皇國二千六百年の傳統に生きむとする殉國精神の發揚の內にあるものの如くである。

不許複製

昭和十四年八月十五日印刷
昭和十四年八月十八日發行

（新東亞建設の綱領）奥附
定價　一圓八十錢
（外地定價一圓九十八錢）

著者　三枝茂智

東京市芝區田村町四丁目十八番地
發行者　伊藤隆文

東京市芝區田村町四丁目二番地
印刷者　青野仙吉

東京市芝區田村町四丁目十八番地
發行所　今日の問題社
振替東京五九七四八番
電話芝(43)三〇〇七番

◇今日の問題社・好評書目◇

本社出版の單行本は全國の書店にて發賣して居りますが、品切の節は直接本社へ御便宜の方法で御註文下さい。

中日實業副總裁 高木陸郎編 **北支經濟案內** 北支の事業商賣生活の案內書。（增補改訂版） 四六判・三二〇頁・上製 價一圓四〇錢（〒一〇）

高橋經濟研究所長 高橋亀吉著 **戰時經濟講話** 戰時經濟は今迄の平時經濟とどう違ふか。 四六判・二〇〇頁・上製 價一圓二〇錢（〒一〇）

王子製紙會長 藤原銀次郎著 **事業學・人間學** 德富蘇峰翁が推奬する處世書。（普及版） 四六判・二〇〇頁・並製 價一圓（〒一〇）

清浦奎吾著 **奎堂夜話** 日本の元老清浦伯の回想錄!!（普及版） 四六判・二〇〇頁・並製 價一圓（〒一四）

後藤朝太郎著 **隣邦支那** 白日下に暴露された現實支那の正體（普及版） 四六判・二〇〇頁・並製 價一圓（〒一〇）

教育總監部囑託 松下芳男著 **戰將・謀將傳** 近世日本が輩出した戰將・謀將五十人の史傳 四六判・四二〇頁・上製 價一圓七〇錢（〒一四）

不動貯金銀行頭取 牧野元次郎著 **私の處世法** 財界の偉人が體驗を語る處世談。（普及版） 四六判・二五〇頁・並製 價一圓（〒一〇）

牧野元次郎 石山賢吉著 **人間を作れ・金を作れ** 其道の權威が語る處世修養金儲話。（普及版） 四六判・二八〇頁・並製 價一圓（〒一〇）

遠藤一郎著 **赤軍の解剖** 世界の謎赤軍を解剖した權威ある研究書。 四六判・四三〇頁・上製 價二圓（〒一四）

ジョン・ガンサー著 大江專一譯 **歐洲の內幕** 紛亂せる歐洲の裏面と人物を解剖した名著。 四六判・三七〇頁・並製 價一圓四〇錢（〒一〇）

東郷豐著 **人間・小林一三** 財界興業界の鬼才小林一三の興味深い人物論 四六判・二〇〇頁・並製 價一圓二〇錢（〒一〇）

前大藏大臣 賀屋興宣著 **戰時下の經濟生活** 戰時下日本經濟の進路を說く國民必讀の書。 四六判・二三〇頁・上製 價一圓二〇錢（〒一〇）

柳家金語樓著 **戰線みやげ** 戰線銃後へ贈る書下し新撰傑作落語集。 四六判・二〇〇頁・上製 價一圓二〇錢（〒一〇）

柳家金語樓著 **旦那と奧さん** 金語樓の新作落語二十編を收む。 四六判・三二〇頁・並製 價一圓（〒一〇）

不動貯金銀行頭取 牧野元次郎著 **體驗人間學** 七十年の回顧から處世の道を說く。 四六判・二六〇頁・並製 價一圓（〒一〇）

東郷豐著 **池田成彬** 池田の人物傳と日本資本主義の發達史。 四六判・二三〇頁・上製 價一圓二〇錢（〒一〇）

尾崎行雄著 **咢堂放談** 尾崎が語る回顧錄、日本政治の裏面史。 四六判・三二〇頁・上製 價一圓三〇錢（〒一〇）

宇垣一成述 **身邊雜話** 宇垣が語る人間修練の道。（普及版） 四六判・三二〇頁・並製 價一圓（〒一〇）

景氣研究所長 勝田貞次著 **金か、物か？** 金の時代か物の時代か金の運用と物の處置。 四六判・四〇〇頁・上製 價一圓五〇錢（〒一四）

ジョン・ガンサー著
大江專一譯

歐洲の內幕

獨伊のローマベルリンを樞軸とするファッショ陣營と、英佛を一團とする自由主義人民戰線の陣營との抗爭によつて、紛亂常なき歐洲の情勢を內面から分析解剖した書として、世界に有名な書である。十七ケ國語に飜譯せられ、七十五萬部を賣盡した快著で、ヒットラー、ムッソリーニ、スターリン等々をはじめ歐洲政界の大立物の私生活まで探訪した興味ある書である。

四六判三七〇頁並製
定價一圓四十錢
送料十錢

遠藤一郎著

赤軍の解剖

世界の謎ソ聯赤軍の機構戰術を解剖した最新の參考書

定價二圓　送料十四錢

中日實業副總裁
高木陸郎編

北支經濟案內

北支の資源、產業、生活、地理、風俗を詳細に紹介した權威ある唯一の案內書。

定價一圓四十錢　送料十錢

後藤朝太郎著

隣邦支那

ほんとうの支那及び支那人を知らんとする人々のために書かれた支那解剖書。

定價一圓　送料十錢

今日の問題社發行

B・ニューマン著
大江專一譯

歐洲の發火點

歐洲大戰は、いつ、どこで勃發するか？　現下の歐洲は武裝せる二大陣營に分れた火藥庫である。この巨大なる火藥庫に引火する危險性は刻一刻に迫りつゝある。本書は著者ニューマン氏が十數年間歐洲の危險地帶を實地に踏査して書下した歐洲情勢の一大分析の書である。現下歐洲の情勢に關心を持つ者の一讀すべき書として世界に知られてゐる。

四六判三一〇頁上製
定價一圓六十錢
送料十錢

高橋亀吉著

戰時經濟講話

戰時經濟と平時經濟とは如何なる相違があるか。長期建設經濟の動向はどうか？

定價一圓三十錢　送料十錢

藤原銀次郎著

事業學人間學

腕と力によつて今日の王子製紙を築き上げた藤原さんの事業談處世談

定價一圓　送料十錢

清浦奎吾著

奎堂夜話

八十二翁、清浦伯が語る人生錄、回想記、興味津々たるものがある。

定價一圓　送料十錢

今日の問題社發行

ドイツは語る

H・シヤハト監修
三上正毅譯

本書は新生ドイツの眞相を知る唯一の入門書であつて、現ドイツの各國務大臣大學教授、勞働運動指導者、スポーツマン等各方面の權威者が各專門の部門に就て、ドイツの現狀を說明して、ドイツの指導原理を明かにした書である。ヒツトラー大總統及びリツペントロツプ外相が序文を寄せて本書の內容を證明してゐる。現下日本各方面の人々が是非一讀すべき書である。

四六判三八〇頁上製
定價一圓六十錢
送料十錢

人間・鄕誠之助

後藤國彥校閲
野田禮史著

日本財界の大御所鄕の生涯を赤裸々に書いた人物傳記である。小說よりも面白い。
定價一圓六十錢　送料十錢

戰將・謀將傳

松下芳男著

逸話とエピソートを織り込んだ近世日本陸海軍の名將五十人の小傳と戰史。
定價一圓七十錢　送料十錢

身邊雜話

宇垣一成述

大命拜辭、外務大臣辭職と波瀾多き宇垣大將の放談、心境を綴つたもの。
定價一圓　送料十錢

今日の問題社發行

最新刊

生活を正す

伊福部隆彥著

四六版・上製
三五〇頁
定價　一圓六十錢
送料十錢

聖戰の遂行に邁進する非常時日本をしつかと双肩に荷ふ我々の責務は實に重い。 その責務を果すためには先づよき國民となる事である。そのためには何が必要か？

第一に生活を健全に營む事でなければならない。こゝに現代の達人、**伊福部氏が『修身治國平天下の道』を說く所以がある。** 本書こそは、正に著者が血を以つて綴つた修養の書である。

今日の問題社發行

大藏大臣・石渡莊太郎述

興亞經濟の前途

四六版・二五〇頁　定價一圓
上製・寫眞入　（送料十錢）

好評六版

非常時經濟の前途は果してどうか――これは銃後を守る我々の誰でもが心から知りたい問題である。

樂觀か？　悲觀か？　非常時經濟の大臺所をしつかりと守る石渡藏相が愛國の熱情に燃えつゝ、醇々として興亞經濟の前途を說く。一家の主人も、主婦も、青年も、この大臣の言葉に耳を傾けよ。

すぐ書店へ！　品切れの節は直接本社へ!!

今日の問題社發行

最新刊

大宅壯一編

支那事情辭典

三五判・上製箱入
三三〇頁
定價　一・六〇
（〒一〇）

毎日新聞紙上に現れる支那の人物・土地・文化・政治等々に關する言葉を一々丹念に說明し、その意義を解說してある。

本書に揭載されてゐる言葉は、悉く現支那事變を中心として取捨選擇せられフレッシュな角度から、最も簡單に、しかも最も理解しやすいやうに排列し一讀、直ちに今事變の全貌、全支那の情勢を寸妙にして納得され得る仕組みになつてゐる。

數回、支那現地に遊び、親しくその人情風俗を眺めてきた編者が、年餘の苦心の結果、やつと完成したものである。

『支那事情』早分りの羅針盤たる事を疑はない。

是非机上に一册を備へられよ!!

毎月三回・一の日發行

情報と解説

時局が分る、問題と事件の眞相が分る

次から次へと時局は進展し、問題や事件が起る現代に於ては簡單に要領よく早く正しく問題の眞相を知ることが必要である。本誌は此の要求に答へんとしたもので、新聞や雜誌では分らぬやうな問題を捉へて權威ある筆者により解説檢討せられた時局パンフレットである。

直接購讀會員募集

創立五年の歴史を有して、內容と權威との點で日本一の定評ある本社のパンフレットは『情報と解説』の題號下に毎月三回定期に發行して會員に配布します。毎月四五十頁の四六版型で問題は新らしく、內容は充實して居ります。目下全國に五萬の會員を擁して居ります。直接購讀希望者は半ヶ年一圓八十錢、一ヶ年三圓五十錢（送料何れも不要）の會費と共に本社へ直接御申込下さい。新刊より順次御送本致します。

迅速な情報、正確な解説、權威ある筆者

今日の問題社發行

788
20

14
8,15